
ヒサルキゲームの物語

秋兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒサルキゲームの物語

【Nコード】

N5980A

【作者名】

秋兎

【あらすじ】

相原アキラは、ゲームが趣味の平凡な高校生。ある日、彼の元へ一つのゲームソフトが降ってきた。それには『あるゲームの物語』と書かれていた。あらゆるゲームを知り尽くしていた彼が知らないゲーム。そう。これは『被猿鬼』の世界。誰かが誰かの皮を被り、そして惨劇は始まる。さて、貴方にはこの世界の真実が解りただけでしょうか？ 7/8 特別おまけ あるクリスマスの物語【中編】更新しました。深柳凜の挿し絵つきとなります。（これから以後の話すべてに挿し絵がつきます）

プロローグ

あー、君達。

突然だが、ここに大いなる宣言をしよう。俺はゲームが大好きだ！あの非現実的な魔法、美しい街並み、喋る動物など魅力あふれる世界がそこにある。

とはいえ、俺にだって常識というものはある。

つもりだ。

もし、あんな魔法などがあつたとすれば世界は混乱してしまうだろう。犯罪などもすぐに溢れかえってしまう。透明になってしまう魔法なんて出来上がった日には目も当てられない。別にやましいことを考えているわけではないぞ。

そして美しい街並みだ。いや、これは現実にもあるだろう。

だがそれは、新宿超高層ビルから眺める夜景や外国の公園（パークだぞ、パーク！）もしくは蒼穹の下、軽やかに流れる風を全身に受けながら体を揺らすチューリップ畑など、到底田舎者のましてや高校生如きである俺には手が届かない風景であるのは確かだ。

そして喋る動物によると、これはもう悲惨としか言いようがない。現実世界でそんな動物が生まれたとしよう。

あらかじめ言っておくがこれはあくまでも仮定の話だ。

クラスのとて可愛く清楚で可憐なそしてめんこい女子が、たわわな胸を揺らしながら女の子走りではあはあと息を切らし、俺の席の前までやってきたかと思うとキュートな唇でこう言うんだ。

「ねえねえ、あきらくん！ 飼育していたうさぴょんが子供生んだんだよ！ あの、みたい……？」

当然、別に仲良くもない女子に興味も沸かない話を突然振られた

俺は啞然としながらくだらないと思いつつ、

「マジで！　みたいみたい！！」

こう言ってしまうだろう。これは男の性だ。認めろ、君たち。

だが、ここまでは良くある妄想話だ。

「えつとお、ちよつと珍しい子なんだけどお。んつとお……。ほらっ！」

もじもじと、今時の子にはない恥じらいを惜しげもなく俺にぶつけていた彼女が差し出した手には、確かに生まれたばかりであろう小さく可愛らしい子ウサギがうずくまって眠っているではないか。

俺は別段、動物などに興味をもったことはないが（ペットなど飼った覚えがない）なんと魅力的なのであろう。　生命の素晴らしさがそこにある。

やはり、子供というのはどんな生命体のそれであろうとも美しいものののだ、ルールールー！。

起こさないようにしようと目を細めて眺めていた俺の優しさオーラに気づいてしまったのか子うさぎは赤い瞳をパチクリとし、俺を見上げると、

「やあやあ、そのお兄さん。ちよつとお尋ねしたいのだがここはどこかな？　私の母親はどこだろう。ん？　もしや私を抱いているこの麗しき女性が母親なのであろうか。これはまいった、傑作だよ傑作。ならこの長い耳はどう説明してくれるのかね。いや、嘘だよ分っている理解してるさ。いやだな、ただ君達をからかってみようと思ったままだよ。それで話は変わるが井村屋と木村屋の違いとは

……etc, etc」

そう、きつとこのような事態に陥ってしまうだろう。ちよつとサンプルに問題があったかもしれないが、無きにしも非ずなのだ。

もちろん例え話なのだから無い話なのだが。

つまり何が言いたいのかというと、こんな世界ありえないのだ。

俺だつてもう高校二年生にもなる。そろそろ進路でも考えようかななどと思いつつ、いつものように高校に行き、帰ってポテトチツ

プでもつまみながら一休みした後、電車で揺られ塾に行く。そして帰りの電車の中、三十分だけ頭を休める為に楽しみの携帯ゲームにスイッチを入れる。

ごくごく普通の日課だ。そうだろう？

ああ、なんて素晴らしいのだろう。ビバ普遍的な日常生活。平和な学園生活を送れる日本社会に感謝だ。

「これでよし、と」

俺は夏休みの作文を書き終わるとベッドに突っ伏した。我ながらゲームを題材にした作文とは思いついたことをしたものだ。ついつい書き始めたら熱が入ってしまった。だが、今更書き直すには時間が足りないし、後悔なんぞしてないけどな。

そう、明日は悲しくも突然おとずれる登校日なのだ。忘れようなどと考えようものなら宿題という闇の勢力がそれはもう果てしない程に強大さを増していく。まあ、こうやって無事に最後の宿題を終わらせることが出来ただけよしとするか。内容など二の次だ。少々、最後は強引な気も否めないが。

ようやく悪しき呪縛から解放された俺は、窓を開けると心地良い夜風を頬に受けた。夏というものはどうしても好きになれないが、夜は幾分か気持ちが良いものだ。窓の外に目を向けるが、いつもと変わらぬ田んぼの世界がそこに広がる。田植えばかりでいいのかお爺さんお婆さんそして県知事よ。

それにしても、もうすでに真っ暗闇なんてどこまでここは田舎なのだ。まだ夜九時半だぞ。

「おっと、蚊が入ってしまったからそろそろ閉めるか」

断じて独り言ではない。遠くでリンと鈴虫の声が鳴ったろ？

さてさて、一仕事終えたあとは軽くゲームでもするか。寝るにはまだ早いしな。

愛用の携帯ゲーム機に今日は何を差そうかとゴソゴソとしていたわけだが

ない。ないのだ。この俺を燃えさせてくれる熱いゲームがない！
ほとんどやり終えたゲームばかりで、新作は財布の都合で買っていないかった。

こうなったら是が非でも欲しい。たとえ旧作であろうとも。これではまるで禁煙をしていた重度の喫煙中毒者が陥る禁断症状と変わりがないな。

我ながら頭が痛い思いだが、いやいや思い立つたが吉日、マイバ
イシクルにまたがり、

「待つてろよ、熱い情熱！」

もちろん小声で言っただぞ。いそいそとペダルをこぐが行けども行けども変わらぬ風景。隣町のゲームショップまで自転車を走らせても二十分はかかる。なぜ俺の親はこんなド田舎に腰を据えているのだ。遊ぶ場所などすべて隣町任せではないか。それでお前は悔しくないのか。

とまあ、行きはよいよい帰りはなんとやらとはよく言っただもので、めばしいゲームソフトを見つけることが出来ずあえなく断念した俺はチャリの鍵を探すべくポケットに手をつ込んだ。

「……どこ入れたっけか」

そして、再び通るこの無音に続く畦道を進むにつれ俺の先ほどの燃え上がるようなテンションはやはりというべきかその手の遊園地などで絶大な人気を誇る垂直落下アトラクションのように駄々下りの一方を迎えていた。

こんな心持ちの時は決まっていっつの妄想に耽るのが常だった。何を妄想するのかって？

なんてことはない、さつきとは逆の話さ。

ああ、こんな退屈な日々はもう飽き飽きだ。なんで俺はこんなつまらない世界に立たされているのだろうか。

目を閉じる度思っね、剣や魔法、おまけに美少女といったものが

飛び交うゲームの世界に通じる時空の穴でも落ちてないものかってね。そりゃそうだろう？

何が面白くてせこせこ勉強しているのかって、急かされるように塾へ通う足も笑ってるさ。そんなことより経験地稼ぎにでも勤しんだほうが足も幸せつてもんだろう。

なんつってな。そんなことを頭のどつかしらで考えてりゃ鬱な気分はたちまち霧散し、そして気付いた頃には家の前のはずさ。

だが、今日ばかりはそれが違っていた。今思えばこの時点で俺の普遍的な日常生活、はたまた平和な学園生活が一変したのかもしれないな。

「どわ、あぶねえっ」

あるものがのそつと道をよぎり、俺はたちまち錆付いたブレーキを叩き起こした。

鳴き疲れた蛙でも出てきたか？ 田舎ならよくあることだ。踏んでしまったら飯の量減るぞ。そりゃもう気持ち悪くてな。

自転車から降りると俺は鈍重な動きの蛙が別の田んぼへと引越す様をぼーっと眺めていた。そして、そいつがようやく渡りきったところで、

ガンッ！

ん、何の音だ？ 衝撃が伝わってきたって事は、と……。自転車のカゴを覗くと案の定その物とやらを発見した。

空を見上げるが、変わった様子はない。改めてカゴの中のものをつかみ出すと、

「なんだこれ、ゲームソフト？」

このゲームにはこう書かれていた。

これはあるゲームの物語です。

もしイヤな事があったり気分を転換したい場合。このカセットを

入れてみてください。

それはとても非現実的であり、あなたの心の渇きを潤してくれる
ことでしょう。

しかし、くれぐれもご利用は計画的に……。

っておいおい、こんなうたい文句、今時小学生でもひっかからな
いぞ。

プロローグ 貳

「……うーむ」

しかしながら、悲しきかな人間つつうものは好奇心にはそう簡単に打ち勝てないわけで。

早速家に戻ると、俺は改めてそのゲームソフトに目を向けた。

「こんなゲームあったか？」

ラベルにはタイトルが記名されてるのが普通なのだが真っ黒に塗り潰されていて読めん。まあ、先ほど裏側に書かれていた『あるゲームの物語』が本来の名前なのだろう。

だがそんなタイトル、聞いた覚えがない。ゲーム通を自負するこの俺がだ。

そして困ったことにこれには説明書というものが付属されていないのだ。丸裸で降ってこられても、これではどう遊べばいいのかわからん。

このカセットロム自体は、俺の愛用する新型携帯用ゲーム機のものなのだが。

ふむ。

しけた病み付きで有名のえびせんをパクつきながら、このゲームについて自作のパソコンで検索してみるが、カスリもしない。

いや、一つだけあったというならば、それは発売中止となったソフトの一覧に名前が載っていただけであり、それならばこれはなんなのだという話になる。

しかも空から降ってくるなど、到底ありえないことなのだ。

だが、現実にはそれは俺の手にある。これはいくらかミステリアスではないだろうか？

それとも、財布の寒い俺への神様からの贈り物だと考えればいくらか納得がいくかもしれない。

ありがとう神様。そして、次があるならばもつと俺にも分かるゲ

ームを贈ってくれ。

さて、どうしたものかね。腕を組み思案していると、

「おにーちゃん！ お風呂先入っていいよね？ って、寝てるのかな」

ノックもせずに俺の部屋に入ってきた失礼千万なこいつは我が妹である。

名はサナ。

あらかじめ言うておくが、世のあらぬ男性達が描く妹像とは正反對と断言しよう。

真実の妹というものは、なんと言ったらいいだろうか。

もし、俺と妹がコタツに入りながらテレビでも見てミカンを食べていたとしよう。

そいでもって、ちょっと最後の一つを手にとろうものなら、容赦なくコタツの中から俺の弱点であるくるぶしを狙った蹴りが連打される程ひどいものなのだ。

きっと二十ヒットはくだらない……。

我ながらもつと良い例えはなかったものだろうか。

とにかく、俺が声を大にして言いたいことは、くれぐれも勘違いしないようにしてほしいということだ。そう、身を滅ぼすぞ、君達。「よく言うよ。この部屋にドアなんかないじゃん。それにここは、あ・た・しの部屋っ！ おにーちゃんは仕方なく隅っこに住まわせてやってるだけなんだからっ。感謝してほしいくらいだもん！ ふーんだっ」

ほらな。

ちなみに、こいつは茶のショートツインだけが特徴の天才的な凡人ぶりが魅力的なところである。たしか小七ぐらいであっただろうか。

「小七って何だよう、あたしは中一！ てゆーか、それ褒めてないじゃん！」

おお、そうか。無事に卒業できたんだな。俺はサナの頭をたまた

まあった求人雑誌でポンツと叩き、

「てゆーかあ、なんて口にするんじゃないやありません。もっと、おしとやかにしたほうがいいと思うぞ。この際、演技でもいい」

「ほへ？」

妹は首をひねっていたが、しばらくしてハツと何かに気づいたような表情をした。

「もー！ やだなあ、お兄ちゃまったらあ。やっぱし、女の子はおしとやかにしないといけないよねっ！」

おい、ポーズを取るなポーズを。どこを向いてやがる。俺はこっちだ。前を向け。

「……もういい、さっさと風呂へでも何処へでも行ってくれ」

「はいっ」

狐みたいなポーズを取り、去っていくサナの後姿を見ながら、なるほどこれが殺意というものかと俺は深く感心した。

しかし、これほど兄の威厳というものが無いとは悲しいものである……。

「やれやれまったく。これで邪魔者はいなくなったな」

俺は気を取り直すと、意を決し、カセットをゲーム機に入れてみた。

すんなり入ったところを見ると、やはりこれはこのゲーム機のソフトらしい。

さてさて。あとは電源を入れるだけなのだが、俺はいつもゲームをする前にやる事があるのだ。

聞いて驚くな諸君。

それは、ほとばしるほど熱き煎茶を入れ、手の中の小さな冒険に備えることなのである。

ズズッと茶をすることで身も心も熱くなれるのだ。

そこ、かわいそうな人間を見るような目をしないでくれ。

やがて、テーブルの上に湯気高々な煎茶がセットされ、

「そんじゃ、早速う！」

俺は高鳴る胸を押さえながら電源に手を伸ばした。カチツつとな。
「……」

画面を食い入るように見るが、待てども一向に変化が表れない。
一度取り出し、カセットの端子に強く息を吹きかけ再チャレンジを試みる。

だがそれでも無反応。

「念のためにゲーム機のほうも吹いとくか」

それからあらゆる手段を持ち入り試してみるがどれも暖簾に腕押し、糠に釘、豆腐にかすがいつてなもんだ。例えば方がビミョウにずれているのはご愛嬌だ。

「ま、そりゃそうだよなあ」

やはり、拾い物などに期待してはいけないのか。

すっかり意気消沈し、電源を消そうとしたその時、突如暗転した。
ゲームの画面が？

いやはや、それが俺の目の前が暗転したのだったからたまらない。

第壱部 相原アキラの場合

どれだけその場に突っ伏していたのだろうか。

波の音と、強い潮の匂いが俺の安眠をこれでもかと妨げる。

「ほら、あんたいつまで寝てんのよ」

うーん。サナ、しばらく寝かせてくれ。お決まりだが、あと五分だけ頼む。

そう言い寝返りをうつが、

「さっさと起きろってんのよ、ゲームの中で寝てんじゃない！」
耳をつんざくような金切り声。

は、ゲーム？ ホワイ。何を言っているんだ。俺は今、憧れの先輩に振られて傷心旅行に伊豆半島へとやってきたとてもカワイイソカワイソな青年であるぞ。さすがに崖から飛び降りる程度胸はないので、ホテルのカ二道楽を満喫している最中だがな。うむ、おかわり。
「ちっ」

未だ夢心地の俺に、そいつは容赦なく刃物のようなもので俺の背中を斬りつけた。

「いててて！ こ、こら、お兄ちゃんを斬り捨てる妹がどこにいるのだ」

よたよたと立ち上がると、俺はあからさますぎる違和感に眉をひそめ、当然ながら周りを見渡してみた。

何処かの海岸か？ エメラルドに輝く海なんて民法テレビですらあまりみかけないぞ。

もしかして未だ夢の中なのかもしれない。いや、夢だろうが何だろうが、サナの奴め。兄貴に刃物をつきつけるとは、これはとんでもない家庭内暴力だぞ。

拳を握り、一刻も早く言ってやりたい。

頼むからやめてくれ、もやしっ子の俺に勝ち目がないだろ。

「おい、サナ！」

しかし、振り向いた先に凜として立っていたのはサナではなく、もちろん凶暴なトリケラトプスでもなく、一人のどこにでもいそうなブレザー姿の女子高生だったのである。

いや、何処にでもいそうというのは語弊があるのかもしれない。なんせ、そいつは俺が今まで生きていた中でナンバーワンと言える程の容姿の持ち主だったのだ。

もちろん、テレビの中のアイドルとか女優とかを抜きにしてな。そして、その女は意志の強そうなブラウンアイで俺を見上げたのだ。

「ふん、やつと目が覚めたの？　ぶあーか」

肩まである茶髪に、後頭部の両脇でちょこんと髪をくくっている姿はとても日本人では、いや、今生きる現代っ子では極めて珍しい髪型の部類に入であろう。

そいつは値踏みをするかのように俺をジロジロと見ると、

「なんであんなみたいな弱そーな奴が来たのかしらね」

溜め息混じりにそう言い捨てた。おいおい、俺だって何故こんなところに飛ばされてしまったのか理由を訊きたいね。十文字以内で簡潔に。

「これがゲームだから」

笑顔ですっぱりと言いやがる。

はーん、なるほど。そういう事か。これが、あるゲームの物語というゲームってわけか。

なんかややこしいな。ええい、詰まるところのゲームの大御所リアルプレイングゲームなどの冒険なりをリアルに擬似体験出来るってわけだろ？　いや、もしかしたらこいつを落とす為のシュミレーションゲームかもしれない。

はたまたこいつをボールか何かで捕まえ、他の美少女と戦わせるとか……。これは画期的だ！　早速行動に、

……いやいや、待て、早まるな俺。そんなことあるわけがないだろう。いくらゲーム脳まっしぐらな俺でもそれくらいの常識は持ち

合わせているつもりだ。まずこんな時はお決まりの文句でも言っておこう。

「どうなってるんだこれ？　そして、お前は何者なんだ」

こんなところか。ついでに願わくば弱そうだからといって俺を斬らないでくれ。経験地などもってないぞ。　まだ若いからな。

そいつはあからさまな不愉快面で、

「はいはい、順を追って説明するからちよつと黙って。ったく、説明書くらい読みなさいよね。……えー、コホン。これはあるゲームの物語という、試験的なゲームです。被験者として選ばれた三人が一組となつて現実世界に近いこの物語を攻略していき、最後に塔の最上階にいる敵のボスをぶつ倒すという極めて王道のロールプレイングゲームです。そして、めでたくクリア出来たあかつきには賞金として現金一千万円と本ゲームが完成した際への特別優遇券を差し上げます。ま、大体こんなところね。あとは帰ってから説明書でも読みなさい」

すまん、俺の情報処理能力が劣っているのか、はたまたこいつの説明が突拍子もないものなのかわからんが、まったく理解が出来ない。マジでそういうゲームなのか？

しばらく頭の中で説明を噛み砕いた後、俺は閃いたとばかりにぽんと手を打ち、

「要は、この世界で俺以外に二人の仲間をみつけボスの本拠地に乗り込んで行き、桃太郎よろしく鬼を泣かしたらお宝をもつて万々歳ってことでいいんだろ？」

我ながら素晴らしい変換能力だ。

「単純な頭なのねえ。……あんだ、おかしいと思わないの？　このゲーム」

ああ、おかしいだろうさ。だが、降ってきた時には少なくともこんな面白そうなゲームだとは思わなかったね。

どんな仕組みになつているのかは知らないが、あの冒険が俺のこの手で実際に出来るなんてこれほど熱いゲームがあるのだろうか。

これが未来のゲームの形となりうる実験とあらば俺は喜んで手を貸そう。賞金も、まあ、欲しくないと云ったら嘘になるが。

「で、俺はこれから何処に行けばいいんだ？ 武器も何もないぞ」
ボリボリと背中をかく。

なんせ、自慢じゃないが着古したＴシャツに短パンだけの格好で、堂々と海辺に仁王立ちする勇者など後にも先にも俺だけじゃないだろうか。

「武器はこれよ。あと、服はアジトで着替えましょ」

手渡された武器というものだが、明らかに俺の鮮血が付着していた点を除けばそれは目を見張る程の美しい剣であった。

クリスタルか何かで創られたものであるうか、蒼く透き通っている。そして刃の中心部分には紅い宝石が埋め込まれており、俺は感嘆の声をあげた。

「ほほお、中々忠実に出来ているものだ。すごいな、これは」
ずっしりと重い点もそこはかとなくリアルだ。

「じゃあ、もたもたしないで付いてきなさいよ。これからあんたがこの世界で一番お世話になるアジトへ連れてってあげるから」

そうツンと長い髪とスカートを翻し、そいつは歩き出す。

ドスドスと音のしそうな歩き方だな。ま、確かにここに居ても仕方ない。

「ちよっと、待てってば」

俺は慌ててそいつの後をついていった。

沈黙。

気まずいことこの上ない。

やれやれ、ここで俺が気を使って話しかけたところで俺の心を締め付ける一言が返ってくるに違いない。

そこでも思ったね。出来るだけ案内人であろうこの子のイメージをこれ以上崩さないようにしなければならない。俺なりの紳士の務めというものだ。

こんな時の行動は決まってる一つ。

暇な午後の授業に窓の向こうの飛行機雲を眺めるといった感じで、周りを何気なく観察してみるのだ。

……うーむ。青い空、緑に茂る山々。リゾート地かここは？ まさか外国じゃあるまいな。

季節としては春から夏にかけてなのだろうか。気温はさほど高くはない。むしろ適温と言えよう。

夏だと思わせるのは、ミンミンゼミの鳴き声が聞こえるからだけであって、季節の概念がこのゲームにあるのかさえ疑問だ。

しかし、南の島で見かけそうな売店や、気のよさそうなおばちゃんたちの挨拶声、往来する車、列車の音まで聞こえてくるこの世界がゲームの世界だとは到底思えない。それ程創り込まれているという事なのだろうか？

しばし入道雲を見上げながらそんな事を考えてみるものの、やはり答えなど出るわけもない。

仕方なく視線を前に戻し、彼女のぴょんぴょんと揺れる後ろ髪を眺めるでもなく見ていると、突然そいつは立ち止まり、

「あつ」

と言うと、満面の笑みで振り向いた。それはもう眩い笑顔だったね。出来ればそれからそいつが放つ言葉はなかったことにしておきたいがな。

「そうそう、言い忘れてたけど、私の名前はヒサキっていうの。記念すべき最初の仲間ってわけ。遅くなっただけど宜しくねっアキラ」

まあなんだ。まだまだ愛想笑いなど人間が出来ていない俺はというと、まさしく苦笑全開に、

「はは……マジで」

大きくため息をついておくことにした。

「嬉しそうねー」

しかし、そのヒサキとやらは気を悪くするといった様子はなく、ニヤリとの表現が当てはまりそうな微笑を返して再び前進を開始する。

まったく、仲間の選択肢というものがないってことなのか。大体のゲームにおいてそれは当たり前のことなのだが、よりにもよって何故、天然系魔法使い美少女ではなく、こんな暴力女が仲間なのか理解に苦しむ。これでは早くもゲームオーバーを宣告されたに等しいではないか。

そして、同時にしみじみと思う。三人目はどうか美少女とは言わない、せめて普通の人間をお願いします、ってね。

ゲームスタート

五分後、長く続く街路樹を抜けた俺達の前に大きな屋敷が現れた。屋敷といっても城のようなものではなく、伝統的な日本家屋といった形だ。

こんな金持ちが好きそうな屋敷に誰が住んでいるというのだろうか。

ヒサキは門の前で立ち止まると、

「着いたわ。ここで三人目が来るまで私達は待機。いいわね？」

そして歩き出す。マジかよ、こんな大そうなお屋敷がアジトだって？

俺が思い描いていたのは、もつとジメジメした洞窟などにテントを張って、雨やら雪やらが降ってしまつた際には体を冷やさないように、とお互い体を寄せ合うそんなイヤーンなアジトを期待していたのだが。

「ばーか。なにアホ面してんのよ！」

うるたえる俺に容赦なく怒声を浴びせる。

呼び鈴などないのだろうか、それとも押す必要がないのだろうか。そいつはガラツと戸を開けると俺を居間へと招待した。

そこは無駄に広々としていて、目に付くのは中央の年代を感じる木目の大きなテーブルに、それを囲むように敷かれている座布団程度である。他には年季の入った小物などが置かれているが、そんなものに詳しい高校生など滅多にいるものではない。つまりはよくわからんし、興味も沸かないので触れないことにしておこう。壊すといんでもない額でしたとか本気でありそうだな。

「さーてつと」

ヒサキは、さて案内は終わったとばかりにスリッパを履き、

「お茶煎れるから座つてて」

と、奥へ引つ込んで行つた。

「あんま気を使わなくていいぞー」

言いつつ俺は適当な座布団にあぐらをかいた。しかし、あいつが茶を煎れるとは意外だ。俺の勝手な偏見かもしれないが、ああいう男勝りな性格の奴は料理が苦手というイメージがある。ま、茶と料理は別モンだけどな。

「もうすぐ先生が降りて来るからよ。あんたはついでよ、ついで」
こいつめ、俺がせっかく自称最初の仲間A子さんの認識を改めようと試みているところに……。

まあいいさ。俺は大人だからな。

「ついででも何でも美人の煎れたお茶を頂けるなら光栄だね」

「ふふん、有り難がつて飲みなさい」

やれやれ、まったくいい性格してやがる。

それにしても気になるのは、先生？ 誰かこの屋敷に住んでいるのか。

いや、普通に考えたらこの屋敷の主だろうな。しかしながら『先生』とのフリーズに、俺のクラスの担任がイヤでも頭をよぎる。そいつはどんな奴かって？ タコ社長を地で行ってるような人さ。嫌いではないのだが、いかんせん女子には不人気らしい。

そりゃ、たまに酒臭かったり、朝のホームルームに親父ギャグ連発などされたら引きもするか。きつと似たり寄ったりな奴が来るのだろう。こんな屋敷の主といったら相場は決まっている。

しかし驚いたね。

程なくして、その先生とやらは俺の前に現れたのだ。

「あらあ。あなたがアキラ君？」

俺がちよっとトイレを借りようかと、立ち上がりかけた所にその人は入ってきた。

スレンダーな美人で、銀縁眼鏡と泣きボクロがとても色っぽい。

髪の色が緑という点を除けばどこかの秘書でも十分通用しそうな容姿だ。むしろそのコスチューム姿を是非とも拝みたいね。

当然俺はタコ親父だろうと油断していたが為に、

「は、はい。どどうぞよろしく！」

などと無様な回答を強いられることになったわけだ。

彼女はクスッと笑うと、

「立ち話もなんだから座ってお話しましょう。三人目の子を待ちながら、ね」

出るものも引っ込んでしまふとはこのことだろう。しびしび座ると彼女も向かい合うようにスツと座った。

う、うーむ……。

妙に着物をだらしなく着ているもので、どうしても胸元に目が行ってしまふ。これはF……いや、Gか？　って、そうじゃない！

この多感なる時期の俺にこれはあまりに毒過ぎる。これではまずい。やらしい子ね変態スケベと放り出される前にどうにか会話を始めて気を紛らわせないといかん。

「あの、先生。ヒサキもそうでしたけど、なんで俺の名前わかるんですか？」

「ええと、私がヒサキちゃんに貴方の名前を教えたの。何故知っているかは企業秘密。もちろん三人目の子の名前も知っているわよ」

三人目？　やはり仲間は決められているのか。

「そうねえ。なら、アキラ君はどうして私のことを先生と呼ぶのかしらねえ」

おっとり微笑む。美しすぎて目眩というものは本当にあるのだろうか。こちらまでボーッとしてしまふような笑顔だ。

「え、ヒサキがもうすぐ先生が来るって……。ひょっとして人違いでしたか？」

面白そうにゆっくりと首をふる。何故か、からかわれてる気分になる。三人目について少し訊いてみようかと考えた時、呼び鈴が鳴った。

「はい」

奥からヒサキの声がして、次いでパタパタとスリッパの音がする。

郵便物でも届いたのか？　ってそんなもんあるわけないか。ゲームの世界に贈り物を出す奴などいるはずもないしな。

はて、だとすると……。

「そう。もう着いたみたいよ」

先生が俺の顔を見つめながら、お見通しよとばかりに目を細める。しばらくして、ひょいっとヒサキが現れた。

左手に湯飲みを乗せたお盆を持ち、右手には三人目であろう学生服姿の少年の腕をガツチリと握っていた。

器用な奴だ、ウェイトレスのバイトでもやっていたのか？

いやいや、それよりも肝心の三人目なのだが、俺の願いはきつちりと天に届いていたらしく、極めてフツの少年が涼やかな笑顔でそこに立っていた。

「初めまして。僕の名前は深柳リンといいます。宜しく皆さん。それにしてもこの世界がゲームだなんて未だに信じられないな」

そうだろうそうだろう。とても模範的な感想を述べてるこの少年は肩ほどまでいかなくらいの金髪ショートカットに黒い瞳。他に特徴と言えるものといったら、手に持っている古めかしいハンドボウぐらいだ。これはきつと俺の剣と同じく、ヒサキから受け取ったものだろうな。

にしても、『ミヤナギ』とはあまり聞かない苗字だな。

「ちっす、宜しく。俺は相原アキラだ。もちろん呼び捨てで構わんぞ」

「ああ、僕も好きに呼んでもらって構わない」

深柳が手を差し出す。俺も反射的に手を差し出し、握手。そいつは白く長い指をしており、まるで女みたいだった。

「うふふ。三人集まったことだし、こちらに座って」

先生が深柳を俺の隣に促した。やがてヒサキも緑茶の入った湯飲みを配り終わるとやはり俺の隣に座った。

しばしの無言。なんとなく居心地が悪い。

一斉に皆お茶をすする。そして少しだけ困ったような顔をして初

めに口を開いたのは先生だった。

「あらあ。そんなに固くならないでいいのよ。この世界では私たちは家族のようなものなんだし。もちろん私はお母さん役ね。なんてね、うふふ」

もしこれがさっき俺が描いてたであろうタコ親父のセリフだったのならば、俺はあからさまに顔をしかめて緩やかにうな垂れていたことだろう。

だが、こんなド美人に言われたら……皆までは言うまい。

「はい、お母様っ」

そう敬礼しながら発する俺の心にためらいなどない。

「せんせー。このバカアキラうざけてるんですけどー」

さてさて、なんだそのトンチキな造語はとか、ドキドキな幼馴染でもないのに馴れ馴れしくバカを付けるななど色々と突っ込むべきセリフが尽きないが、このおなごを触発することは俺に百害あつて一利なしに間違いないと第六感がそう告げているわけで。ま、所詮わが身が可愛いのだ。

「別にふざけてるつもりはないけどな。たださ、このお方の名前を知らない以上、なんて呼べばいいのかわからないだけで、」

「ふふっ」

笑ったのは深柳だった。彼は口元を押さえて、

「いや、すまない。まさか何も知らない人がこの世界にやってきたとは思わなくて」

そんなもん説明書を付けてよこさなかった神様にでも言ってくれ。……あらあら。そうねえ、自己紹介なんていらなないかと思っただけ、説明書を読んでない子がいるみたいだから軽く挨拶しておくわね」

彼女は思い出すように上を見上げ、そして微笑を崩さず、

「私の名前はお竜。貴方達の保護者役であり、このゲームの進み方を教える先生役でもあります。困ったことがあったら何でも聞いてね。ふふ、今後とも宜しく」

なるほど、だから先生と呼ばれていたのか。流石にお竜さんとは呼べないから、俺も便乗しておこう。

「改めまして俺はアキラっていいいます。いやあ、説明書ついてなかったんで困ってたんですよ。でもこんな優しくて美人な先生に直に挨拶されちゃうなんて光栄です！ ははははっ」

と、気づかない素振りを極力滲み出したつもりだったのだが、いかんせん、ヒサキの凍るような冷たい視線がこれでもかと俺を貫く、痛い。

「こちらこそ宜しく願います先生。で、早速ですが僕たちはまずどこに行けばいいんですか？」

と、金髪少年。その通り。いつまでも仲良くお茶をしている場合ではない。これはゲームなんだしな。早く街の周りのスライムでも狩りに行かねば。その前に王様の頼みごとでも聞きに赴くか？

「そうね……。まず貴方達にはこの世界で自分達の力となる者を捕まえてきてもらいます。でも、その前にちょっとした実験をするからね」

真剣な表情でランプのようなカードをテーブルの下から取り出すと、軽やかに切り、やがて五枚のカードが裏向きに並べられた。

おいおいまさか、この期に及んでみんなでポーカーでもしましようつてオチじゃないよな。

「それも楽しそうね、なんて冗談よ。じゃあ、まずリン君から一枚めくってもらえるかしら」

順番にめくっていくのか。これはどういった実験なんだろう？

隣からゴクつと喉を鳴らす音が聞こえる。

何を緊張しているのか。

それから、三分くらいはジーツと穴が開きそうになるまで見つめていただろう。

「いーから、ぱつとめくっちゃいなさいよ」

ヒサキが頼杖をつきながら煽る。その意見激しく賛成だ。そしてまた三分経過。

「……なんなら俺がめくつてやろうか？」

俺が痺れを切らして訊くと、深柳はとんでもないと手を振り、「きつと、この一枚で力の一部が決まるんだ。安易に選ぶわけにはいかない」

などとまたカード選びに戻った。力、ねえ。

慎重になるのもいいが、裏向きなんだからどちらにしる適当に選ぶしかないんじゃないか。

「じゃあこれにします」

散々迷った挙句、一番右端のカードを指差した。そいつは一度先生の顔を伺い、そしてゆつくりとめくった。

赤のクローバー。数字は三。

どうやら普通のトランプだったらしい。

「そうか、これが僕の力に……」

一人盛り上がってるところ悪いが、そのただの赤いクローバーにそれほど悩ましげな視線を送る奴は全世界中を探しても、そうはいないだろうな。俺はうなだれている深柳の肩に手を乗せ、ドドンマイと自分でも良くわからない励ましを送った。

続いてヒサキの番。早いもので、どこかのクイズ番組みたいな妙なためをせずにさつと直感で引く。

緑のダイヤ。数字は一。

ほらな、やはり普通、ではなかった。緑だと？ 最近のトランプはそんなカラフルなものも置いてあるのか。

「あんねえ。緑色なんだけどこれ。変色でもしたのかしら？」

そう言い、太陽に透かす真似をする。それで変色かどうか解るわけでもあるまい。恥ずかしい奴だ。もっと俺みたいに、柔軟な頭をもたなくてはな。どんな色が出ようが、ましてやどんなマークが出ようとも俺は決して動じないぜ。

そして、最後に俺が引くことになったのだが。

結果。ジョーカー。まあ、これくらいは予想済み……。

「つて、ジョーカー！？」

「いやいや、待て。もしこれが深柳の言う通り何かを見る儀式だったとしてもしょう。だとしたら、この場合どんな結果になってしまうか分からんジョーカーは抜いておくのが常なのではないのか。お、俺はもう一度引くことを徹底的に要求するぞ。納得がいかん。ありえん。これは何かの陰謀だ。リセット、リセットボタンはどこにある!？」

「はいっ、いいでしょう。リン君は中々鋭いですね。そう、これはまず君達の軸となる能力を与える為の儀式です。この基本となる力がなければ次のコースに進むのも困難と言えるでしょう」

割とあっさりスルーしますね。もうちょっとジョーカーに対するリアクションというものをですね……。

にしてもだ、俺は何故こんな大事な儀式に縁起でもないカードを引いてしまったのだ。つくづく運のない。

いや、待てよ。落ち着け。発想を逆転して考えてみるんだ。もしかしたらこれはとてつもない力を示唆するカードなのかもしれないぞ。

なんせ、トランプの束に二枚入ってるか否かの代物だしな。そうさ、それを見越して入っていた可能性だってあるじゃないか。つまりはレアカード。

さすがは凄腕ゲーマー、相原アキラだぜ。

ある焰の舞う場所にて

必死に自分へそう言い聞かせていると、先生はやおら足を崩した。

「ふう」

先生の緑茶を飲む姿を俺たちは月に一度しか買ってもらえない高級ドッグフードを待てと言われてる柴犬達のような目で見つめた。空になった湯飲みに慌ててヒサキが脇に置いてあった急須で再びそれを満たす。

「あら、ありがとう」

につこり妖艶な笑みを浮かべて、また一氣に飲む。ふっと一息。そこでやつと俺達の眼差しに気づき、

「な、なにか私の顔についてるのかしら？」

「あ、あの、説明の途中なのでは……。私達まだその力を頂いておりませんし」

まったくもってその通りだ。深柳と俺も同時に頷く。

「あらあ、もう貴方達に渡したわよ？」

のんびりと事も無げに言う。一体いつ何を渡されたというのだ。ふむ。そうだな。試しに小さな声で「出て来いさんだあぼるとお」などと言ってみるが、ヒサキに「うるさい、このバカ」と左横腹を強打され俺はあえなく断念することにした。

「あのトランプの意味、結局なんだったんですか？」

痛みに涙をこらえながら俺が言う。

「ふふ、説明不足だったわね。あれはトランプではないわ。良く似ているけど、この世界では力を決める神聖なカードなのよ。そうねえ、貴方達の世界で言うタロットカードみたいなものかしら。トランプには赤いクローバーも緑のダイヤもないでしょう？」

「緑のダイヤはないですけど、赤いクローバーなら普通のトランプじゃないんですか？」

俺の当然だろうという疑問に、何を言っているんだとばかりに溜め息をついた少年が、

「アキラ、クローバーやスペードは黒なんだよ。赤はハートにダイヤ。無論シンプルなランプということが条件だ。だが、僕たちの引いたカードは違う」

ぐっ……。そ、そうだったっけか？

「バカはほっときやいいのよ、リン。まったく、話の邪魔よねー」

とすかさず追撃ダメージを与えるのはもちろんヒサキ。

倒れているのにダウン追い討ちとは非道すぎるぜ。

はぁ、もつと俺に優しくしてくれるハーレムのようなパーティはないものだろうか。さすがにここまで来て新たに酒場へと足を運ぶ力など残ってはいないが。

「まず、リン君が引いたカード。赤いクローバーは、『のたうち狂うことの血の植物』を意味します」

のたうつ……。なんだって？ よくわからんが、それはまたバイオなカードだな。それが能力だというのか。そんな物騒なネーミングをした力なんぞ一体どう使うというのだ。

「血の、植物……？」

「そう、周りに植物や、そうね小さな草や芽でもいいわ。それらがある場合その植物たちの力を借りられるということです。例えば相手の足を引っ掛けたり、葉を鋭利な刃物にすることだって出来るわ。応用次第で何でも出来る面白い能力と言えるでしょう」

おもむろに急須からお茶っ葉をひとつまみすると深柳の手に乗せ、「その葉を自分の一部だと思いなさい。そして、心の中で命令するのです。刃になれと」

神妙に頷くと、深柳は深呼吸をして目を瞑った。すると、信じがたいことに先ほどまでしつとりと濡れていた葉っぱがみるみるうちにパリパリと乾いていくではないか。

俺とヒサキは顔を見合わせると、まだ目を瞑っているそいつの肩を揺すった。

「ねえ、リン。そ、それ切れるの？」

「そうだそうだ何か試しに切ってみるよ」

そいつは俺達の声が聞こえているのかいないのか、未だ目を瞑り、無言でその葉を自分の指にあてがった。

「!？」

おいおい、何も自分の体で試す事はないだろ。俺達が止める間もなく、スツと葉を動かす。そしてやはり、刃そのものだったらしく、深柳のしなやかな指から血が滴り落ちた。

やがてゆっくり目を開けると、痛々しい指を自分の眼前まで持ってきていき、先生を睨む。

「血の植物と言いましたね。『血』の意味を僕はまだ教えてもらっていません」

痛みに顔を歪める事もなく平然と言う。どこか黒い瞳が一層ねつとりと暗くなつたような気がする。

はは、俺は今更ながらに思ったね、こいつもフツーじゃないなと。「まあまあ、これから言うからそう睨まないで、ね。まずリン君、その植物を操る能力にはある致命的な欠点があります。これが何か分かりますか？」

分からないのなら、と話を続けた彼女に、
「葉も何もない場所ではこの能力を活かせない。そこで『血』が必要となってくる……」

まるで無感情なワープロのように言葉を綴っていく。

「そこまで分かっているのなら、もうその力について教えることはありません。貴方、凄いわ」

少し残念そうに言う、先生はヒサキへと視線を移した。

俺は気になり視界の端に映る深柳に目をやるが、そいつは「血が必要、血が必要？」と不気味に反芻していた。これではどうも危ない奴に見えて仕方がない。想像してみた。血が必要なだとぶつぶつ言いながら街を闊歩する金髪を。五分もせずに警察官が尋問に飛んで来るだろう。もしくは、輸血のために救急車がやってくるという

った所か。こりゃ、オカルトだね。

「では、ヒサキちゃん的能力について言うわね」

いささか、ちゃん付けに違和感を感じたが、ともかくも次はヒサキか。こいつには能力なんていらなと思うがね。ほっとしても勝手に敵をなぎ倒して行きそうだ。

ふと思い、少し疑問に感じていたことをヒサキに訊いてみる。

「気になっていたんだが、俺は剣、深柳はハンドボウといった武器があるが、お前は一体何を武器にするんだ？ 能力うんぬんの前にまずそれを訊いておきたいんだが」

そう問うた時のこいつの顔と見たら。皆に見せてやりたいくらいだったね。

何故、そこまでお笑い芸人みたいな顔芸で見られなきゃならんだ。

「素手に決まってるじゃない。剣とか銃なんて重い物、この、かつ弱い私が持てるわけないでしょっ」

まあ素手だろうとは思っていたがね。ちなみにセリフの冒頭部分「ちっ、良い所でうるさいわね！。んつとにこのヴァ力は！」と毒づいていたのは俺の独断でカットしておくぞ。

おっほん。

咳払いの音がして俺達が振り返ると、

「彼女が引いた緑のダイヤ、それは『焼き歪めることの翠の焰』という意味が込められています。これは比較的単純な能力ですね」

また、なんたらことのか。長つたらしいねどうも。

「えー！ 単純って、そんなあ。複雑な乙女なのにい……」

悲愴な声を出し、肩を落とすヒサキについ笑いがこみ上げて来た。ぷぷーっ、単発ゴリ押し能力なんざこいつらしいや！ と俺は心の中でひとしきり笑うと、表情を平静に努めるのに必死だった。俺の頬筋よ、なんとか耐えてくれ。

それにしても、乙女ときたか。今時乙女もないだろう。

「せんせー。もしかしてこれって、炎よ出るー出るーって思うと出

るんですか？」

本当の生徒みたいに挙手をして、すつとんきような声で訊く。ふつ、可愛いもんだね、やはりこいつはただの女の子にすぎないな。これだから困るんだ。女にRPGとか冒険ファンタジー物は難しいだろうな。まあ、現実なんてこんなもんさ。うんうん。

「え、ええ、そうですけど。でも出すのにはちよつとコツが」

ヒサキは「そうなんですかー」とにつこり八重歯を見せつつ笑うと、こちらを向いて大きく息を吸い、拳をかまえて、

「笑ってんのバレてんのよこのバカアキラ！」

一瞬何か解らなかつたね。強風が吹いたかと思うと、それは無防備な俺の左頬を抉った。そして更に第二波と言うべき緑の炎が猛然と迫ってきた。

「痛つてええ！ つーか、熱つちいい！ お、俺で試すなよバカ！」

「あ、ほんとに出た。凄い凄いっ！」

なあにが凄い凄い、だ。こいつ聞いちゃいねえ。どこのゲームに新しく習得した魔法なり技を仲間に試すバカがいるというのだ。というか、単純に強すぎるぞお前。バランスを考えろ、バランスを。今すぐにでもこいつのステータス値を確認したいくらいだ。

俺の無垢な美人さんへのイメージをことごとく壊し続けるこいつは、そんな俺の主張をあつさりまるつと無視すると、

「で、最後あんたなんだけど」

などと妙にすつきりとした表情で聞きやがる。そりゃ俺だって気になっていただけだよ……。

なんせ、ジョーカーなどという想像も出来ないカードを引いてしまったんだからな。

ある焔の舞う場所にて 貳

結局のところ、それは俺が危惧したとおりの結果になったと言えるよ。天国か地獄かどうかと聞かれたならば即答で地獄だと答えるね。さすがはジョーカー、死神が俺をせせら笑ってるぜ。

何故、ここまで俺が暗澹たる気持ちに浸っているのかと言うと、それは忌々しいカードについて発した先生の一言にあった。いいか、一言だぞ？ 皆の衆、落ち着いて聞いてくれたまえ。

「わからないわ……」

意義あり。

深柳の血の植物や、ヒサキの炎のパンチ（だったよな？）など、どこぞのゲームにでも出てきそうな能力を仲間A、B達はもらったというのにこの扱いはなんだ？

これならばいつその事、君は主役なんだから剣一本で戦うのよん。頑張れ九州男児どどんがどんっ！ とでも言われた方が遥かにマシだ。

むしろ、そうであって欲しい。実際もってこれでは明らかに俺は戦いを傍観する立場に回る羽目になりそうである。

みんなあいつは強敵だぞ、くれぐれも死なないように頑張ってくれ。俺は洗剤が切れそうだからマツキヨに行ってくるぜ。今日はポイントが二倍だしな。ああそれと、あんま服汚すなよな。この前のシミ、中々落ちなかったんだぜ。

これはシャレにならん……。

こんな炊事兼洗濯係りなんてあまりにリアルな妄想は慎むべきだったと頭を垂らすと、

「このケースは初めてなのよ。でもね、もしかしたらアキラ君へ何かしらの能力が渡ったのかもしれないの。そうだとすると、それがどんな力か私には知る術もないわ。ごめんなさいね……」

そんな申し訳なさそうな顔をされては、さすがに二の句が継げな

い。

ま、剣一筋で頑張る健気な勇者はその手のゲームじゃよく居るしな。

だがそれでもさすがに 炎やらツタやら眩いばかりの非現実的な能力を目の当たりにすると相当にへこむぜ。

今になって気付かされるね。魔法の使えない理不尽な主人公の気持ちというものを。

「先生、そんな気にしないでください。剣さえあれば俺は十分です」
ほんとと言うと、俺の心の中は涙で大洪水です。

そんな俺の気など知る由もなく、いや、知っていたとしても全力で無視をかますだろうヒサキは目を輝かせて、

「ねえ！ 次のコースって何！？」

それに続いて、しばらく俯いていた深柳も顔をあげた。

「確か、それも僕達の力になるものだと言いましたね」

先生の柔らかな顔が俺たちを見渡す。

「……そうよ」

若干、表情が陰しくなると、

「私は小さな火を灯したに過ぎない。その大きな風である者たちを与えられた力で捕らえ、火をおおいに燃え上がらせる事を私は望みます。最初の試練、カガミの森へと向かいなさい」

「おおお」

と、二人。

あくまでゲームらしい内容に、俺はついさっきの落胆も忘れたね。まずは森のダンジョン……王道も王道だが、そういうストレートなゲーム好きだぜ。それから徐々にレベルを上げ、ついには難関とも呼ばれる未知の洞窟に進み、そこには男のロマン、そう ドラゴンなんかもいたりして。くーっ！ たまらねえぜ。

よし、それでは早速、初陣というではないか。

森の場所？ なんもん何処にあるのなんぞ知らん。だが、道なき道をただ突き進むのみ！

「よし、おめえら。俺に続けえ！」

脇に置いてあった剣をどっこいせとばかりに肩に担ぎ、意気揚々と立ち上がろうとすると、深柳がジトつと横目で睨む。

「まさかその格好で行く気ではないだろうな……」

冷静なツツコミに俺はしばし硬直した。さすがに短パン一丁はま
ずかったか。

そしてやはり後ろから、

「バカなんだから」

と当然のようにまた言われるわけである。

森のざわめき、そして

先生から渡されたブレザーに着替えた俺は、ヒサキと深柳の三人で力ガミの森へと向かった。

いや、正確に言えば向かっている最中である。むしろそれすらも怪しい。なんせ周りに見えるのは青々とした木々や山並などではなく、夕飯の材料でも買いに来たのである。う買い物客や、それを威勢のいいダミ声で引きとめようとするおっさん達ばかりなのである。

「なあ、ヒサキ。なんで俺達はデパートで買い物なんかしてんだ？ ジャガイモの袋（金百五十円也）をカートに入れながら訊くと、
「あんたそんなのもわかんないの？ だってほら、もう夕方の五時じゃない。着いた頃にはきつとお腹ぺこぺこよ。森についてから何か獲って食べるわけにもいかないしって、ちよつとっ！ そのジヤガイモ芽が生えてるじゃない！」

俺がなるべくでかいものをと探し出したジャガイモをポイっと元の場所に戻すと、ヒサキはすぐさま新しいジャガイモをカートに入れた。

まったく、どこの専業主婦だお前は。芽なんぞ取って食べば問題ないだろ。

「何もキャンプに行くわけじゃないんだから飯は帰ってからでいいだろ。大体、それなら家で食ってから行けば良かったじゃないか」
そうこねる俺に、ヒサキはピクピクと眉を吊り上げた。

「あーのーねー。あんたがすぐさま行こう、俺は今、モーレッツに熱血している！ とか訳分かんない事言って飛び出すからいけないんでしょーが」

甘いぜヒサキ君。男というものはだな、夢中なものになると少年の心が全てを凌駕してしまうものなんだよ。

「なにそれバツカみたい」

「こんな所で漫才はやめてくれないか。僕まで恥ずかしいよ」

振り向くと、手に中辛のカレールーと特売シールの貼られた鶏肉を持った深柳が笑いながら立っていた。

なんだ。どうりで見当たらないと思っていたら、ヒサキにパシられていたのか。それらをカートに入れると、

「まあいいじゃないかアキラ。腹が減っては何とやらと言うし、外で食べるカレーも格別だと思うよ」

愉快げに言う。

ま、かくいう俺も実は楽しみなのだが。ゲーム世界とは言え、やはり腹は減るものである。試食コーナーから漂ってくる肉の香ばしい匂いなど涎が止まらない。

「なによこれえ！ カゴにこっそりチーズ入れたのどっちよ！ 余計な物入れないでよねー」

金髪少年は舌をペロツと出すと、

「カレーにチーズはつきものだよ。まるやかになるんだ」

それを聞いたヒサキは腰に手をあて、人差し指をぐぐぐいっと突き出した。

「それって邪道よ、邪道！ カレーにはネバネバのひきわり納豆に決まってるじゃないっ」

な、納豆だと。それこそ邪道ではないのか。

「つか、チーズにしろ納豆にしろ、んな粘っこいカレーなど想像もつかないがな。こいつが納豆を混ぜようなどという素振りでも見せようものなら、即座に阻止しなければいけないようだ。」

まあ、チーズぐらいなら、まだなんとか平気そうだが……。

ヒサキは俺らの啞然とした顔を見ると、クスクスと笑った。

「あははっ、冗談よ。今日のところは普通のカレーで許したげるわ」という事は、いずれにしろいつかは納豆カレーを食わされる羽目になってしまふのかね。

会計を済まし、他に見るものもないだろうとデパートを出た直後、ヒサキは買い物袋を俺にほいと渡した。

なんだこれは。俺はお前の荷物持ちか何かなのか？ との嘆きに、

唇を突き出しながらそうよ何を今更といわんばかりの表情をする。けったくそ悪い顔しやがって。もういい、こっちみんな。

やがて右手に剣、左手にカレーセット一式を装備した俺は深々のため息をついた。憧れの勇者像とはもはや真逆を行ってしまっている。

「これ、忘れ物」

小さなステンレス製の鍋が袋に追加された。顔を上げると、深柳のヤロウだった。俺の恨みがましい視線にシニカルな笑みを返しやる。

「よしっ。準備万端ね。さあ私についてきなさいヤロウ共！ 目指すはカガミの森いつ！」

などと髪をかきあげ、元気よくズンズン歩を進めていく。言っておくが諸君、俺達は遠足に出向くのではないぞ。あくまで「冒険」である。

とはいえ、そろそろ俺もどちらか見当がなくなってきたんだがな。

俺達がそのカガミの森とやらに着いた頃には、すっかり日も暮れていた。カガミといっても何らそこの森と変わりはない。少し霧が出ていくくらいだろうか。言ったモン勝ちとはこのことだな。

しかし、変だな。買物から約二十分ぐらいしか経っていないというのに、何故日暮れがこんなにも早いのだ。いまいち季節設定が分からん。

なんて、そんな事はこの際どうでもいい。砂利も敷かれていない山道を登ったり降りたりしたもんだから疲れはピークに達していた。俺がぜえぜえと息を切らしていると、

「だつらないわねー。さっきの調子はどこいったのよ。そんなんであいつらを捕まえられるのかしら」

振り返ったヒサキが両腰に手を当てたポーズで言い切った。そして、追い討ちのように後ろから、

「僕らはもう森へ入っているんだ。いつ誰に襲われるかも分からない。そんな所でへばっていると危ないぞ」

涼しい声をして言うがな、俺はお前らみたいに軽装ではなく地味に重い剣やあまつさえ買ひ物袋をさげているんだぞ。もっと労わってくれてもいいだろ。

「だあああ！」

俺はもうダメだとばかりに大の字に寝転がると、ヒサキに飯の要請をすることにした。

「わかったわかった。もうここはカガミの森なんだろ。だったらさつさと飯にしようぜ。つーわけで、出来上がったら呼んでくれ。ちなみに俺の分は人参抜きで頼むぜ」

「ああ、なら僕は肉を少なめにしてもらえるかな」

「はあ？ あんた達、なに言ってるのよ。カレーってのはね、みんなで作るから美味しく出来るのよっ。ほらほら、リンは皮むき、アキラは水汲みよ！」

否定は許されないだろうことはその頃のキラキラした瞳から伺えた。

もし、料理は女の仕事だとばかりに逆らって炎のパンチでも喰らってしまったら、ここで残りヒットポイントの少ない俺の冒険は終了してしまうこと間違いなしだ。

ま、こいつの言うようにみんなで作ったほうが美味いだろうな。

勝手に納豆入れられてもたまんねえし。しゃあないとばかりに、立ち上がるうとしたその時、

「どうやら、悠長に食事の時間とはいかせてくれないらしい。『捕まえるべきもの』とやらが現れたみたいだ。二人とも気をつけろ」

深柳の表情が一転して真顔になり、森の奥底を見据えた。

そりゃないだろ。普通、敵キャラなどは待つてくれるんじゃないのか。

いくらなんでも急すぎだ。

そう疑いながら深柳の視線を追ったわけだが。案の定、深い霧にそれと思わせるぼやけた影が映し出されていた。

「ふんっ。捕獲するものってどんな化け物なのかしらね」

そう言っ指をポキポキ鳴らしていたヒサキだったが、即座に動揺の色が浮かぶ。何故なら

「おい。あれって……人、じゃないのか？」

霧の中から微笑を浮かべながら現れたのは、一人の青年だったからだ。

所々に金の刺繍が入った黒いスーツに、赤いネクタイ。とまあ、ここまではどこぞのホストばりの姿だが。腰まである長い銀髪に切れ長の碧眼といった妖麗な顔立ちは、やはりどこか異質な空気を纏っている。

似てはいるが、人間じゃないことは確かだな。

そいつは戸惑っているヒサキの前まで歩み寄ると、恭しく頭を下げた。

「私はシロツキと言います。早速ですがお手合わせを願いたい。なに、簡単ですよ。私が宿主に相応しいお方だと判断するまで戦って頂きます。それに適わなければ死ぬまで戦うって事にも言い換えられますけどねえ」

微笑そのままに言う。

慇懃無礼とはこのことだろう。だが、柔和なその表情とは裏腹に、なんなんだこの威圧感は。

俺はその「敵」に慄然としていた。

情けない話だが、腰が抜けてしまっ立ち上がることが出来ない。

おいおい、こんなやばそうなヤツを捕まえてこいだって？

「へえ、言ってくれるじゃない。いいわっ、運動したほうがご飯美味しいもんね。この私が直々に捕まえてやるわ。……あんたたち二人は後ろで見ていなさい」

対抗するかのように軽い口調で言うが、表情までは笑っていない。そして、どちらともなく立ち位置を変え、やや広いところで対峙

する。

「これはこれは。話が早くて助かります。私としても是非あなたとやりたかったもので」

おいヒサキ。武器もないのに、やれるのか？ 相手は何をしてくるのかわからないんだぞ。

「そんなの言われなくったって。この私にはねえ」

ヒサキの左腕から翠に燃ゆる炎が勢い良く噴出す。そしてそれはみるみるうちに腕全体を覆い、

「捕らえるべき焰の力があるのよっ！」

言うが早いか、ヒサキは腕を振りかざすと腹の減ったイノシシの如く突進して行った。

森のざわめき、そして 貳

「なるほど。今回は炎ですか」

面白そうに呟くと、ひらりと身体を回転させて拳を避ける。そして、間髪容れずに背後へ回り込んだかと思うと、無防備になったヒサキの背中にそっと手を押し当て、

「火遊びなら私も少々心得てましてね」

静かな爆発が起こった。

「かは……っ！」

仰け反るように倒れこんだヒサキに光の粒子らしき物体 紅い

火の粉が降りかかる。

能力の一つや二つ持っていそうだとは思っていたが、忌々しくもヒサキと同様の炎使いか。

「いや、」

深柳が呟く。

「あの苦しみようをしてみる。同じ炎でも火力の差が違いすぎる」
激しく咳き込み、肩で息をするヒサキがそこにいた。立ち上がる
うとするが、たたらを踏みながら再び膝をつく。

シロツキといった青年はあの微笑を保ったまま彼女が起き上がる
ことを待っている様子だった。

尋常じゃない。どうなっただ。 たった一撃でこんなに 。

苦しむその姿に俺の顔色は極度に青ざめていたに違いない。

その時、ヒサキと目がかち合った。光の加減だろうか、そいつの
目に違和感を覚えた。それが何なのか分からなかった。何故なら、
すぐさまヒサキが視線を逸らし、体を起こしたからだ。

「何よ。ちよつとむせただけじゃない！」

俺たちの視線が気に障ったらしいが、そんな場合じゃないだろう。

「ま、結構熱かったわ。おかげで一張羅のブレザーがこんなだもん
ね」

言いながら脱いだ上着には、こぶし大くらいの焦げ跡が残っていた。

ネクタイを締めなおしながら、

「面白いじゃない。どっちの炎が強いのか火力勝負しましょ」

名案とばかりに言い切るヒサキに、シロツキが興味深そうに頷く。
「喜んで」

緩やかに広げられた両手には、人魂のような炎が燃えていた。その熱気からか、銀髪がゆらゆらと舞う。

対してヒサキは左袖口を捲り上げ、先ほどより一層燃え上がる炎を腕に巻きつかせていた。

こんなに離れているつつうのにこっちまで熱が伝わってくるぜ。
ひんやりとした風を背中に感じながら俺は、どちらが先に動くのか見守ることにした。

「右腕は使わないんですか？」

青年の問いに、

「ふっふー。一度漫画みたいな台詞言ってみたかったのよ。あんたは左腕だけで十分ってねえ！」

出し抜けに跳躍し、ふわりと舞い降りた先は銀髪野郎の目の前だ。
「あんたって頑丈に作られてるんでしょ？」

言いながら首を驚掴みにしたかと思うと、巨大な破裂音と共に翠の閃光が走った。

おいおい、さっきの爆発音とは比べ物にならないぞ。俺と深柳は啞然としていた。お前のどこにそんな火薬が詰まってるんだ。いやそれよりも、首だぜ？ あの爆発じゃ吹き飛んでしまっても、

「ええ。仰るとおりです」

煙火の中から伸びた腕が、今度はヒサキの首を絞める。徐々に煙が晴れると、そこには清らしい顔をしたシロツキがいた。煤すらも付いていないそいつに、ヒサキが呻いた。

「ちっ……、こんちくしょう」

「お褒めの言葉ありがとうございます」

その腕に火の粉が舞い始めたその時、またも轟音。

だが、それはシロツキの胸辺りで起こった。

「ぐはっ！」

胸を押さえ、片膝をつくそいつは何が起こったのか分からないといった様子でヒサキを見上げていた。もちろんあの化けもんに分からずして何故俺が理解出来る。

深柳、解説頼む。

「あの様子から、ヒサキは左腕からしか炎が出せないんじゃないのかと思っていたが、どうやらそれはブラフらしいな」

すまん、もうちょっと詳しく頼む。無表情に深柳はこちらを向いて、一つ瞬き。

「彼女の能力におけるメインは足だということだ」

淡々と言うと、再び視線を前方に戻した。

ああ、なるほど。そういうことか。俺はヒサキの右足から濛々と立ち籠める煙を見てやっと理解することが出来た。

つまり、あの足で蹴り上げたってことだよな。

待てよ。シロツキでさえ苦痛に顔を歪めているということは。

俺はもしツツコミか何かであいつに蹴られた場合を想像して頭を抱えた。いや、それどころではないのは分かっているが、俺にとっては死活問題なわけで。

うーむ。

「あら、お得意のにやけ笑いはドコに行ったの？」

ヒサキが健康的な八重歯を見せながら、してやったり的な表情で青年を見下ろす。

「さすが、です……ね」

シロツキが口角を上げ、苦笑を返しながら立ち上がる。その碧眼からは、もはや余裕の色が失われていた。

と、同時にヒサキがかかとを目の前の土にめり込ませた。

次の瞬間、派手に地面を爆発させ、その爆風で後退する。って、説明していて思ったが、それって痛くないのか？

「ちょ、ちょつちね」

無茶すんなって。

「うっさいわねえ！」

やらなきゃ良かったといった表情のヒサキに、

「それは余裕というものですか。どうして追撃せずに後退したのか
問いたいですね」

その口調には幾分か苛立ちが混じっていた。しかしヒサキはあつ
けらかんと、

「あんだだつて、さっき私が立ち上がるまで待つてたじゃない。さ
あ、これで貸し借りは無しよっ」

沈黙が訪れた。面食らった顔をしていたのは何も銀髪だけじゃな
い。深柳でさえ、目が点になってしているわけで、きつと俺だつてそん
なツラをしていただろうさ。そんな武士道染みたセリフを吐いてい
いのは、戦うのが趣味とも言える格闘漫画の主人公くらいだぜ。つ
て、あながち間違つてはいないのか？

俺がそんなことを考えていると、くすくすと笑い声が聞こえた。

それはシロツキだった。先ほどの優雅な笑みではない。まるで友達
に対する微笑を向けながら、

「やつぱり、私はあなたが気に入ってるみたいです」

ヒサキはというと、にいつと意味ありげな笑みを浮かべている。

「まったく、変な奴だな」

そう言い捨てる深柳だったが、口元は緩められていた。まさしく
空気が一変したというやつだ。なんだなんだ、この和やかムードは。
これではさっきまでの緊張感が台無しじゃないか。

「やれやれ」

嘆いたはいいが、どうしてだろう。こいつのペースにさせられる
と、不思議と楽しい気分になっちまうのは。ハイになるってこうい
う気持ちなのか。

「さあ、行くわよ！」

と意気揚々に叫ぶヒサキに、

「どうぞ、どこからでも」

再び優雅な微笑をつくりながら返す。

だが、ヒサキはその場から微動だにせずに深呼吸をすると、やおら右足を持ち上げ始めた。瞬く間に翠炎が纏われる。

「じゃあ、どこからでも」

ヒサキのツーサイドアップが合図のようにぴよこんと揺れ、かかと落としよろしくその場で一閃。しかし相手とは距離が離れている為、そんなことをしても当たるはずもない。それはまじないか何かなのか？

「まさか そんなこと、可能なのか」

珍しくも深柳の声には驚きの色が混ぜられていた。その眼差しの先には、どういった仕組みなのだろう、振り下ろされた軌跡に焰が滞在していた。火の粉を撒き散らしながら輝くそれは、まるでそいつの前方だけ空間がぱっくり裂けちまったようにも見える。

「そう、ぶつ飛ばすのよっ！」

なんともいい笑顔で叫ぶと、その場で半回転して焰を蹴り飛ばしたではないか。

なんつー無茶苦茶な。

「わーお、ナイスシュート！」

ナイスシュート、ねえ……。ボオツと風切り音を走らせながら、真っ直ぐ青年へと向かう炎を見る限り、確かにこいつのコントロール精度は中々のものだろう。

だがそいつは軽く体を横に反らすと、それを難なく避けてしまった。もちろん、笑顔現状維持。

「なんで当たらないのよお！」

地団太を踏んで悔しがるが、ヒサキはキツと眼前を睨むと、

「じゃあ、これならっ」

ダンスのように空を蹴り上げ、次々に現れる焰の軌跡を蹴り飛ばしていく。まさかとは思うがヤケにさえみえるぞ。

「行け、行けー！ やっちまいなさい！」

まさかであつて欲しかったが、両腕を振り上げエイヤエイヤと炎に喝を入れているところを見ると、残念ながら完全に頭に血が上つてしまっているようだ。

「はあ、ちよつとこの数は避けきれませんねえ」

困りましたねとばかりに銀髪をかきあげると、シロツキの細目が見開かれた。碧眼が比喻などではなくバチバチと奥底から煌めきだしていく。想像してみて欲しい。薄暗闇の中、輝く瞳がゆらゆらと舞う姿を。ちよつとしたホラーだ。

そしてそれは、もはや人間業ではない動きで（いやはや、人間ではないのだろうが）数多ある焔を避けると、一気に肉薄した。

「来るっ！」

叫ぶ。蹴りを繰り出すシロツキに対し、極限まで身を屈め、
「この距離ならその眼でも避けられないわよね」

ヒサキはにやあと笑うと、組んだ両手を無防備になった青年の腹部へと突き上げた。拳に最大火力が宿っているのが遠目でもわかる。なんせ、巨大な翠炎が螺旋状に巻きついていったんだからな。

「さあ、私の可愛い炎！ この者を灰燼に還してさしあげなさいっ！」

両手を離れた瞬間、溜めていた炎が一気に放たれる。

「くっ……う！」

凄まじい閃光、続いて地面が揺れる程の爆発音が鳴り響く。

思った以上に威力は凄まじく、こんなに離れていても眩しくて何も見えない状態だ。しばらく目をしばたき、やがて慣れた頃、視界に映ったのは小刻みに肩を揺らして立っているヒサキに昏倒している青年であつた。

勝つたのか？

「……信じられない耐久力だ」

深柳が忌々しげに言う。見ると、シロツキがよろめきながら体を起こしていた。その険しい表情から察するに相当なダメージを受けたらしい。

「ヒサキ！ まだ終わってないぞ！」

このまま押し切れば勝てる　そう言おうとしたその時、ヒサキの体が痙攣を起こし、そのままネジの切れた人形のようにくたりと倒れこんでしまった。

「お、おい、どうしたんだ」

「ごめん、ちょいギブ、たんま。無理ッス。すいません。白旗バンザイ」

あらゆる負け宣告を並べ、辛そうに呼吸を荒くする。

あの一撃に全火力を使ってしまったのだろうヒサキに、俺たちは何も言えなくなった。

いや、初めての戦いでここまでやってのけたのだ。前例にない快挙だと俺は勝手ながら断言するね。

そうさ、もう休んでいてくれ。勝てない相手であろうが、腰を抜かしたケジメぐらいつけるさ。

「深柳、こうなったら俺たちであいつを、」

「いいえ、その必要はありません」

俺の言葉を制したのはシロツキだ。もう彼の瞳は輝いておらず、再び穏やかに細められていた。

「どういうことだ？」

腑に落ちない様子で訊く深柳。

「言ったはずです、倒すか倒されるかではなく、宿主と判断するかもしれないかであると」

「ということはつまり？」

「彼女を宿主と認めましょう。いいえ、是非とも私を宿らせて頂きたい」

宿るとかどうとか言っている意味がよくわからんが、これは捕獲成功と捉えていいのだろう。

そいつは一瞬輝いたかとおもうと、見目美しい銀狐へと姿を変えた。

慣れとは怖いものでこの光景を見ても、なるほど、正体は狐だった。

たのか。などと素直に納得してしまう辺りそろそろ自分は危ないの
だろうかと考えてしまう。それ以前にヒサキや深柳は当たり前によ
うにこの世界を認めていることが恐ろしいね。

当然、ゲームなのだからと言われればそれまでだけださ。

やがて、いつの間にか手のひらサイズの可愛い子狐へと小型化を
果たしたシロツキはヒサキの目の前まで飛んで行くと、ペロペロと
顔の煤を舐めた。

「宜しいでしょうか？」

小首を傾げる。

「うっ、なーんかスツキリしないケド」

悔しそうに顔をしかめていたが、すぐさま極上の笑みで、

「ま、いいや。よろしくね、シロっ」

ペットを買ってもらったばかりの子供みたいに嬉しそうに、子狐
を両手でそつと触れる。それと同時にようやく安堵の波が俺を襲っ
てくれた。良かった、なんとか捕まえることが出来たみたいだな。
一時期はどうなるかと思っただぜ。

ほっとしたのも、つかの間だった。突然、ヒサキが苦痛の表情で
お腹を押さえうつむいたからだ。

「お、おい。しっかりしろっ！ どっか怪我でもしたのか？」

駆け寄り、どうしたらいいのか困惑しているとそいつは力無く首
を振り、子狐を頭に寄せた。

「もう、ダメだわ」

言いながらへなへなと上半身を倒し、

「お腹……ぺこぺこ」

と呟いたのだった。

黄金なる少女

焚き火の爆ぜる音を聞きながら俺たちはチーズ入りカレーをスプーンでつついていた。

チーズ入りとはいえ、カレーにただ乗せるだけなのでヒサキのものには乗っていない。

俺も乗せる気はなかったのだが、深柳に無理やり乗せられた為、しぶしぶ食してみたところ、

「おろ。意外にイケるぞ」

一部の人たちが期待するような火山をバックにこの美味さを実況する程とはいかないが、ちょっとした新感覚ではある。

「ヒサキもさ、騙されたと思って」

「い、や、よ」

即答である。金髪少年は諦めた様子で「美味しいのになあ」とつぶやきながらチーズをふんだんに乗せたカレーを頼張った。まあ、確かにコツテリしすぎているかもしれないが。

「違うわよ。味とかじゃなくて、カロリーの問題よ。そんなもの食べたら太っちゃうわ」

俺のチーズ特盛りカレーを一瞥して言うが。ゲームの世界で太るわけないだろうが。夢で飯くって太るんですって言ってるようなもんだぜ。というか、待て。

「一応突っ込んでおいてやるが、三杯もおかわりした奴の言うセリフじゃないぞ」

ギクツと漫画のようなリアクションをとると、これまた漫画のように口を尖らせ、

「そうなのよねー。普段は少食なほうなのに、何故か食べてもおなかいっぱいにならないのよ」

まるで危ない病気にかかってしまったエゾリスのように体を丸める。

それを聞いていた深柳は、

「もしかしたら。能力を使うとその分エネルギーが減ってしまい、それを補充しようと大食になってしまうのかもしれない」

確かに一理あるな。そんな設定のゲームもやった気がする。

「がびーん！ いやよ、そんなぁ。もりもり食べる女の子なんて絶対ありえない！」

ガビーンで。マサルさんかお前は。仕方ない、ここは一応フオローしておこうか。

「そんなことはないぞ。食わずしてやせ細った子より多少むっちりしたほうが健康的でいいじゃないか。大体にだな、昔の女性というのは少しふくよかなほうが美人と言われていたんだ。それなのに今の女性は異常にダイエットに敏感で嘆かわしい！」

「チッ」

舌打ち一つであつさり俺の心遣いを踏みにじると、脇で眠る子狐シロを揺り起こした。

ちなみにこの安易な命名はヒサキによるものである。座敷犬じゃないんだからな。

「ちよつとちよつと！ どういうことなのよシロ！」

しばし、ぼんやりとヒサキの説明を聞いていたシロは大きなあくびをまじえながら、

「はぁ。そのことでしたら、お嬢様の能力とは関係ありませんよ。ただ、私が力を使ってしまうと余分にエネルギーを消費してしまうため補充が必要となることはありますねえ。いやはや、あの数を避けるのに大分力を使ってしまったようで、」

眠ってしまいましたよと言い掛けたところでヒサキは満身の力でシロを驚づかみにするとシェイカーのように振りまくった。

「どーしてあんたの分まで余計に食べなきゃいけないのよ！ もし太ったらどう責任とってくれるのよー！」

おいおいそれくらいにしてやれ。顔が土気色に染まってきたぞ。「す、すびばせん！ 私が食べればそのような心配など……！」

ぱふつと青年の姿になつてヒサキの手から逃れたそいつの肩にぽんぽんと優しく手が置かれる。

「はい、シロの分だよ。たんとお食べ」

そこにはとても優しい微笑みでチーズカレー（極盛り）を差し出す深柳がいた。

食後、俺たちはシロの淹れたコーヒーに舌鼓を打ちながら、談笑に花を咲かせることにした。

「そのバカ、談笑じゃなくてこのゲームについてシロから話を聞くのよ！」

やれやれ、似たようなものじゃないか。それにしても、もう夜の九時過ぎぐらいであろうか。一層霧が濃くなり冷えてきたので俺は焚き火に薪をくべようとした。

むむ、火が弱まってきたぞ。

「おい火が消えそうだ。誰かマツチとかないか？」

「はあ？ バカねえ。そんなの私に言いなさいよ」

と、口から勢いよく炎を吐き出す。

俺はお前の放射熱線を得意とする某怪獣王みたいなそんな姿を見なくなかったから訊いたんだがね。

「さてと。シロ。あんた、私を宿主と認めたとか言つたわよね。私たちは力となるものを捕まえるって言われて来たんだけど。それってあんたで間違いなしってことでいいの？」

青年姿のままの狐は、ゆっくりいつものように目を細める仕草をとる。

「ええ、そうです。多分あなたたちの担当の方がそう言つたのでしよう。それは私ですね、間違いありません。ヒサキお嬢様は私を捕まえ、と言つたら語弊がありますか……下僕として契約した為、このコースは無事終了といえましょう」

てことは、無事ヒサキは一抜けしたということか。

「おっけ。それで安心したわ。うーんと、それじゃあ力になるって、もちろん私たちと一緒に戦うってことよね？」

無論そういうことになるだろうな。だが、碧眼男は笑顔のまま、少々困ったなとばかりに眉を動かすと、

「ええ、まあそんなところです。とはいえ、私自身が直接『敵』とやらを攻撃するわけにもいかないんですよ。困ったことに」

何故だ？

「それがこのゲームの掟なんです。主人と下僕の関係とでも言いましょうか。どんなことがあるうとも私自身が手を下すわけにはいきません。あくまでも主人を支え、補する存在なのです。もし、それを破ることがありましたら、その場で契約は強制的に解除させられてしまいます。まあ、例外な奴らもいますが」

まったくややこしい内容だ。

じゃあ、契約者に従う存在。捕獲すべきもの。どちらでもいい、お前たちは一体どうやって力を貸すというのだ。まさか身の回りの世話をしますとか言い出すんじゃないだろうな。

だとしたら、なるべく美少女的な子と契約を結びたいものだ。無論のこと将来を見越してな。

「もちろん我々は主人の言うことには出来る限り従います。しかし、それとは別に戦闘において様々な力を主人に分け与えるということが主な働きといえましょう」

回りくどいな。俺は頭をボリボリかくと、紙コップの中のコーヒを飲み干した。砂糖もミルクも入っていない為あまりの苦さにむせてしまう。

その横で深柳は涼しげな顔でコーヒをあおると、

「二人とも炎を得意としていたなら、契約したことで単純にヒサキの炎が強くなったということか？」

「これはこれは。いえ、そのとおりです。深柳様はこのゲームを良く知っておいで」

金髪はというと、さもつまらなそうな顔で空になった紙コップを振りながら、

「さて、どうだろう。多分そうじゃないのかなって思っただけだ」

フツと揶揄を交えた表情で笑うと、シロツキは肩にかかった銀髪を払った。

「端的に言いますと、私に出来ることは、主人であるヒサキお嬢様の炎を数倍に高めることだけです。後は、アドバイス程度が限界です。直接手を出せない以上、私めにはそれぐらいの事しか出来ません」

俺はヒサキの満開に咲き誇るひまわりのような笑顔を見つめながら思った。それぐらいって、あの炎が数倍になっただけでもかなりヤバイんじゃないのか？

「あんた凄いじゃない！ それだけ出来れば十分よ！ ほら、リンもアキラも早いところ契約結びに行くわよ！」

俄然やる気になっているところすまないが、ちょっと待ってくれないか。

確かにお前は早々に契約を結んだから元気なもので、俺は飯を食った後は牛のようにしばらく動けない性質なのである。

それにゲーム好きなら一度は言われたことあるだろ？ 一時間ゲームをやったら、五分ほど目を休めろってさ。

「ふわぁ……あ」

何の気なしに俺が大きく伸びをしたその時、ヒュツという音と共に何かが頬を掠めた。

なんだなんだ。恐る恐る目の前の大木に目を向けると、黄金色に輝く鳥の羽のようなものが突き刺さっていた。それもかなり深くめり込んでいやる。

「……！？」

パクパク口を開閉させて惚けてる場合ではない、慌てて振り向くとそこには俺たちより少し年下ぐらいであろう少女が凜として立っていた。

驚いたのも束の間というやつさ。その姿を見た瞬間、俺のドキドキは驚きから恍惚へスライドしていた。

なぜなら、これがまた素晴らしい美少女であつたからだ。黒いセーラー服に描かれた金の刺繍はシロツキのそれと似ていた。

背中まである金髪にそれと同じ金眼。加えて透き通るような白い肌。

つまり、どストライク。略すとドストラだったわけだ。

咳払いをした後、声を整えつつ立ち上がる。

「やあやあ、美しいお嬢さん。ピンポイントで拙者を狙ってくるとは、目が肥えていらつしやる。ははは。いやはや、そこまでアップロ―チされたのでは致し方ない。お望みどおり君と戦って進ぜようじゃないか。そして拙者が勝ったあかつきには是非、お嫁さん……いや、さらに言うなれば『服従』の意味を込めてメイドさんという契約をだなッ！」

「ちよつとは下心でもんを隠しなさいよあんた……」

はっ、どうとも言う方がいいさ。さすがは今時のゲームだ。ちゃんとしたヒロイン的存在が用意されているではないか。

つまりはそういうわけさ。これが「あるゲームの物語」主要のところであるわけだ。不鮮明なタイトルに首を傾げていたが。結局、その手のゲームだったわけで。

考えてもみてくれ諸君。こんな子が俺の下僕になり、これからあんなことやそんなことといった考えるに容易い展開なんざ、赤面必至だろう。

こんな素晴らしいゲームを創った作者がそこに居たならば今すぐにも直筆の感嘆の書を差し上げたいものだね。

よって、結論。負けは許されない！ 是が非でも勝つぜ！

「近こう寄れ。よきに計らつてやるぞ、その捕獲すべき者め」

剣を構えると俺は時代劇よろしく悪代官そのものにジリジリと少女に詰め寄った。無論、頬の筋肉は緩みっぱなしである。

さて、相手はどう動く？

「こ、来ないで。私のママを返して、お願い返して！ 外から来た奴らに連れていかれたの！」

む。どこか様子がおかしい。今にも泣きそうである。剣を下げる
と、俺は振り返り、

「って、言っているが。どういうこった？ ヒサキ」

「わ、私を知るわけないじゃないっ」

ぼーっとしていたんだろうか、突然話を振られたヒサキが焦ったように言う。

すると、隣の深柳が口元に手を寄せ、

「どうやら、彼女の母親は先に契約を結んで行ってしまったらしいな」

では連れていかれたというのはおかしいんじゃないのか。それに、こいつらはそういう役回りなんだろう？ そんなことを言ったら契約なんてもの出来ないじゃないか。

「ラティアはまだ子供ですからねえ。不幸にもこの世界の仕組みを知る前に母親が契約を結んでしまい、一人になってしまった彼女はわけもわからず困惑しているといったところでしょう」

と、快活に説明するのはシロツキ。

それはかわいそうだな……。

俺はイエスキリストのような微笑を彼女に投げかけた。

「わかった。それじゃあ俺たちと一緒に」

言った直後いきなりだ。凶悪な強盗犯でももう少しセリフを喋らせてくれるんじゃないかと思ってしまっタイミングで、

「そうだ、お前たちがママを殺したんだ！」

ラティアといった少女の右手が俺の鼻先を一閃する。チクツとした痛みと共に、彼女の手の中にある金のナイフに驚愕する。

な、なんなんだこの子！？

そしてそれを逆手に持つと再度俺へと振りかざす。きっと、その鷹のような鋭い眼光を俺は間抜け面で見上げていただろう。

「くっ！」

刺される　ッ！

痛いほど目を閉じるが……。

あれ？

顔を上げるとそこには金髪ショートカットの少年が立っていた。

彼女の黄金の刃をハンドボウでガードしながら、

「動くな。森は僕のテリトリーだ。動けば数多ある植物が君を襲うだろう」

これまでに聞いたそいつの声ではなかった。冷徹　いや、まったくの別人のような声色だった。

その威圧感に俺も微動だに出来なかった。

気のせいだろうか森もざわざわと騒いでいるように思える。

だが驚くべきことに、対した彼女は気圧されるわけでもなく、きよとした表情と声で、

「リン、もしかしてリンなの？　どうして、どうしてリンがこんな奴らとまたこの世界に！？」

「君は……誰だ？」

しかし、返事はなかった。それは彼女がぐたりと倒れこんでしまったからである。

黄金なる少女 貳

しばらくして俺たち三人は再び焚き火の前に腰を下ろしていた。だが、先ほどと異なるのはだな、

「くうくう……」

やけに短いスカートからチラリと白く輝くふとももが覗いている美少女が加わったという点だ。

しかも、すやすやと気持ちよさそうに寝息をたてながらな。

普段ならグツと来る俺だが、さすがに凄まじい剣幕で襲いかかられたらその姿を見ても嘆息するしかあるまい。

ヒサキは自分の上着を彼女にかけると（残念なことに腰辺りにかけてしまった！）、赤いネクタイを締めなおした。

「で。どーすんのよ、コレ」

呆れたように頬杖をつきながらラティアと呼ばれた金髪少女を指差す。どうすると言われてもな。一応考える振りでもしておくか。

「あんたじゃないわよ」

無然としたヒサキは俺ではなく深柳に訊いたらしい。確かにこいつに何やら縁がありそうだからな。

しかし、もつと気になるのは何故俺が彼女に襲われなければいけないのか、だ。

彼女が言うには俺たち（多分三人で？）がその子の母親を殺したらしい。だが、当然ながら俺たちはいさつき初めて顔を合わせたわけで、そんなものまったく心当たりがないのだ。

そして、『殺された』という単語に疑問を覚えた。何故なら、彼女の最初の発言とかみ合っていないのだ。確か彼女はこう言ったはずだ。「外から来た奴に母親を連れていかれた」そしてその後すぐに、一転として彼女が暴れだしたわけなのだが……。

ただ単に、母親を連れていかれたせいで錯乱状態に陥って支離滅裂なことを口走っているだけなのかもしれない。そう考えるのが一

番妥当ではありそうだが。俺がブツブツつぶやいていると、

「あーもう、うるさいってーのよ!」

俺の目の前が爆発した。無論、言うまでもなくヒサキの炎のパンチがヒットしたのだが、能力をもらった当初より格段に威力が増しているわけで。これがもし現実世界なら俺はとも見られない状態になってしまったであろうと思われるほどの威力なのだ。

要約すると、むっちゃ痛い。

「あつ、ほんとだ三倍よ三倍!」

ぴょんぴょん跳ねながらまるで白い巨人を打ち倒した赤い隕石のように喜んでいるところすまないが、俺はいつからお前の威力測定器、はたまた実験モルモットへと堕ちてしまったんだ。

「最初からじゃない」

そうか、なるほど。初めからこの位置だったな。俺の能力よ、開花するならなるべく防御主体の力にしてくれ。もしくはどこかに頑丈な盾でも入った宝箱などないかね。

いくらゲームの世界とはいえ、毎回仲間に瀕死の状態へと追いやられるとさすがにリセットボタンに手を伸ばしたくなるぜ。そんなボタン、もしあればの話だが。

「さて」

すっかり黙ってしまった俺を確認すると、ヒサキが腕を組みながら口をへの字に曲げ、

「この子……。ラティアとかいったわね。まあこんな奴らうんぬんという点については今回だけ目をつぶるわ」

よかったな。三倍の拳をうたれなくて。

「でもね。気になるのはその後の、『またこの世界に』っていう点よ!」

ヒサキのちょこんとしゃべった二つの小さいおさげが、これでもかというようにぴょこんと跳ねる。

「さあどうなのよ、深柳リン容疑者!」

お前が普段というドラマ見てるかわかるな。

「どうと言われても。言っただろ？ 僕はそんなヤツ知らないし、ましてやこの世界なんて今日初めて来たばかりだと。そこで、説明書どおりに先生に会い、アキラとヒサキの仲間になった。あるゲームの物語という世界における記憶はこれが全てだ」

スツと、すっかり冷えてしまったであろうコーヒーの入ったカップを口元に運んだ。

「むう……。そりゃ、そうよねえ」

子狐の姿でヒサキの周りをふわふわ浮いていたシロが、

「深柳様、お注ぎ致しましょうか？」

と訊ねるが、

「いや、君はヒサキの下僕だ。僕に世話を焼く義理もないだろう」
固い奴だな。ヒサキのしもべは俺たちのしもべだぞ。

そんなどこかの自己中イズムみたいなところまではいかんが、別にコーヒーぐらいありがたく注いでもらったらどうだ。

「下僕だとかどーのとか、呼び方がそうであって、結局は仲間じゃない。そうよ仲間よ、仲間っ！ これから力をあわせて敵をぶっ倒していくんだもの？。そんな固く考えないで仲良くやりましょ」

すまん。俺はこいつのことを多少なりとも勘違いしていたようだ。そうだな、仲間だよな。少しだが目頭が熱くなってしまった。ダメだ、初めてのおつかいのテーマソングだけでジワツときてしまう純粹な俺には少々危うい領域だったようだ。

「はい、そゆことだから。ほれほれさっさとわらわにもコーヒーを注ぎたまえ。気の利かない狐じゃの。ほっほ」

前言撤回。つーか何のキャラだ、それは。

「はは、かしこまりました」

熱いコーヒーを一口含み、俺はブラックも中々いけるものだと思います、再度むせた。

ちなみに、何故こんなにもはやく湯が沸いたのかというと、「まどろっこしいわねえ」と湯の入ったヤカンを握り、即座に沸騰させたガス代いらすの女がこのパーティにいるからである。

「うっ……」

匂いに惹かれてか、突然目を開けたラティアといった子は、寝ぼけ眼でキョロキョロした後、

「あれ、ここ、どこ？」

と、うぐいすのような声で訊ねたのである。うぐいすの声なんぞ俺は聞いた覚えがないが、イメージ的にそれほど可愛らしい声であったと言えよう。

「困った子ですねえ。それでも飲んで目を覚ましなさい」

ぼーっとしている彼女にコーヒーの入ったマグカップを渡した。

「ありがと……」

それを小さな舌でちょこつとなめると、

「あ、熱う……」

うつひよおお！ たまらねえぜ！

その子猫のような姿を見た瞬間、つい舞い上がって雄たけびを上げそうになってしまった。

待て待て。お、落ち着くんだ俺。お前はまた殺されかけたのかいや、もはやこの子になら刺されてもいいかもしれない。これからの未来、そういうジャンルも割とアリなのかもしれんぞ。

「ちょ、ちよつとねえあんた！ かわいこぶってないで、私たちに何か言うことないの！？」

ヒサキの人差し指がラティアといった金髪少女の鼻先に押し付けられる。

とはおっしやいますかねヒサキさん。実際、可愛いんだからしょうがないだろ。お前とは違って男性の柔らかい部分をくすぐる才能をお持ちのようだ。それはもう、グググイっとな。

だが、彼女はヒサキを完全スルーすると、とてとと走って深柳をぎゅっと抱きしめた。ぐずぐずと涙を浮かべながら胸に顔をうずめる姿は……。

「リン、会いたかった、ずっと寂しかったんだよ　リンっ」

さらば俺の青春。

彼女の長い髪を撫でながら、無表情でいられる深柳の野郎がにくい。ヒサキはその様子を憤然とした様子で眺めると、俺へと視線を移した。俺を睨んでどうする、俺を。

「もう一度訊く。君は、誰だ。どうして僕の名を知っている。そして、僕がこの世界に来たことがあると？」

とても優しい声で訊ねる。時々、こいつが分からなくなるな。まだ会って間もないから当然だろうが。何か、違和感が。いや、俺の気のせいかもしれんが。

「私、ラティだよ。リン、忘れちゃったの？　ずっとずっと、一緒にだっただのに……」

この子は何を言ってるんだ。ますますわからん。

頭にクエスチョンマークを出しながら困惑している俺とヒサキを睨むと、彼女が突如として叫んだ。

「殺人鬼たち！　絶対に許さない。ゆるさないゆるさないゆるさない！」

な、なんなんだ！？

再び暴れようとするラティアを強く抱きしめると、深柳が辛そうに呟いた。

「やめるんだ。僕は君を知らない。本当なんだ。君が僕を知る理由が知りたい。そして、彼らは僕の大切な仲間だ。頼むから傷つけないでくれ」

しかし、彼女は尚も深柳の胸で暴れる。何か引き金になったのだろうか、その行動は常軌を逸していた。そいつの諭すような声なんか聞こえちゃいない。まるで何かを呪うようにただ暴れている。

「こんな奴ら、あんなことになるなら私が殺してやる！」
更に激昂し暴れる彼女を突き飛ばすと、

「どうしてもやると言うのなら、」

衝撃で大木に打ち付けられた彼女に、無数の草やツタが巻きついていく。

身動きの取れなくなった彼女にハンドボウを向け、

「消さざるを得ない……」

黒檀のような深柳リンの眼がどろりと濁っていった。

参番目のけもの

.....。

長い沈黙。

ボウを向ける少年に、涙を浮かべながら悲しげな表情で見つめる少女。さすがにこの空気はまずいんじゃないか。

俺は隣で腕を組みながら眉を寄せているヒサキの横顔に目をやった。ヒサキは俺の目線に気づくと、口を尖らせた。

「どうするのよ、この状況。ラティアって子も普通じゃないけど、リンもやり過ぎじゃないかしら」

「ああ、確かに……」

暴れるから消すとはさすがにイコールとはいかないからな。敵、いわばゲームでいうモンスターというのなら話は別だが、彼女は仲間になりうる契約すべき対象であり、ましてやこいつと何か関係がある子だぞ？ 加えて絶世の美少女だしな。

こつん。軽い衝撃を頭に受け俺は顔を上げた。

「なーに考えてんのよバーカ」

見やるとヒサキの冷ややかな視線があつた。なんだよその目は。健全な男子高校生なんだから、可愛い子に甘くなるのは至極当然だろう。

しかし、これはいつまで沈黙が続くんだろうな、この二人は。朝までやっているつもりだろうか。

「全部、終わったから私なんてどうでもいいの……？」

不意に口を開いたのはラティアだった。終わったというのはどういうことだ。別れたとか？

「このゲームをクリアしたからってことでしょ」

ヒサキがぼそつと言う。終わったってそういう意味か。

「終わっただと？ 何を言っている」

深柳の表情が曇る。やはり当の本人は知らないらしいな。

「もしかして本当に忘れちゃったの？　だってリンはこの世界で

」

「そこまでです」

途中で制したのはシロだった。微笑を浮かべたまま樹に打ち付けられたラティアの元まで歩み寄ると、

「いい加減になさい」

そう言い、彼女の頬を叩いたのだ。

一瞬何をされたのか理解できずにいた彼女だったが、ようやく叩かれたことに気づき、

「な、何を！」

「貴方はまだ子供だから理解出来ないのかもしれませんが、それ以上の言動は規約に反します。まさかとは思いましたが、貴方には以前のデータが残っているようですね？」

「だって　！」

何かを言おうとした彼女を抑え、なにやら耳元で呟く。

次第に俯き、やがて黙り込んでしまった彼女から視線を移すと、穏やかな表情で、

「皆様、申し訳ありません。これ以上話されると少々厄介なことになりますので」

深柳がボウを下げながら、訝しげに目を細める。

「厄介なこと？」

「ええそうです。ご存知のとおり我々はあなた方のように外の世界からテスターとして選ばれ入ってきた存在ではなく、この世界に存在するただのゲームのキャラクターであり、貴方たちの能力を強化するのが主な役割です。しかし、それ以上ではないんですよ。ある一定までしか教えられない。ましてやこの世界の仕組みなどを教えるのは言語道断です。なぜなら、もし教えるようなことがあれば、バグと見なされ即座に消滅してしまうようにプログラムされているからです」

しばしの間考える素振りを見せ、深柳は無表情を青年に返した。

「確かに厄介だな……。解った、もう訊かないようにするよ」

「助かります」

すまなそうに頭を下げる銀髪になんとも言えない笑みを返す深柳。いやはや。我々あぶれ組み二名は啞然とするばかりだ。気のせい
かヒサキのアホ毛がげんなりしているようにも見える。

つまり二人とも話についていけないわけで。

「はあ……」

傍らにいたヒサキが、自分の上着を着なおしながら、

「どーでもいいけど、早くモンスターでもぶっ倒したいわね」
などと身も蓋もないことを言っている。

「すまない、待たせたな。行こう二人とも」

いつの間にか横にいた深柳が、

「出来れば朝までには三人共契約を済ましておきたい」

淡々と言うがな。俺は肩をすくめ、ヒサキに目で合図を送った。

ヒサキは私に振るなとばかりに、手で丁字を作るというよくわからないサインを俺によこしやがった。

というかそれは、野球のときに使うタイムの合図だろ。

ひとつため息をついておく。

仕方ないが、こればかりはツツコンでおかんといけないからな。

「それはいいが深柳。あの子はどうするんだ？ あのままずっとは
りつけておくわけにもいかないだろ」

悄然としている彼女を指差しつつ訊くと、俺に荷物を渡しながら、
「それなら心配はない。能力者から一定の距離を置くと解除される
みたいだからな」

なるほどね。……ってそんなこと何故知っているんだ？

「結局、彼女とは契約を結ばないの？」

ヒサキの問いに、深柳は伏せ目がちに答えた。

「いいんだ。もし、結んだとしても僕は以前のことを知らないんだ。
きつと、お互い辛い思いをするだけに決まっている」

さすがにそれ以上は訊けず、俺らは釈然としないまま森の奥へと

進むことにした。本当にそれでいいのかだって？ そりゃ俺だつてそう思うさ。だがなあ、こいつがそう言ってる以上どうしようもないだろう。

「ああもう、行くわよ！」

「は、はい」

ヒサキの怒号に慌てて子狐へと姿を変えたシロは後ろ髪をひかれるようにラティアを振り返り、小さくため息を漏らしながらヒサキの頭の上へと着地した。

煮え切らない様子でぶんすか歩くヒサキの後ろに、無表情のまま歩を進める深柳、そしてそれに嘆息しながらついていく俺という構図だ。

辺りは当然のことながら暗闇に包まれており、月明かりですら森の木々に阻まれている。たまに鳴くどこぞの鳥が一層恐怖を誘う。

頼りはヒサキの手に灯された炎だけであるが、緑に照らされるのも少々薄気味が悪い。

そろそろ剣の重みで俺の肩は悲鳴をあげる寸前だったその時、

「おかしいわ」

ヒサキが呟く。

「ああ。この道はどうなってるんだ」

深柳がそれに続く。

なにがおかしいんだ。ちゃんと俺にわかるように説明してくれ。

「見てみなさい」

手を上げると炎が強く燃え上がり、辺りがまるで昼間のように明るく照らされた。見飽きた樹木ばかりじゃないか……ん？ 焚き火の跡だと。まさかこの森に俺ら以外の人がいるというのか。

「いえ、我々しかないと思います。問題は……」

子狐が首を向けた先に俺は愕然とした。

それは樹に打ち付けられたままのラティアの姿があったからだ。彼女は驚いた様子で俺たちを見つめた。

どういうことだ俺らはなんでまたここに？

「まーさか、よくある迷いの森というやつかしら？」

何が面白いのかケラケラ笑うヒサキが怖い。

「とりあえず、別の道を探そうか」

踵を返そうとした時、突如地震が起こった。目の前がガクガクと揺れる。揺れはますます勢いを増していく。震度いくつぐらいだ？五以上はあるだろうか。経験したことはないが。うお、立ってられない。

何かにつかまろうとして、夢中だった俺は手探りで布状のものをつかんだがそれは、

「きゃっ！」

という声とともに道連れとなってしまうた。

「な、なにすんのよ、このバカアキラ！」

「わりいわりい」

俺たちが立ち上がろうとした瞬間、なにやら恐ろしいうなり声が聞こえてきた。

それはまるで肉食動物のように低く太い声だ。

恐怖のあまりヒサキと凍り付いていると、深柳の声が聞こえた。

「二人とも大丈夫か？ 暗くてよく見えないな……。ヒサキ、炎を出してくれ」

「ちよ、ちよっと待つて」

慌てて手を振り、炎を出そうとするがうまく出せないらしい。

「落ち着けて！ ひーひーふー！ 力むんだ、ほれもっかい」

「わかってるわよ！ てか、何の掛け声よそれえ！」

そうこうしている内にやっと炎が灯され、安堵しながら深柳を見上げたが、俺らは再度凍りついた。断じてそいつの顔がのっぺらぼうでしたとかそんなわけではない。

それは、頭にクエスチョンマークを浮かべている深柳の背後に佇む巨大な黒い虎を見たからだ。一瞬しか見えなかったが、マジで軽くヤバイ。

「きゅうっうっ」

ヒサキがその場に卒倒してしまう。

お、おい、倒れてる場合じゃないぞ。炎を消すなこのバカっ、怖いだろ。俺は半分パニックになりながら、

「深柳、気をつける！ と、虎の化け物が後ろにいるぞ！」

なんともこれ以上ないだろうというくらい情けなく叫び、そしてそのまま俺も気を失ってしまった。

参番目のけもの 貳

意識が戻ったとき俺は目を疑った。どうやら俺の知らぬ間に全世界が模様替えをしちまつたらしい。

念のために目をこすりながら、もう一度空を見上げてみる。

「一体、何の冗談だ」

鈍重とした雲から白き結晶が降り注ぐ世界に見覚えなんてないハズだが。

はて。もう一度寝なおしてみようかと考え、一つ寝返りを打ってみる。

「つめたい」

なんということだ。左側頭部にキンとする雪の冷たさを感じた。

それは未だ睡眠を欲する頭を覚醒するのに十分だった。俺はようやく事態を飲み込む準備をすることにした。

雪のベッドから身を起こし、自分の居場所を確認してみる。

枝をしならせながら雪を抱きかかえる枯れた樹木に、ええと

それだけか？

やはりというべきか、ここは俺の知るあの世界とは違うらしい。

むしろ真逆もいいところだ。

もちろん俺の口はぽかんと開いたままなわけで。いやはや、変顔
選挙権などに赴いたあかつきには上位三位以内に確実に入っていた
であろうアホ面だと自負できるね。

つまり、と白い息を吐き出し、

「どこなんだ、ここは」

そう、自問するように一人呟いたつもりだったが。

「忘れたの？」

絶え間なく降り続く雪の合間から聞こえたそれは、とても頼りなかった。

耳を澄まさなければ北風のひとつにかき消されてしまつくらい

「ここは私たちの島だよ」

振り返ると一人の小さな少女が笑顔で立っていた。

夏の世界に。

冬の世界で。

入り乱れる虚偽と欺瞞。

笑顔で苦しみに耐える彼女を前に俺は一体何が出来たのだろう。

涙を流し嗚咽をあげる彼女を背に俺は一体何を言ったのだろう。

なあ、これはただのゲームなんだろう？

紅く染まる世界に白く輝く世界を重ねながら、夢が覚めるのを待ち望んでいた。

さあ、この馬鹿馬鹿しい世界を終わらせよう。もう一度 力を込めるだけだ。

その瞬間、誰かがこう呟いた。

「奇跡なんて私は信じない」

The hisaruki game

第一章 『疑』

さてはて。一体この状況は何なのだろうね。ついさっきまで、巨大なモンスターに襲われていたかと思えば、いきなり見知らぬ世界に飛ばされたときたもんだ。

RPGにおける、こういったワケのわからないワープの場合には、すぐ近くに説明好きのキャラ、もしくはNPCなどが配置されているものだが。

「どうも、そう都合よくはいかないみたいだな」

「あ、あれっ。私見えてないのかな？」

辺りを見回し、鼻を一つすする。誰も居ないようだ。

なにになに。困った時は深柳に訊けばいいだろうって？ いやはや、あいつも一緒に飛ばされて来たのなら俺だってすぐさま尋ねるさ。しかし、どうも飛ばされたのは俺一人だけだったようで、然るが故に類筋肉はア水面から焦燥感溢れる面へと徐々に変化しつつあるというわけだ。

まあ。救いといえば、やかましいヒサキと一緒に飛ばされなかったことぐらいか。あいつと二人でこの雪世界を歩けば、たちまち春の大地へとショートカット間違いなしさ。どうせ、「はんっ、こんなチンケな雪なんざ私の炎でちよいのちよいよ。もーえーろよ、燃えろっ。あはは！ ヒサキ様の炎は無敵なりい！」とでも言いながら蹂躞闊歩間違いなしだろうね。それに慨嘆しながら続く俺の構

図　なんてバカな妄想をしている場合でもないか。

そろそろ本気で体が震えてきたしな。この粉雪、地味に俺の体温を奪っていきやがる。

「ねえねえ。明くんってばあ」

さて。これからどこへ向かうか。とりあえず屋根のある場所に行きたいものだ。

伸びをしながら立ち上がると、制服がじっとりと濡れて肌に張り付いていた。まったく不愉快極まりない。

「ふえええ。無視しないでよあ」

なにやら摩訶不思議な鳴き声を発したところで俺は少女のほうへ振り返った。

「悪い。軽い冗談だ」

しくしく泣き始めたその子の頭に手を乗せ俺は笑った。誰だか知らんが、一目見た瞬間、ついイジメたくなったのさ。そういうのってあるだろう？　チョップしてくださいオーラっていうのがさ。

「そんなの出してないよあ」

ぐすぐすと言いながら、首を振るその子に、

「でえい！」

ごすつと頭上めがけチョップ。

「ふええ！　ふええええん」

はははっ。こいつは愉快だ。こんなおもちゃ東急ハNZ辺りに置いてありそうだな。ますます泣き出す彼女に俺は腹を抱えた。

さて。遊ぶのはこれくらいにして、とつと訊いとくもん訊いておくことにするか。

「ところで、ちびすけ。お前は誰だ？」

至極シンプルに訊いたつもりだったのだが、少女は一瞬びっくりしたような顔で俺を見上げた後、少し視線を逸らしつつ、

「明くん。どうしてそんなひどいこと言うの？」

先ほどのチョップのほうがひどいではなからうか。というか、名前を尋ねただけだぞ。何故そんなリアクションを　　む？

その瞬間だった。俺の脳裏にふと文字が浮かび上がった。そしてそれを咀嚼する間もなく、

「……奏」

気づいたときには呟いていた。カナデって一体どこから出てきたんだ。はて？ 首を傾げる俺とは対象的にその少女はとてモニコニコしている。さっきの泣き面が嘘のようだ。つまり、それは適当に言った名前が当たっていたことを示唆するわけで。

「うん。適当なんかじゃないよ」

俯き、ぼそつと呟く。じゃあ偶然当たったってことか。なんでもいいが、そろそろパンツまで雪が滲み込んできたのでどこか暖かい場所へ連れていってくれませんかね。

「うん。どんとこーいだよっ」

彼女はどんつと胸をたたくと、手を俺に差し伸べた。

なんだ。案内料を取るのか。若いくせにちゃっかりしている。きつと良い姑になるだろうさ。領収書にはなんて書いてもらおうか。上様で切れるよな。

やれやれと制服の内側のポケットをまさぐっていると、

「わわ。違う違う。一緒についてきてって意味だよっ」

顔を真っ赤にして手を振るリアクションに満足し、（というか、マジで案内料など請求されたら、無一文な俺はここで野垂れ死に確定だ）

「冗談だっ」

そいつの手を取った。やけに冷たい。

「さっき、雪だるま作ってたから。だからだよ」

子供特有の無邪気な笑顔が眩しい。

「ふーん」

雪国の子供つつうのは、やはり遅いものだ。こんなクソ寒い中で遊ぶなんざ考えられん。いくら俺が田舎育ちとはいえ、冬はコタツに入り浸っていた記憶しかないぞ。サナとのミカン争奪戦は中々に体力を使ったがな。

……言っておいてなんだが、我ながら嘆息を覚えてしまった。

とりあえず、彼女に手を引かれながらその後姿に質問を試みる。

「なあ、ちびすけ。じゃなくて、えーと、奏」

「うん？」

「お前も俺の名前を知っていたってことは、少なからず『あるゲーム』のキャラクターなんだよな。一体、なんで俺だけこんな知らないところに飛ばされてきたんだ？」

少女はポニーテールを一つ揺らし、こちらを振り返ることなく快活に答えた。

「あはつ。明くんつてばゲーム好きだからね。またなんかの真似っこしてるんでしょ」

真似？ いやいや待て。何を言っている。この世界こそがゲームの世界なんだろう？

「うーん。そうだったらいいね」

彼女はそれだけ言うのとそれ以上何も答えなかった。こいつはもしかして、この世界がゲームの世界。造りものの世界だとは知らないんじゃないのか。先生や、シロツキはあくまでこれはゲームだということを知っていたが、全ての登場人物、ましてやこんな小さい子（小学生の高学年くらいだろうか？）は理解出来ないのかもしれない。ラティアのときもそうだったしな。

そうと決まれば、作戦変更。何もわざわざ「お前はただのデータに過ぎない」など至言しなくてもいいだろう。俺はただ暖かい場所に連れていってもらえさえすればそれでいいのだ。それに質問するにも、こんなに寒いと頭が回らんしな。

しばらくすると不意に、

「ねえねえ。今日のご飯、明くんの大好きなカレーなんだよ。ママが良いお野菜もらったから期待しててねだつて」

カレーとのフリーズにぎゅるぎゅると胃袋が収縮運動を通して俺に抗議する。

「ま、またカレーか。そりゃ毎日食っても飽きないけどさ」

「ふえ。ママは一週間に一度しかカレー作らないよ。もしかして、どこかでごちそうになってきたの？」

立ち止まり、きょとんとした顔を向ける。そんな無垢な瞳で見ないでくれ。おなかぼんぼなんです、なんて言えないじゃないか。
「そ、そんなことないぞ。のたうち回るほどに嬉しいぜつ。どっこいしょー！」

胃袋よ、すまん。

「あはは。なんか今日の明くんおかしいね」

そりゃこんなゲームだ、おかしくもなるさ。

「ううん。やっぱりいつもの明くんって感じて安心したよ」

「そうかあ？」

いつもって俺としては初対面極まりないんだが。俺が眉をひそめていると、

「そうだよ。うんうん。ほらっ、冷めちゃうよ？ 早く行こっ」

一人で納得し、再び小柄な手が差し出される。

「……あ、ああ」

ただのデータに過ぎないなんてちよつとひどかったかもな。

暖かさを取り戻した彼女の手をぎゅっと握ると、俺はそんなことをぼんやりと考えていた。

とまあ、そんなわけで彼女に引つ張られるまま来たワケなんだが。そりゃあ途中で、ひよつとしてなんて場面はチラホラあったさ。だがなあ、

「これがデジャヴってヤツか……」

俺が呆けていると、奏が「ふええ」とお決まりの鳴き声で重そうな門を開け放ち、トテトテと小走りで引き戸を開ける。そして俺を手招きしながら、

「ほらほら、明くん。お家に着いたよ」

と、これまた無邪気そうな笑顔で微笑む。なるほどね。

「舞台は変わらず。結局は同じ島だったってわけか」

俺は夏の世界で見た『アジト』の門を複雑な思いでくぐる事にした。

「きて下さい。起きて下さい！」

何やら、ふわふわと暖かい物が鼻をくすぐる。

「ふ、ふえつくしよい！」

不精不精、俺は起き上がると目の前に浮かんでいた毛の塊をひつたくるように掴んだ。こいつか。俺の眠りを妨げた毛玉野郎は。引っっこ抜いてやる。ぐいぐい引っ張ったところで、その毛だまりが声を張り上げた。

「ま、待ってください。私ですってば、シロツキです」

うお、なんだこいつ。可愛いぬいぐるみだな……ってシロか。ああそうだった、ゲームの世界だったよな。俺は目をこすりながら漫然と暗闇を見回した。

「……俺はなんでこんなところで寝ていたんだ？」

チクチクと背中雑草が突き刺さる。こんな状況で寝ていられるなんて、俺も鍛えられたもんだね。困ったことに。そっぴや、あの子供はどこいった。

「子供？ ラティのことですか？」

違う、彼女じゃなく、もっとちびっこい……。

「名前聞いた気がするんだが、たしか」

言いかけて、言葉に詰まる。……えーと、なんだ？ 俺は一体何を言いたいのだ。瞬間、頭がキンと痛む。その痛みは俺になにやら警告しているかのように加速していく。

「ッ痛！」

「大丈夫ですか、アキラ様」

ああ、すまん。ちょっと寝ぼけてしまったのかもしれない。悪夢でも見ていたのかな。こりやまいったねといったポーズで取り繕いを兼ねて笑うと、突然シロツキが俺の制服の襟を咥えた。

「笑ってる場合じゃないんです！ ボケっとしていると巻き添えを喰らいますよ」

ちよつと待て。巻き添えってなんのことだ。というか、染みになるから離してくれ。

だが、シロツキは問答無用とばかりにぐいぐいと俺を引っ張る。

頭を整理する暇もないじゃないか。ついでにまだズキズキ痛むぞ。

「あれを見てください、見たらそんなノンキなこと言ってられないと思いますよ」

何を見ろってんだ。やれやれと俺はシロツキの見据える方向に面を向け、

「……はは。まっただ」

即座に右向け右。むんずとシロの尻尾を掴むと、一目散に近場の木の下へと避難した。そりゃ慌てもするって。あんな巨大なバケモンのダンスを目の当たりにしたらな。

息を整えていると、俺は重大なことに気づいた。そうだ、ヒサキはどこだ？ あいつも確か俺と同じくして、ぶっ倒れていた気がするんだが。まさか、さっきの場所に置いてきちまったのか。これはチャーンズ、ではなくてすぐさま回収に向かわなくては。「なんであんただけ逃げてんのよ、燃やすわよ」なんて殴られるのは勘弁だからな。

「いえ、まことに言いにくいのですが、そこで熟睡しておられるのがお嬢様です」

シロの尻尾から赤い炎が灯されると、俺の足元辺りが照らされた。「くかー」

そこには樹に寄っ掛り、なんとも気持ちよさそうな寝息を立てているヒサキの姿があった。ついでにヨダレまで垂らしていやがる。

「おい！ ヒサキ、何ノンキに寝てるんだ！ バケモンがこっちに

来たらペツタンコパスタにされちまうぞ」

わりと例えがマンガチックだが、今は緊急事態だ。語彙など選んでられん。そいつの肩をガシガシ揺さぶるが、「あたしはナポリタンがいいー」などという寝言が返ってくるだけで、起きる気配など微塵も感じられない。つーか、ナポリタンで。お子様ランチかお前は。

そういえば、なんでこいつだけ少し離れたここに居るんだろう。まさかあれから起きて、また寝なおしましたなんて夢遊病的な動きはしていないだろうしな。

「お嬢様なら、私が姿を変えて運びましたよ」

軽やかに飛びながらさらっと言ってくれたが、待ってくれと言いたい。それなら俺もついでに運んでくれても良かったんじゃないか。もし俺がヒサキのように熟睡を決め込んでいたら、万が一だが虎に踏み潰される可能性もあったかもしれないぞ。位置的にな。そんな俺の不満に対して、

「男を抱きかかえる趣味なんてありませんから」

またしてもサラリと言いのける。なるほどそう来たか。先ほどまで生殺与奪の権をこの狐に託していたかと思うと、胃がキリキリ痛み出してきたわけだが。ん？ 待てよ。

「そついや、深柳は？」

不意にあることに気づいた。あの虎は俺たちに目もくれず、さつきから何を遊んでやがる。そのとき、俺は気絶する瞬間のことを思い出した。金髪の後ろに迫る、あの黒虎

「ああ！ そうでした、こんなことをしている場合じゃないんです。アキラ様、深柳様が！」

シロが言いかけた頃には既に走り出していた。クソ。なに悠長なことをしていたんだ。虎が踊っているだと？ そんなわけあるハズもない。深柳だ。あいつが食い止めていたんだ。もしかしたらあいつ、今頃……。

焦る気持ちを抑え、月明かりに照らされた巨大な虎の体軀を目印

に進むと、ようやく開けた場所に出た。そして、そこには睨み合うような形で、深柳と虎が立っていた。

ぽっかり存在しているこの空間には木々が少ないため、月の光が遮断されることなく大地を幻想的にライトアップしている。だが、それと同時に虎の全貌も不気味に演出していた。

ゴクツ。

あまりに驚いて唾を飲み込むなんてこと本当にあるんだな。

巨体も過ぎる。優に深柳の三倍もありそうな身の丈に、長く艶やかな黒い体毛を生やしている。ギョロリとした目は赤く、呼吸をするかのように明滅を繰り返していた。

序盤に出てくるような敵じゃないのは確かだ。バランスもなにもあったもんじゃないな、このゲームは。

虎は俺に気づいたように一瞥を送るとすぐさま深柳に視線を戻し、長い牙を見せて笑った。そして、やおら片足を上げると、地響きを鳴らしながら深柳の周りをぐるぐる回りはじめる。

その動きは、まるで深柳を値踏みしているかのように見えなくもない。

相手の様子を伺いながらボウを構えていた深柳はしびれを切らした様子で激昂した。

「さつきから逃げ回るばかりじゃないか。一体何のつもりだ！ 何故、戦わない！」

その言葉に舌なめずりをして、

「活きがいいヤツは好きだぜ。このオレの姿を見てビビらない奴なんぞ珍しくてな。つい、遊んじまっただぜ」

低く、さも嬉しそうに言葉をはく。

「何を！」

「じゃあ望みどおり」

「

言つと同時に前足が振り下ろされる。

予想だになかった攻撃に深柳は避ける暇もなく直撃を受けてしまふ。

「ぐはっ……！」

倒れこむ深柳を見下ろし、赤い目を細めると、

「やってやるぜえ！」

「くっ！」

再び振り下ろされた爪をすんで避けると、相手の足をめがけボウを撃つ。

しかし、虎はその巨体のどこにそんな俊敏さが備わっているんだ？ と問いたくなるような素早さでそれをかわすと、両前足を高く掲げ、そして凄まじい勢いで振り下ろした。

地響きと共に見えない衝撃が走る。

「何！？」

一瞬、間を置いた後、勢いよく深柳の肩から鮮血が噴出す。それはまるでマンガに出てくるカマイタチみたいだった。あまりのひどい墳血に目を覆いたくなる。

「割れてんだぜ、てめえの能力は。さあ、血の力ってヤツをオレに見せてみやがれ！」

「血の……？」

膝をつき、虚ろな目つきの深柳へ更にカマイタチのようなものを飛ばす。や、やめてくれ。さすがにそれ以上は、

「やめろおおおお！！」

待つてくれと叫ぼうとしたその時、後ろから絶叫のような声が聞こえた。驚き、振り返ると、そこには黄金に光輝くオーラを纏ったラティアの姿があった。

「おまええ、よくも、よくもリンを……！」

凄まじい形相で再び咆哮をあげる。彼女をつないでいたツタが無数に飛び回る金色の羽のようなもので引き裂かれていく。

そして即座に解かれ、自由の身となるとバク宙をして姿を変えた。

その正体はと言うとやはり鳥類で、金色の鷺がこの子の本来の姿だったようだ。いやはや、ちよつと可愛いなつて思つた子が鳥になつたりすると、ささやかながらへこむのは何故だろうね？

なんて考えている状況じゃないよな。

耳にはつきりと聞こえるような風切り音をさせながら深柳の元へと飛び立っていく彼女を見やり、俺は何をしたかというつと、頼むあいつを護つてやってくれと祈るほかなかった。

ラティア、守護なる心の果てに 前編

容赦ないカマイタチに耐えていたハンドボウもついに粉碎したその瞬間、深柳の前に黄金の翼をはためかせ、ラティアが舞い降りた。
「もう、やらせない っ」

呟く声に、確かな怒りの色が見える。尚もカマイタチは繰り出されるが、彼女に当たる寸前、金色の波紋と共にかき消されて行く。もしかして、あの子には特別な防御壁でも備わっているのだろうか。いくら放つても波紋に吸い込まれていく様を見た虎はどうやら諦めた様子で低く唸った。

「ラテイ、なのか？」

手探りのように手を彷徨わせる深柳を抱きしめるとラティアは無言で首肯した。

「君がどうして……」

答えない彼女に、自嘲を含めた笑いで、

「そうだよな、僕的能力程度で君を拘束するなんてとても出来ない。バカだったな僕は……。血の力とやらも使えずに、こんな無様な」

「うっん。違う、リンは、強い。でも、まだ力の使い方がよく解っていないだけ……」

俯き黙する深柳に、

「お願い、私と契約して。私を忘れててもいいの。思い出さなくてもいいの。ただ、貴方の力になりたいだけ」

「でも僕は……」

「けっ、そうはいかねえぞ。ラテ子でめえ、それはルール違反だろ。そいつは今、このオレに試されているんだぜえ？」

背後に覆いかぶさる黒い影に振り向くラティア。

「クーちゃん、どうしてこんなことを！」

金髪が夜風になびき、今にもケン力を売りそうな強い眼差しを巨

大な獣に向ける。その話しぶりから察するに、この二人（いや、二匹と言うべきか？）は知り合いらしい。そりゃ二人ともこの森に住んでいるわけだからして、なにも驚くべきことではないとは思うが、いやはどうして。なんとも違和感が拭えないのは俺だけなのかね。そのクーと体軀に似合わない名で呼ばれた虎は、まるで近所の悪ガキのような悪態で、

「どうしてって、んなこと決まってるじゃねえか。この森に来た奴らを試す、んでこいつになら仕えてやってもいいって納得すりゃあ契約。ま、そんな面されても規則じゃ使い魔同士は戦っちゃヤバイらしいから、ここは素直に順番つてものを守つていたほうが懸命だと思っぜ」

どうやら、こいつらの総称は『使い魔』らしい。ということは、ラティアは当然のこととしてやはりこの巨大な化け物もシロと同様、捕獲すべきものに間違いないのだろう。

だとしたら、シロやラティアには悪いがまるで格が違うと言わざるを得ない。言うなれば、仲間になくはない奴がラスボス並の強さで試みたいなものだ。理不尽も甚だしい。

探してもすぐさま逃げるように町を移動していく仲間に匹敵するほどの厄介さだね。

「そんなの関係ない！」

叫ぶと、彼女の爪先に金色の光が纏われていく。そして長く伸びた光の爪を振り上げると、凄まじい跳躍で虎の喉元を切り裂く。だが

「お前、何ムキになってんだよ。そんなにそいつがお気に入りなのか？」

少しも効いていない様子でカラカラと少女を揶揄する。しかし、頭に血が昇ってしまっているのだろうか。ラティアは耳を貸すことなく、ただただ跳躍しては一閃を繰り返す。

しばらく首を鳴らしながらその様子を可笑しそうに見ていた黒虎だったが、突如として巨大な足を振り上げた。そして、再度首を狙

おうとした彼女を地面へ叩きつけると、呆れたようにため息をついた。

「わーったよ。この姿じゃ不公平だ。勝負してやるからちよつと寝てろ」

使い魔同士で戦うなんてどうかしてる。そう言いたいところだが、深柳は重傷、ヒサキは熟睡なんて割と絶望的なこの状況では、どうにかラティアに時間を稼いでもらうしか術はない。もちろん俺のことは戦闘員の数に含まれていないぞ。

虎の興味も削がれたこの隙にと深柳の元へ向かい、肩を貸す。出血のせいか、やけに軽いな。

「深柳、大丈夫か？」

金髪は俯いたまま「すまない」と言い、更にポツリと漏らすように続けた。

「ラティと契約するのが怖かった。だからあいつと契約を結ぼうとしたのに。でも、勝てなかった。やつぱり僕は、無力だ」

初めて耳にする深柳の弱音だ。こんな時、なんて返せばいいのだろう。俺は迷った挙句、

「そうか」

としか答えられなかった。傷ついた仲間に気の利いた台詞の一つも言えないなんて、俺は自分が恨めしくなる。そんな自己嫌悪に陥っていると、生ぬるい風が草木を揺らした。

ふと、使い魔たちの方へ目を向けると、虎の巨体が黒い光に包まれていく最中だった。

やがて黒い光が霧散していくと、その中央に一人の女性が立っていた。

黒髪のショートに凜とした眼。それはやはりというべきか、獣の姿のときのような鈍い血の色をしていた。

そして、やや乱雑に着こなされてはいるが、シロツキと同じ黒のスーツを身に纏っている。彼女もそれを着ているということは、つまり、それは使い魔特有の制服みたいなものなのだろう。そもそも

ラティアのセーラー服もどきの方が異端なのかもしれない。もし次のゲームがあるのならば、是非ともそちらで統一してもらいたいものだが。

「んじゃあ、やろうぜラテ子。言っとくが、オレはシロ助のように甘くないぜ。馴染みだからって手加減するほど器用に創られてねーからな」

倒れ伏しているラティアにそう言い捨てると、彼女は不敵な笑みを浮かべながら髪を掻き上げた。

ラティア、守護なる心の果てに 中編

切れ切れの雲の彼方にどっしり腰を据えた満月が、俺たちを静かに見下ろしている。

威風堂々と言わんばかりの悠揚たる様子でアホ毛をいじるトラ娘に、よろめきながら体を起こすワシの子。

まさに大人と子供と言える構図だ。

「どうしたあ？ ほら、来いよ。どっからでも構わねえぜ」

両手を広げ余裕を見せる女に対し、金髪娘はどこか虚ろな様子でブリーツスカートに手を這わせた。取り出されたのはつい先ほど俺を震え上がらせた金色のナイフだった。

「クーちゃん、強いのが、知ってる。多分、ううん。私じゃ絶対勝てっこない」

「ははっ。そりゃ、オレのほうが強く創られてるからなあ。やつばやめといたほうがいいぜ。今なら特別サービスで許してや」

「る、そう言いかけたのだろうがそれはラティアの突飛な行動によって遮られた。」

「でも、それでもリンを渡したくないの。私、バカだから。こんなことしか思いつかない……」

瞬間、ラティアはナイフを掲げたかと思うと、

「ごめんね、クーちゃん」

何を思ったのか自分の腹に突き刺しやがった。何度も、何度も突き刺す。小気味悪い粘着質の音と共に、小さな血だまりが生まれていく。

これは、一体なんの冗談だ。

「なっ……」

クーと呼ばれた女でさえ先ほどの余裕から一転、驚愕の様子で彼女の自傷行為を見ている。

カラン、とナイフの落ちる音に目が覚めたのか、膝をついたラテ

イアの元に向け寄ると肩を揺さぶる。

「ラテ子、てめえ正気かよ！ 何してんだ！」

前傾姿勢のまま、彼女は何も答えない。不気味なのは、あれほど腹を裂いたにも関わらず、呼吸一つ乱れていないことだ。その姿は直視出来ない程に痛々しい。

そして、緩慢とした動きで顔を上げたラティアに俺は息を呑んだ。乱れた金髪に、とろんとした眼が輝いている。そう、マジで光ってやがったんだ、金色に。それは先ほどの彼女とは別人のような顔立ちだった。真一文字に結ばれた口元はいつさいの感情を持っていない。どこか遠くを見ているような表情だ。

異質な空気を感じ取ったのか逃げるように短髪女は後ろに飛び退いた。

「くそ。冗談、きついで」

呻いたのとほぼ同時だった、ラティアは翼をひとつはためかせる。次の瞬間、女の目の前にラティアが立っている。んなアホな。そう言いたげな顔を見上げる金髪はやはり無表情だ。おぞましいほどに。

「……」

ぬるりと滑り込むようなナイフの一閃。それはトラ女の右腕に深々と突き刺さった。

「ぐっ！」

膝をついたそいつの頭上に無数のナイフが現れる。途端に察したのか、間一髪で飛び退る だが。

「遅い」

瞬間移動のような素早さで黒髪の後ろにラティアが出現する。先ほど対峙していた空間には金色の羽が舞っている。常套句だが、もはやラティアの動きを眼で追うことすら辛い。

大体、彼女の中で何が起きたのかまったく判らん。急に、眼が輝いたかと思うとコレだぜ？ あのクーとやらが逃げ回ることしか出来ないなんて、いくらなんでもさすがにおかしいか。

「このっ、いい加減に！」

いつの間に距離を稼いだのか、クーは着地すると同時に虚空を手で裂いた。轟音と共に、空気が震動する。それはあの力マイタチだった。

「無駄」

ラティアのかざした掌の前に金色の防壁が現れる。それはぐにやりと歪曲すると。って、うお！

俺の頭上を掠めやがった。深柳も傍らにいたというのに、あいつは見境をなくしているのか。こりや悠長に戦闘状況を説明している場合じゃなさそうだ。

「おい、クーとやら。ラティアは一体どうしちゃったんだ！」

俺の問いに、

「て、てめえにクーって呼ばれる筋合いはねーよ！ オレはクロエだっ！」

真っ赤な面で返しやがる。なんだ。案外、元氣そうじゃないか。「ありや、えーと。集束だ。つーか、外野に説明してる暇なんてぐっ！」

集束？　なんだそりや。

そういえば似たような……そう、一瞬だがヒサキとシロの戦闘でもあの眼に似た輝きを垣間見た気がする。

だとしたら、その『集束』は使い魔の超能力みたいなものなのだろうか。よくはわからんが、それならクロエも集束とやらを使ったらどうなんだ。

「簡単に言ってくれるじゃねえか。……あの反則技はよ、かなり追いつ込まれなきゃ使えないように制限されてんだ」

彼女の白い歯が唇を噛む。それは苛立ちを表していた。

「追い込まれる？」

「ああ　肉体的な場合もあれば、精神的な場合もある。ラテ子は両方だな。普段はばけぼけっとしてやがるのに、どうしちゃったんだアイツ」

言いつつ、数多に降り注ぐナイフの雨を避ける。着地、すかさず空間を引き裂き、カマイタチを繰り出すがそれをあっさり防壁に弾かれる。しばらくそのパターンが続いていたが、何度目のことだろう。

「けっ。集束相手に何真面目にやってんだオレは。おい、そのへっぴり腰」

もしかしくとも、それは俺のことだな。

「なんだよ」

「その王子サマを起こしてやってくれ。わりいが降参だ。まさかラテ子にボコられる日が来るとはな」

合点承知とばかりに俺は深柳を揺さぶる。

「おい、深柳。起きろ。緊急事態だ」

止まってはいるが、あれほどの出血だ。本来なら、休ませておいてやりたいところだが。

目を覚ました深柳はボーっとした様子で、

「むう。頭がクラクラする」

そりやそうだろう。あんなだけ出血しておいて、寝覚めがいいハズがない。つーかお前、傷は大丈夫なのか？

「ああ　これは、どうやら傷が塞がっているみたい、だ」

不思議そうに自分の体を確認している。あれだけの傷が少し眠っただけで癒えるなんて、まさしくゲームならではって感じたな。

「それって、なんだか強引な解釈……」

「ははっ。そうかもな」

ま、この際お前が無事ならなんでもいいけどさ。

「よっ、王子サマ」

呼ばれた深柳が振り向く、そしてしばし三点リーダを並べた後、寝ぼけ眼のまま俺に向かって一言。

「あれ、誰？」

なんだか、さっきからボケボケして深柳らしくないな。もしかしてこいつって低血圧なのか。それならば寝起き直後でも分かりやす

いように説明してやろう。

「あいつはさっきまでお前が戦っていた虎のバケモンだ。んで、聞いて驚くなよ。なんと、名はクーちゃんというらしい。その手の専門的な観点から言えばクーにゃんと呼んでもさほど問題はない。そして語尾にはニャンといった付属が施されているワケで、つまりは自己紹介の際に自分はクーにゃんニャンなどといった、いわゆるゲシユタルト崩壊的要素も兼ね備えつつある最強の――」

弁舌さわやかに説明していたところで容赦ないゲンコツが飛んできた。

「い、い、言わしておけば、抜け抜けとっ！」

可愛らしい愛称のくせにシャレにならん攻撃だ。とは言え、リアルパンチングマシーンを自負する俺から言わせれば、ヒサキには断然劣るといった判定が下されるが。

「ったく。オレはクロエ。まあ、自己紹介は後だ。とにかくラテ子を、あのバカを止めてやってくれ」

怪訝そうな深柳だったが、

「逃げても無駄……」

背後から近づいてくる声に、すぐさま状況を理解したらしい。

「あれがラテイ、なのか？」

一つ首肯しておく。

「詳しくは知らんが暴走しているらしい」

クロエがため息混じりに頭をボリボリ掻く。

「おめえと契約するってきかねえんだよ。もうオレはお前を諦めた。ラテ子に譲る。だから……」

風切り音。赤が洪水のように溢れかえり、俺の視界が奪われた。それはナイフで首を抉られたクロエの鮮血だった。

倒れこむ彼女に一体何が起ったのか分からず、呆けていたが、

「もう　いい？」

耳元に囁くようなこそばゆい声音に振り返った。

仰々しい程に開かれた翼は黄金色の光を灯していた。

甘美な唇に細く艶やかな金髪が微風に揺れる。右手に握られた刃さえなければまるで国立西洋美術館に展示されている絵画として描かれていても不思議ではない。

こんな状況だというのに見惚れてしまったね。男の性だ。

「僕のせいだ。僕が、ラティエを止める」

立ち上がる深柳。俺は所々穴の開いた学生服を見上げた。

だが、どうやって？ 頼みのボウは粉碎されてしまったんだぞ。

俺の剣を貸し出そうか。

「その必要はないさ」

言うが早いか、そいつの腕から いや、正確には塞がりかけていた傷口から赤い蔦が生まれる。それも一本や二本ではない、数十本は伸びている。

どうやら、これがのたうつなんとやらって能力の本当の姿らしい。間近で見た感想としては、予測していた以上にバイオであると言える。

深柳は、触手のように蠢くそいつらに侮蔑の視線を送ると、
「なるほど。種は僕自身ということか。吸血植物が『血の植物』の正体とはね。ぞつとしないが、これこそ僕に相応しいのかもしれない。皮肉だね」

自嘲めいた感想を漏らした。次いで、ラティエに視線を移すと、

「ラティエ。君は僕の声が聞こえるか？」

ラティエは無言のままナイフを逆手に持ち直す。集束し、深柳を睨め付けるその瞳は敵意しか感じられない。

どうやら、この流れは最悪の状況になりそうだ。

「今まで、すまなかった」

そしてその流れが動きを始めた。深柳の白くしなやかな手から不釣合いにからみついた蔦がラティエに向かって伸長する。

「無駄」

やはり、いとも容易くそれを切り刻むと、またもあの反則級な瞬間移動を始める。

「……バカな」

白皙の顔に焦燥が見える。まったく馬鹿げてる。そう思いたいのもわかるさ。

集束もへったくれもあるものか。そんな無敵コマンドを初心者相手に使うなよと言いたくもなるが、ラティアの暴走はこのゲームにとって予定外の出来事だろうからその台詞を飲み込んでおく。

「瞬殺」

突然、宙から現れたラティアが物騒なことを呟き、スカートの中から取り出されたやはり金色のナイフ。

見上げる深柳に、雲霞の如きナイフの怒濤が迫る。なんだあの数。ひいふうみいつて、四次元スカートか。

目を背けようとしたその時、

「激、爆熱ってね！」

空に大蛇が舞った。そう、巨大な翠炎によって、それは食い止められた。

「ははン。ようやく本性を表したわね、この貧乳！」

振り向くとそこには眠りから覚めた仁王立ちのヒサキがいた。頭には神妙な面のシロが乗っている。時折、花火のように足許で火花が散るところを見ると、まだ炎の余韻が残っているみたいだ。

んなことよりも、幾分か懐かしい顔に込上げてくるものがある。

「ヒサキじゃないか！ やっと起きてくれたのか」

なんとも情けない声を出しつつ（半泣き混じりだと言っても過言ではない）、そいつの元に駆け寄った。助走を見誤り、つい抱きついてしまったのはすまんが不可抗力だ。

「ちょ、何よ！ ど、どしたのよ」

狼狽するヒサキには申し訳ないが、言葉では言い表せない程に安堵したんだ。だから少しの間だけこの愚行を許してくれ。

「うー。しょ、しょうがないわね……」

む。このバニラエッセンスの香りは俺と同じシャンプーを使っているのか。あれは安い割に中々コストパフォーマンスに いや、

これは別のメーカーか。

「なに嗅いでんのよバカっ！ やっぱダメ！ 放しなさいよ、この変態っ」

「さて、銘柄を当てんと気がすまん。それでも利き珈琲では三位の入賞経験があるんだ」

ぐぬぬと押し合いをしていると、急に目の前が光った。

「次、邪魔をしたら、許さない、よ？」

小首を傾げながらも、その煌く眼光は否応なしに俺たちを萎縮させる。

「は、はい！」

ヒサキと声を合わせる。

現れたかと思ったら、すぐさま跳躍。俺たちの前にはただ羽根が舞い落ちるだけといったわけで。

「大人しい子ってキレると皆ああなのかしら」

さすがのヒサキも面食らってる様子だ。ラティアの場合、最初からぶち切れてたイメージもあるが……。

ま、なんにせよ俺は深柳に視線をスライドさせる。

華奢な体躯にも拘らず、あのラティアと攻防を繰り返しているあいつを素直に応援出来ない自分がいた。

ヒサキは仕方ないと思っていたが、深柳も尋常ではない。現実を見たくはなかったが、やはり俺とこいつらの差は歴然だ。能力云々抜きにしても、それは変わらない。

もしかしたら、あいつは強すぎる、あんな能力あり得ないなどと文句を言ってる俺のほうがおかしいのかもしれない。

まいったな、これは。そう心の中で呟くと自分への業腹さから逃げるように星空を見上げた。

ラティア、守護なる心の果てに 後編

目の前で幾度となく交差する触手とナイフ。まるで映画のスクリーンに映し出されているのではないのかと疑いたくなるような激闘だ。

状況は……。耐えてはいるが、劣勢はやはり深柳だ。

あいつの辛そうな顔を見ていると手を貸してやりたくなるが（俺が行ってどうなるってワケでもないが）、ラティアのあの眼を見ただけですくみ上がった俺たちはただの観客に徹するしかなかった。にしても、こんなド迫力な戦いが見られるなんざSチケットクラスだよな。その手のマニアにとっちゃこの試合は垂涎物に間違いない。売ったらいくらくらいするんだろうね。

などと諦観の域に達した俺に、

「なーにノンキなこと言ってるのよ。リンがやられたら、次あんたがアレを食い止めなきゃいけないのよ」

まさか。深柳が負けるって？

隣で腕を組んでいたヒサキが口をへの字にひん曲げて俺を睨んだ。
「そんなの見りゃ一目瞭然じゃない。あんな調子で勝てたら奇跡だわ」

もしかしたら、起こるかもしれないだろ。その奇跡ってやつが。

「……なんかさー。あんた見てると自分には関係ないって顔してるのよね」

「そんな顔、してるか？」

俺の曖昧な返答に、ヒサキが苛立ちを露にした。

「してるわよ。もし、私とリンが斃れたらあんたどうすんの？ おとなしく殺されるわけ？」

仮にそうだとしても、ゲームなんだから蘇生術とかあるんじゃないのか。もしくは三人死んだらアジトから復活とかさ。

「あんた 本当にバカね。そんなのあるわけないじゃん。死んだ

らハイそこでお終い。ゲームオーバー、さよならバイバイってね」
ややオーバーアクション気味に言い捨てる。だが、んなこと言われても俺はお前たちみたいな怪奇能力を持ち合わせていないんだよ。そつさ、運動神経もなけりや、戦闘センスだってない。ないない尽くしだ。だから、

「だから？」

ヒサキの突き刺さるような言葉に、俺はつい顔を伏せてしまった。
「どうしようもないだろ……」

そいつの責めるような眼を直視できなかった。

「そんなんで、どうするのよ！ あんたのそのバカでっかい剣はお飾りなワケ！？」

突然ヒサキの語気が強まった。

「……」

返す言葉が見つからない。

「足、震えてるわよ」

言われてから気づく。

ガクガクと震える足を抑えるが、一向に止む気配がない。むしろ激しくなっていく一方だ。

「ちくしょう」

正直なところ傷つくのが恐ろしかった。現実にとても良く似たこの世界。頭ではゲームだと理解していても体は割り切ることが出来ないらしい。

……斬られれば当然痛覚はあるのだろうし、相手を傷つける感触も生々しいのだろう。テレビの前でコントローラーのボタンを押すのとは訳が違う。

よく覚えてはいないが、初めのヒサキとシロの戦いで俺は完全に腰砕けになっていたのかもしれない。

今、行われてる戦いだって冗談でも交えなきゃまともに見てられない。

そつ、実際に繰り広げられてきた戦闘シーンはあまりに俺の稚拙

な想像を越えていた。

ゲームの世界でただ暴れられる。あの剣や魔法を体験できる！
ゲームーにとってそれは甘美を過ぎる程の素晴らしい響きだったが、いざ実際にやってみるとこのザマだ。

浮かれていた自分の単純な頭の構造には呆れかえるしかない。

「ごめん。ちよつと言い過ぎたかも。慣れてないもんね、アキラは
こういの」

ヒサキはバツの悪そうな顔をして俺を見上げていた。

「謝ってくれるなって。お前の言うとおりさ。ビビってたんだと思う。このままお前達にすがって逃げてもなんとかなるのかもしれないって心のどこかで思っていた。情けない話だよな」

「別にいいわよ。あんた、能力使えないんだしさ……」

「ごめんな、ヒサキ」

目が合うと、そいつは拗ねた子供ののように視線を逸らした。

「仲間、俺じゃなきゃよかったよな。こんな役立たずが来たんだ、
そりゃヒサキだって怒」

「だから、別にいいって言うてるじゃないっ！」

「……すまん」

それだけ言い、黙する俺にそっぽを向くヒサキ。

俺達の気詰まりな沈黙に木々のざわめきが重なる。

「もうやめよ。こういう話、なんか好きじゃない」

「そっ、だな」

「ねえ、さつきから気になってたんだけど、あれって何？」

一つ鼻をすすり、ついつと視線を動かしたヒサキは何かを発見したらしい。

「ああ、あいつはクロエって言ってな。って、やべえ！」

あの虎ムスメのことすっかり忘れていた。

「ちよ、ちよつと！もしかして、そいつってば、あのでっかい化け物だったヤツ？」

「そっだ、さつきラティアにやられた。俺の目の前で首をグサつと

な」

俺たちはぶっ倒れているクロエの元に駆け寄った。首元からは、未だにドクドクと血が流れている。

「うげえ。それ、もう死んでんじゃないの」

「なにもここまでしなくてもいいのにな……」

そんな顔面蒼白な俺たちに、

「いえ、私達使い魔はこの程度では死にません。案外丈夫に造られているんですよ」

涼しげに呟いたのはシロだった。寝ているクロエの周りをふわふわと浮遊したあげく、すっと胸に着地する。

「まったく。あなたほどの戦闘狂がその程度で気絶するはずないでしょう？　寝ているフリをしても眼球の動きでバレバレです」

言った直後、だ。突然、クロエはぱちつと目を覚まし、起き上がったかと思うとむんずとシロを掴む。

「うつせー。シロ助。てめえのその嫌味ったらしい性格、クソ懐かしいぜ。まったく、ずけずけと人の胸に乗ってんじゃないやねーよ変態が」

「おやおや。これは驚きました。あなたに恥じらい、ですか。フツ、冗談も甚だしいですねえ」

気のせいかな、シロツキの表情がとても活き活きしているように見えるぞ。

「あ、あんだとーっ!？」

「栄養をそのバカデカい胸ばかりではなく少しは頭の方に回したらどうです？　あなたは虎でしょうに。牛じゃあないんですから」

一瞬、胸を抱くポーズを取り羞恥の色を頬に宿したクロエは、

「む、胸のことは言うな！　コノヤロー、今度こそ決着つけてやる……」

シロを放り投げると、腕を眼前にもっていく。それはかまいたちを飛ばす構えだった。

対して、着地と同時に人間の姿に化けたシロは嘆息気味に、
「相も変わらず短気ですねえ。……いつでも受けてたちますが、少

しは状況というものを考えなさい」

くいつと深柳たちを指差す。

ここでやっとクロエが冷静さを取り戻したらしい。

「いつてて。そーだ、ラテ子のやろう」

首を抑え、呻き声を上げるクロエに、

「あんた、これは一体どうなってるの。なんであの子が集束してるのよ！ 状況を教えなさい、今すぐ、簡潔に、いち早く！」

怒涛の勢いでヒサキが掴み掛かった、その時だった。

矢庭に鐘の音が森全体に鳴り響く。それもただの鐘の音ではない、頭が割れてしまうんじゃないかと思うほどの轟音だ。ぐおんぐおんと頭が揺さぶられる。

うお。シャレにならん、耳がどうにかなってしまふ。

ふと、ヒサキに目をやると何やら呆然といった様子で立ち尽くしていた。

「おい、ヒサキ。耳を塞げって！ 鼓膜がイカれるぞ！」

そいつは俺の声が聞こえていないのか、

「嘘、でしょ。どうして刻刻が ありえない、さっきからどうなってるのよ」

コツコク？ また新しい単語が出てきやがったな。

こいつは何故、集束やら刻刻といった妙な造語をまるで当たり前かのように既知しているんだ。取扱説明書にでも載ってるのか。

だとしたら、なんだか置き去りにされている気分だぜ。俺のゲームに取説がついてなかったのは、まさか中古でしたってオチじゃないだろうな。

ますます警鐘音が激しくなる。この鐘、どこで鳴ってやがるんだ。

「ちくしょう、あいつ。これは何の真似よ」

不意にヒサキの押しつぶすような恨み言が聞こえた。顔を向けると、そいつは月を睨め付けていた。

「おい、シロ助。こりゃあマズいぜ。ちんたら契約ごっこをしている場合じゃなさそうだ」

「ええ。おそらく原因はラティアの集束だと思われますが……」

「要因はなんにしる、だ。どう考えても刻刻のタイミングが早すぎる。あの野郎、予定を繰り上げるつもりだ」

こいつらはいいつらで勝手に進めてやがるし。やっと鳴り終わりやがったが、刻刻と言ったか、このバカデカイ鐘の音の正体もわからん。一体俺の知らないところで何が起きてるっていうのだ。

「お嬢、ラティア達を止めるのです。今、まともに戦えるのは、言いかけて、空気が止まった。どうした。」

俺はシロツキとクロエがぽかんとしているのを見て、ヒサキの動揺面を見た。三人の視線の先にはラティアと深柳が戦っている、ハズだった。

「み、深柳……？」

人は驚くと、誰しも似たようなリアクションを取るもんなんだな。「アキラ、ヒサキ。契約は完了したよ」

そう言いながら、こちらに近づいて来る深柳の手の中には、気絶したラティアが抱かれていた。お姫様抱っこって奴だ。

俺はどう切り出しているものか迷った拳句、ヒサキに目配せを試みた。

俺の視線に気づいたヒサキはごくりと唾を飲み込んだ後に、

「あんた、それどうしたのよ……」

そう問うヒサキの手には俺の制服の袖が握られている。

「さっきの鐘の音を聞いていきなり苦しみだしたんだ。だから、なんとか倒すことが出来た。幸運だったよ。もしかしたらカミサマが見ているのかもしれない」

淡々と言うが、問題はそこじゃない。集束状態のラティアを何故倒せたか、ではなく。

「アキラもその猫と契約を済ませたはずだ。さあ、みんな。先生のところへ帰ろう」

俺達の横を緩慢とした動きで深柳が通り過ぎる。そして、そいつは背を向けたまま、

「刻刻が鳴り響いた……。この意味が解るよな、神塚ヒサキ」

神塚 ヒサキの苗字か。いや、それよりも。

「……うん」

それだけ返事すると、口を閉ざす。ぐいっと袖を引っ張られる。

ああ、わかつている。

「深柳、一つだけ訊いていいか」

さすがに俺だって、こんなあからさまな異常には気づくさ。そして、誰もそれをそれと言わない。なんとなくヤバそうだったのは解っている。

「……なに？」

未だ、こちらに背を向けた状態のそいつに、

「どうしたんだよ、その紅い眼は。それ、『集束』ってヤツだろ？
どうして、お前が！？」

ぐるりと首だけを回転させる。見開かれ、焦点の定まらない紅眼。

それはラティアのそれよりも不気味だった。

以前の黒檀のような瞳からは想像も出来ない。

「刻刻が啼いた日、その夜明けと共に『本当のゲーム』が始まる。

何も心配はいらない。センセイが全て語ってくれるさ」

「ほ、本当のゲームってなんのことだよ！」

最後に深柳はこう告げて、歩を進めた。

「ヒサルキゲーム。それがああるゲームの物語の正体だ……」

サイドストーリー 紗華夢 夜虹の場合 前編

雪が降っていた。

ひらひらと舞い落ちる紅い粉雪。

真っ赤に染まる空を、私はただ無表情に見上げていた。

時折吹く風が、ベツタリと頬に張り付いた血を乾かしていく。

「どうしてだよ！ どうして、お前が！」

不意に聞こえてくる涙混じりの声。

振り向くと何かを抱きしめながら泣いている男の子がいた。

真っ赤な絵の具をぶちまけたかのような雪のシートにたくさんの肉塊が散乱している。

「奏、なんでこんなことを……」

かなで ？

この人は誰のことを言ってるんだろう。

だって私は、私の名前は

The hisaruki game

「紗華夢 夜虹、そろそろゲームの時間だ。起きろ」

耳をつんざくような巨大な声に驚いた私は、飛び起きると同時にベッドから転げ落ちてしまった。

「ふえー。痛いよう……」

頭をさすりながら痛みをこらえる私の耳元にまた変声機を通したような機械声が聞こえる。

「夜虹。聞こえていたら返事をしろ」

うー。そんなにヤコウヤコウ言わなくても聞こえてるって。

私は音量を調節するべく、右耳のイヤークフを触った。ええっと、ここだっけ。

「はいはい、こちらシャゲム。すみませんピース。音羽の調子が悪くて通信に手間取ってしまいました。……はふう」

なんてあくび混じりに適当なことを言っていると、

「まだ寝ぼけているようだな。また明日にでも連絡する。とりあえず顔でも洗って来い」

ぶつつとそこで通信が切れてしまった。

「なんだよう」

急な用じゃないんなら、あんな起こし方しなくてもいいのに。特に寝起きのピース声ほど心臓に悪いものはないよ。

なんて、こんなことあの人の前じゃ絶対に言えないけどね。恐いし。

とにかく、と。私は起き上がるとゆっくり深呼吸をした。

保健室独特の包帯や消毒薬の匂い。お薬の香りってどうしてこんなに気持ち安らかになるんだろ。こんなことを思うのって私だけなのかもしれない。

とりあえず日付でも確認しようかな。壁に掛けられていたカレンダーを見てみる。

「さてさて。今日は何の日かな。えーと光文四十五年の……八月二十五日？」

あれ、なんでこんな早くに起こされたんだろう。いつものゲームならあと二、三日は遅いの。ピースに何か考えでもあるのかな。ま、どうせ毎回ゲーム内容変わるし。そのせいだろう。

コキコキと首を鳴らして洗面台に向かった後、私は自分の身なりにため息をついてしまった。

「服がしわしわだ……。前回の後このまま寝ちゃったんだ私」

黒いセーラー服に白いリボン。まんま中学生の時の制服だった。今となつては学校に通っていた日々が懐かしいけど、ゲーム内じゃずっとこの服装だもんね。それに、今更着替えたくても代わりの服もないし。

そういえば、私ったらいつからこのゲームをやってたんだっけ。計算してみようかな……と思ったけど途方もなさそうだから結局やめてしまった。

考えるだけで老けてしまいそう。

「ふーさっぱりさっぱり」

顔を洗った後、私は保健室の窓を開けた。見渡す限り、山だらけ。強いて言えば、山並みの間からちらつとだけのぞく海くらい。

しばらく涼しい夜風を浴びた後、真下を覗いてみた。小さめのグラウンドにさまざまな遊具。それに赤く錆び剥けてしまった朝礼台。向こうには背の順に並ぶ鉄棒が見える。結局、いつまでたっても逆上がり出来なかったなあと思いつつ、私は顔を上げた。

「つい最近のハズだったのに、なんだかすつごく懐かしい。あはは。ゲームのやりすぎだよね」

ふと、感傷に浸ってしまいそうになり私はぶんぶんと首を振った。「ダメダメ、忘れなきゃ」

忘れていたハズの記憶の断片が私の頭を苛ませる。このままじゃ

押しつぶされてしまいそう。そう思った私は、

「空のお散歩でもしよつと！」

再び窓枠から顔を出した。

「うつひょー。け、結構高いかも。こりゃ落ちたらさすがに痛いかな」

これは呪文を間違えられない。もし万が一間違えてしまったら、と思うとぞつとしてしまった。

あまりに久しいため自信が無い私はとりあえず保険がてら杖を呼ぶことにした。

「紗華夢 夜虹が命ずる。我の元に飛来せよ、霊冥」

言つて数秒後、山の向こう側から飛んできた黒い杖を掴むと、私は窓から身を乗り出し、

「多分、平気だよな」

少しだけ躊躇ったあと、意を決して飛び降りた。

目を瞑ると霊冥を通して頭の中に呪文が浮かぶ。ああそうだった、これこれ。

「クインシィが魂よ。我に飛翔の羽を宿せ！」

途端に私の背中からバイオレット色に光り輝く巨大な蝶の羽が生まれる……つとと、上手くバランスが保てないや。

どうやら早く目覚めたのは正解だったのかもしれない。ちよつと練習しないと、これじゃあゲームにならなそう。

しばらく、ふらふらと右往左往した後、私は学校の屋上へ舞い降りた。

「ふえ、ふえ……えつくしゅー！」

ずるずると鼻水をすすると羽の呪文を解く。

羽は相変わらず使い勝手いいけど、この鱗粉だけはとうにかからないかな。鼻がむずむずしてしょうがないよ。

「それにしてもなー、こんな早くに起こされてもやることないや。開始までどうしよう」

呪文もうる覚えだし、魔法の練習でもしようかな。このままじゃ、

万が一にでも私が負けるというのもありえる。私は改めて握り締め
ている杖を見た。

私の身の丈よりちょっと小さいか程度の黒杖、先端には翠色の宝
石が嵌め込まれている。

「集中して、と。我は命ずる」

フツと瞑目した時、

「貴様から練習とは殊勝だな夜虹」

イヤークフを通してピースの声が聞こえる。いいところだったの
に、何だろう。私は制服のリボンをいじりながら、適当に答えるこ
とにした。

「はい。この紗華夢。いかなるゲームにおいても負けるわけにはい
きません。全てはピース様の為に」

「心にも無い事を。まあいい……そこでだ。ゲーム開始において、
少々困ったことが起きた。何故かは知らんが、この島に辿りついた
部外者どもが若干名現れたようだ。多少、自らの能力に気づいてい
る奴らもいるが、貴様ほどの魔女ならば容易いだろう。霊冥の餌代
わりだ。好きに喰え」

ふうん。餌、ねえ。

「ありがとうございます。若干名とは、おおよそ何人くらいでしょ
うか」

「おそらく十人程だ。それでは、デバックは頼んだぞ、私の可愛い
夜虹」

私は薄く笑った。ピース様ともあろうお方が、そんなにこの島に
侵入を許すって？

よく言うよ、ワザと連れて来たくせに。だけど、練習台が欲しか
ったのも事実。ここは素直にそいつらを駆逐しよう。

「クインシイが魂よ」

再び私の背中から羽根が生まれる。

「さあて、どこにいるのかな」

もしかしたら、既に学校に侵入しているのかもしれない。屋上か

から見下ろしてみる。

うーん、暗くてよく見えないなあ。月も翳ってるし。しょうがないなとばかりに私は再び瞑目を試みる。

火打石と火打金を打ち付けるように、目の奥でイメージをする。バチツと音がした瞬間、私は目を開けた。

まるで暗視鏡を覗いたかのように、辺りが薄緑色に照らし出される。

「……集束しても、あんまし見えないや。便利なんだか、不便なんだか」

校舎から飛び降りると、私は羽根をたたんで校庭を散策することにした。

がらんとした、お世辞にも広いとは言えない運動場に、おまけ程度に設置されている屋外プール。そして、すっかり老朽化してしまった校舎。

その寂れた姿に少しだけくすぐったくなって笑みを浮かべてしまった。

この世界は元居た世界にとてもよく似ていた。そんなはずはないことは誰よりも私が知っている。

「でも、ホントに私の学校そっくり」

それでも私の心を満たすほどの懐かしさがそこにあった。

もう慣れたはずなのに。ノスタルジーってこういうこと言うのかな。

「土管の中、はさすがに居ないよね」

どのくらい見て回ったのだろっ、ちよっと休憩するかなと埋められたタイヤに腰掛けたその時、

「おちびちゃん、こんなところで何してるのかなー？」

背後からとても下卑た声が聞こえた。こりゃまたピースも変なの招き入れたもんだね。

振り向くまでもない。私は肩をすくめ、

「貴方たちこそ、ここがどこだか分かってるんですか。ここは呼ば

れた人間しか踏み入ることの許されない島ですよ」

私は私らしく冷やかに述べた。

「あん？　俺らは、ちゃんとか招待されてきたんだぜ。超おもしろえゲームがあるからつてよ。なあ、おめえら！」

「ああ、ゲーセンで遊んでたら変な女に誘われたんだよ。つーかさ、もう入っちゃったもんはしょーがねえじゃん。楽しくやろうぜ」

一人じゃなさそう。三人くらいいるのかな。

「そうそう。まあ固いこと言っていないで、おちびちゃんも俺らと一緒に遊ぼうよ」

イライラするなあ。集束が私を苛立たせる。これじゃ紗華夢らしく出来ないよ。

私は立ち上がると、スカートに付着した砂を払いながら、

「ええいいですよ。でも、このゲームの遊び方、貴方達は知っていますか？」

振り向いた。六人。予想以上に多かった。それにしても、どこからこんなに沸いて来たのかな。この数に気づかないなんて、紗華夢夜虹失格だ。

「なんだこいつ。目ん玉、光ってねえか？」

「お、おい。んなことよりよ、すげー上玉じゃねえか、このガキ」

「でもよ、どうみたって中学生くらいだろ……さすがにヤバくね」

「いいじゃねえかよ。どうせゲームなんだし。なにしても問題ねーよ」

「だ、だよな！」

ゲラゲラと笑う。まったく、男の人ってどうしてこう。

「で、そろそろゲームを始めたいんですけど」

言うと同時に、一人の男の手が私の腰に回された。

「ゲームとかいいじゃん。もっと楽しいことしようぜ」

ああもう、色々端折ろつと。餌相手に一々説明するのもバカらしい。

「うふつ、そうですね。それじゃあ、ご要望どおり楽しいことしま

しょうか。さあ霊冥、ご飯の時間です！」

私は一つ笑うと、杖に魔力と呼ばれるものを注いだ。

「シロツキが魂よ。我に漠漠の焰を宿せ」

杖から巻き起こる業火。それは瞬く間に私に触れるソレを焼き払う。

「ぐああああ！ お、俺の、俺の手が！」

目の前の男が、下品な顔をさらに下品に歪める。手をもげたくらいで大の大人がみつともないよ。

「あら、貴方の言うお手々って、もしかしてこれのことですか？」
私の腰にそのままの形となって未だにこびり付いている炭を持ち上げ、

「うわ、くっさーい」

私は口の端を持ち上げた。

「ひ、ひいっ……」

あれれ。さっきまでの威勢はどうしたのかな。
そんな怯えた犬みたいな目でみないでよ、興奮しちゃうじゃん
集束がさらにギリギリと私の頭を締め付ける。

「さあ、このいかんともし難い魔力の差にひれ伏しなさい」

言うが早いか、途端に散り散りに逃げようとするそいつらに、

「あは。クロエが魂よ、我に疾風の刃を宿せっ！」

杖を一振りすると同時に巻き起こった力マイタチが次々と男達の首を飛ばす。つと、いけないいけない。一人だけ外しちゃった。

「あ、頭が…… あああ」

仲間達の首なし死体に呆けてしまったのか、生き残った男の人は腰砕けになってしまった。

私は羽を再び広げて、へたり込んでるそいつの前に跳躍した。

「なにか、言い残したことはありませんかあ？」

私の力マイタチを避けるなんて、余程あなたってば幸運。その幸運に免じて少しだけお話を聞いてあげるよ。

「た、助けてください！ 俺達、な、なにも知らなかったんです…

…」

涙でくしゃくしゃに命乞い、ね。本当、ゲームによくいるような人たちだね。でもさあ、悪いけど私もゲームによくいるような悪者なんだよね。

「あー、もういいや。それじゃあ、バイバイ」

霊冥の先端で男の目を抉る。ぐちゃりと小気味悪い音と感触に私は快感を覚えた。ぞくつと頭に電流が走る。これってクセになっちゃうんだよなあ。ちよつとだけ杖が汚れてしまうのが残念だけど何が起こったのか、分からずにいた男は二、三秒パクパクと口を開閉させた後、黄色い泡を吐いてくずおれた。

吐瀉物にまみれた男が死んだことを確認して、私はやれやれとばかりに集束を解いた。

「やつぱり、ちゃんとした被験者じゃないと脆いなあ……。こんなんじゃ餌にもならないよね、ねえ霊冥ちゃん」

呼応するかのように光る杖。そうでもないって？ あはは。それじゃ、もうみんな死んじやつたし、ご飯の時間にしようね。

「紗華夢 夜虹が命ずる。真の姿を解き放て、霊冥」

辺りに黒い霧が噴出し、瞬時に杖が造形を変える。やがて、巨大な蜘蛛となったその子の頭を撫でながらタイヤに腰掛ける。

「いい子いい子。六匹しかないけど、ちゃんと残さず食べるんだよ？」

つて、言ってももう食べ始めちゃってるし。

「霊冥つてばいつになつたらお行儀良くなるんだろ」

忙しそうに食べるその子に私はクスクスと笑った。

すると私の前に、いそいそと霊冥が寄ってきた。

「あれ、ご飯もういいの？」

頭をくいつと傾げた霊冥の口から目玉が転がる。さっきの男のだらう、まるまるとしたそれを拾うと私は霊冥の頭をもう一度撫でた。「私にくれるんだ。全部食べてもいいのに。あはは、ありがと」

「キュー」と鳴いた後、再び食事に勤しむその子を見ながら、私

は目玉を口の中へ放り込んだ。

ころころと転がすと甘酸っぱい味が口いっぱいに広がった。

さて、と満天の星空を見上げる。

「あと四人かぁ。つまんなそーだけど、ピースの命令だもんね。夜明けまでに潰しとかないと怒られるや」

そうばやいた後、私はぐいーっと伸びをした。

サイドストーリー 紗華夢 夜虹の場合 前編（後書き）

注：視点が明から夜虹へと移っていますが、

これはあくまでもサイドストーリーであり、読まなくても本編を読み進めることはまったくもって可能です。

すなわち、これは刻々が啼くまでのあいだに辿った夜虹の話であり、単なるヒサルキゲームの蛇足に過ぎません。もしかしたらこのお話にゲームのヒントがあるのかもしれませんが、ないのかもしれない。

そして、彼女のもつ装備品の数々、及び魔法については本編が進むにつれ明かされていきます。このサイドストーリーでは特別説明はしませんのであしからず。

サイドストーリー 紗華夢 夜虹の場合 後編

「うーん、まいったなあ」

次にどこを探そうか。迷った私は、とりあえず空を飛び、島全体を見て回っているのだけれど。

見渡せど見渡せど、普通の島人たちはっかり。

「それっぽい侵入者なんて見つからないなあ。本当にいるのかしら。もしかしたら、ピースの数え間違いだったりなんかして……」

なんて一人ごちていると、杖状態のまま霊冥が甲高い鳴き声をあげた。

「うん？ 霊冥ちゃん、どーしたの」

訊くと、頭の中に電光板が浮かんた。それは霊冥と言葉を交わせる唯一の手段だった。直接話せたら手っ取り早くていいのにね。しばらく目を閉じて待っていると、やがて闇の中に光輝する文字が浮かび上がった。

『姫様。海岸にて残りの侵入者達を発見しました』

「あっ」

そういえば街中だけしか見てなかったっけ。ぽんっと手を打った私は、さっそくとばかりに、南側に一箇所だけ存在する海岸に降り立った。

「ほんじゃま、片付けちゃいますか」

集束。瞬く間にナイトビジョンの世界が広がっていく。

「見つけたらどうやって殺そうかなあ」

確か、残り四人くらいだったよね。何の魔法で始末しよう。風はさっき使ったし、雷の魔法で感電死なんて見飽きた。炎もダメダメ。ただコゲ臭いだけだし、あれ。それなら水の魔法がいいかなあ。うーむ。溺死つてのもなんだかパツとしないかも

「わっぷー！」

ぽーっと、そんなことを考えていると、何かに蹴躓いて顔面から

砂に突っ込んでしまった。

「いったたたあ……ぺっ、ぺっ」

トホホ。今日はずっこけてばかりだ。よっこいせと起き上がり、口の中の砂を取り除こうとした瞬間、私はギョツとして集束を解いてしまった。

そこに転がっていたのは年端も行かない子ども達の惨死体だった。およそ三人程か。そう、それは『およそ』だった。何故ならみんなバラバラに切り刻まれているから。この私が驚くくらいだもん、かなり悲惨な状態。

ひき潰されたソーセージのような腸が散らばり、他にも赤黒い内臓の類がいっぱいばら撒かれてある。どれが誰の部位だか見当もつかないや。唯一、彼らの頭部だけはそのままの状態だからまだマシなのだろうけど。男の子一人に、女の子二人かな。ま、多分だけだね。

それにしても、どうしてこんなひどい殺され方を。それに、一体誰が侵入者を始末したのか。私以外にこんなことをするのは、いや、こんな殺し方を出来るのはピースくらいしかこの島には存在しないハズだけど。

でも、わざわざ私を出向かせておいて自分が殺すなんて、そんなのおかしいような……。

とりあえず音羽で訊いてみるしかない。

「ピース様。応答願います。ピース様？ もしもーしっ」

あれ。イヤーカフはうんともすんとも言わない。

まさか故障しちゃったのかな。あれやこれやと音羽をいじっていると、突如激しい地響きが起こった。

「わったった。こ、今度は何!？」

ともかく、震源を確認する為に羽を広げ、飛び上がったワケなんだけど、

「あれは、まさか霊獣 クロエ?」

ここから然程遠くない森林の中に、見覚えのある巨躯の虎が佇ん

でいた。周りには土煙が舞っている。

何故、こんなにも早く彼女が放たれているんだろう。

唖然とする私に気づいたのか、クロエは長い舌を出し、巨大な前足でちよいちよいと何かを指した。あそこに行けってことなのかな。もしかしたらそこに最後の侵入者がいるのかもしれない。

誘われるがままに、そこへ向かい、そして私は驚愕を味わうことになった。

「これはこれは。やや、お久しぶりですねえ、姫。相変わらずお美しい限りで」

透き通るような長く美しい銀髪に、爽やかな微笑。だけど、切れ長の碧眼は一つも笑っていない。

「……どうして君がもう動いてるの？ まだゲームの時間まで大分あるのに」

その如才の無い立ち振る舞い、いつもの張り付いたような笑顔。間違いない。霊獣シロツキだった。彼まで既に放たれているなんて、今回のゲームはどうなってるんだろう。

「おやおや。始まってないとしても？ そうですね、確かに『あちらのゲーム』は始まっていませんが、」

ふと、傍らに一瞥を送るシロツキ。

そこには一人の女性が横たわっていた。緑のブレザー姿に、短いツートールの女の子。こちらからでは顔は見えないけど、多分、私より年上。だってお胸大きいし。

「その人が最後の侵入者さん？」

含み笑いをしつつ、首を横に振られる。島人には見えないし。と、いうことは、

「お察しの通りです。ねえ……お嬢？」

彼が愉快そうに声を掛けると、

「まったく。寝たフリも楽じゃないわね」

やれやれと立ち上がり、首を鳴らしながらゆっくりと振り向く。

「久しぶりねえ、奏。いえ、こちらでは紗華夢 夜虹サンだったか

しら」

腕を組み、傲然と睥睨する彼女。白磁の肌に桃色の唇。女の私から見ても溜息が出ちゃうほどの美人。

「どうしたのよ。マヌケな顔して。あんた、『シャゲムヤコウ』なんでしょう。そんなんで、ちゃんとやれるのかしらね。フッフ」

ぞつとする笑みを浮かべる。

「え？ どうして、私の」

急にそれは起こった。今まで感じたことのない寒気と吐き気が私を襲う。

サブリミナルのように何かが連続して網膜に映り込む。私は無意識の中、それを拒絶するかのよう集束を開始していた。

「ケルヴ」

不意に口を突いて出た言葉を理解する間もなく、霊冥に全魔力を注ぐ。集束が加速し、そして目の前が一瞬のうちに紅く染まっていく。

「ケルヴ、ケルヴ！ 殺してやる、殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる！！」

視界が赤く歪み、断続する頭痛が私を襲った。

『ERROR。ERROR。姫様。D型集束は投薬無しの為、制御不可能。即座に解除を要請します』

霊冥からの警告だった。そんなの解ってる。でも、それでも、集束を断つワケにはいかない。何故か、この女が憎くて憎くてたまらない。身を割かれる程に。

だから、こいつを殺すまでの数分、その間だけでも。

「バグってんじゃないわよバカ猿。……来なさい、霊鳴」

瞬きと同時に、目の前の女も集束をしていく。蒼の煌きを放つ瞳に、空から飛来する霊冥のレプリカ 『霊鳴』

手のひらサイズのエメラルドグリーン。まるでフォールディングナイフを開刃するかのように、彼女はそれを振った。

霊鳴から翠炎が生まれ、やがて太刀状に姿をとどめる。慣れた手

付きで石を起動したケルヴは流れるような動きでそれを腰の位置に構えると、静かに口を結んだ。

そう、そうこなくっちゃ。それでこそ殺り甲斐があるってもの。

「贅となりなさい、バカなメス犬。……おねがい、霊冥」

私も彼女に続き、霊冥の造形を変えた。漆黒の稲妻を添えて、太刀状に変化した霊冥を後ろ手に構える。

この時私の脳裏には、ある疑問が浮かび上がっていた。何故、『あるゲームの物語』の時点で霊鳴及び集束を被験者が使えるのか？でも、その疑問も一瞬のこと。どうしても彼女を目の前にして冷静ではいらなかった。

温い風が私たちの髪を弄ぶ。この風が止む、その一瞬に

『そこまでだ、夜虹。それ以上、シナリオに背いた行動をするな』不快な機械声がした。コイツ、今頃になって。

「しかし、ピース様。今回のシナリオはまるで以前とは、」

私の質問を聞く前に、
『貴様に答える必要はない。ゲーム開始まで、おとなしく校舎で待機している』

にべもなく一蹴されてしまった。この紗華夢にも教えられない？なによそれ。言い返してやりたい。でも、我が御主であられるピース様に向かって反論など、断じて許されない。

バカバカしい？ 私だって最初の頃はそう思ってたよ。

でも、ダメなんだ。ピースの言うことは絶対。そうゼツタイ。

私は唇を噛み、集束を解除した。深紅の世界から淡緑の世界、そしてやっと普段の世界を取り戻す。

「了解しました。ピース様」

羽を広げ飛び立つ瞬間、彼女と目が合った。とつくに集束を解いた様子のケルヴ。

ケルヴ？ 当たり前のようにこの女をそう呼んでいたけど、それってなんなんだろう。

それにどうして、私はこんなにも彼女が憎いんだろう。

数秒後、彼女は限界だとばかり、

「ふふっ。なによ、そんなに見つめちゃって。ははーん、さては美人すぎるこの私に惚れたわね」

指でくるくると後ろ毛をもてあそびながら笑う。

「は、はあ？ 何を言ってるんですか」

意味不明な一言に私は思わず聞き返した。

「ごめんだけど、私にそんな趣味ないのよね。ちょっとだけキョーミないでもないけど。ま、お姉様〜って呼ぶくらいなら許したげてもいいわ」

な、な、なんて馴れ馴れしい人なの！？

傍らのシロツキも何が楽しいのかくつくつと笑ってるし。なんだから凄くバカにされている気分。

「ふざけないで。誰があなたなんか！ 次に、会ったら必ず霊冥の工サにしてあげます。覚悟しておくことですね」

「あつくやくう。無様な定型句もいいところね」

「くぬぬっ……」

ああもう、こんなバカ犬なんかに構ってられない。さっさと学校へ戻ろつと。

霊冥を杖状態に戻し、空へと舞い上がる。

彼女が（名前は知らないが）既にこの世界にテスターとして参加しているというのならば、他に二人居るはず。

ヒサルキゲームのルール上、被験者は三人組でなければ成立しないから。気になった私は、ケルヴに悟られないよう高度を上げて集束した。

『姫様。今日はもう集束をお止め下さい。それ以上はお体に障ります』

霊冥つてば、心配性というか、真面目さんというか。

「だいじょーぶだって、私を誰だと思ってるの」

なんて、実はちよつとだけキツかったり。いや、ちよつとじゃないかも。

不可抗力とはいえ、D型を使った後だからね。

しばらく森の中を透視していると、一人の男性を見つけた。乱れたブレザー姿の彼は、ぐーすかと気持ち良さそうに寝息を立ててる。「……なんであの人みたいな弱そーなのが選ばれたのかな」

あ、くしゃみした。

この被験者は、さっきの男達より手ごたえがなさそう。ありや魔法使うまでもないや。

「もう一人は、クロエとお話してる人かしら」

金髪の学生服。性別は、うーん。見分けつかない。二人とも何やら話し込んでいるみたいだけど。仮のゲーム設定とはいえ、使い魔と契約って戦闘シーンなのに。なんだかあの二人ってば緊張感ないなあ。

『夜虹。応答しろ』

び、びつくりしたあ。今度はなんだよう。

「はい、ピース様。どうなされましたか」

『最後の侵入者を発見した。即座に校舎へ戻り、彼女に会え』

校舎へ戻り、彼女を殺せ。ではなく、彼女に会え？

この時、微かにだけ嫌な予感がした。

「……仰せのままに」

私は返事をした後、もう一度ケルヴを探した。

樹に寄り掛かり、狸寝入りを決め込んでいる彼女に、何故か私は後ろ髪を引かれる思いでその場を立ち去った。

いくら紗華夢 夜虹であろうとも、暗闇は怖い。それも夜の学校だと尚更に。ひたひたと廊下を歩く自分の足音に、

「ひえっ、ひゃああ。だ、だだだ誰っ！？ って、私か」

と逐一びくびくしてしまう自分が情けない。霊冥を抱きしめながら歩を進めて行く。いつもなら、暗闇なんて集束のおかげで全然気

にしていなかったのに。

先の戦闘で無駄に多用した為、それにD型の副作用からか一階職員室前辺りでそれは切れてしまっていた。やはり集束が無いと不便だ。はやく保健室に戻りたいところだけど。

「その前に侵入者を探さなきゃ、だよな」

色んなところを見て回っても人っ子一人居ない。（いたらいたで怖い）

ピースとはあれからまた、ぶつつりと連絡が取れなくなったし。

「あーあ。もう歩き疲れたよ。お腹だつて空いちゃったし」

ちよつとだけ休憩して宿直室からチキンラーメンでも調達してこようかな。

「……ひつくひつく」

「ひえっ!？」

お、女の子のすすり泣く声が聞こえてきた。そつと聞き耳を立ててみる。その声は近くの女子トイレから聞こえてきた。それも闇にかき消されそうなか細い泣き声。

「そこに誰かいるの？」

極力怖がらせないように尋ねると、奥から小さな声が返ってきた。「ひつく。た、助けに来てくれたの？」

「うん。あー、う、うん。そうだよ、そんな感じ!」

侵入者でも、ピースから殺せつて命令ないし。会えつてことは、一応、助けに行けつてことなんだろう。お腹ぺこぺこだし、どうせなら殺しちゃいたいけど。

「うえーん、良かったよう! あたし、あたしっ」

ぺたぺたと走ってくる音が聞こえる。おトイレで裸足なんて汚いなー。とか考えていると、ぽふつとその子に抱きつかれた。

「よ、よしよーし。もう大丈夫だからねー」

柄にも無いことを言う自分に若干の鳥肌を立たせつつ、頭を撫でて……あれ、私と同じくらいの背？

目を凝らしてみるけど、暗すぎて見えない。ダメ元で集束を試み

るけど、オイルの切れたジッポよろしくまったくもって点灯する気配がない。

うーん、会えて言われて会ったはいいけど姿が見えないとね。すると、

『姫様。何も辺りを照らすだけならば、集束より炎の方が燃費が宜しいかと』

かーっと顔が瞬間に熱くなっていく。集束がなければ炎を出せばいいのよ。そんなアントワネット的な発想があるなんて！

「だ、だったらもっと早く言つてよっ」

『申し訳ありません。暗闇をとて楽しんでたご様子だったのでこ、この子つてば。焼却炉にくべてやろうかしら。』

「ぐすつ。誰と喋ってるの……？」

「あはは、なんでもないの。えーっと、ちょっと待って。今、明かり点けるから。シロツキが魂。我に漠漠の焰を宿せ、つと」

徐々に辺りが薄闇色に照らされていく。って、私の炎つては黒いからあんまり意味ないんだ。最初はかっこいいかと思っただけど、ちよつと使い辛いんだよねコレ。だからと言ってケルヴのような翠色の炎も気味悪いし。なんだかんだで普通が一番かも。

肩を落としていると、再び電光板が浮かび上がった。

『姫様。炎より羽の光の方が最適かと』

「あ、そう……」

もう怒る気力も魔力もないよ。ため息を吐きつつ羽を生み出し、

そして目の前の女の子を

「も、もしかして……奏ちゃん？ カナちゃんだよね？ ううん、絶対にそうだよあの時から全然変わってないもん」

嘘。どうして、どうして。どうしてあなたがこのゲームに。

「ほら、あたし。ずっと、ずーっと一緒に遊んでた、あたしだよ？」
あなたなんて知らない。知らない、知らない。私はあなたを知ってちゃいけないの！」

「急にいなくなっちゃって心配してたんだ。良かったあ、奏ちゃんにもう二度と会えないのかと思ってた」

やめて。お願いだから、その名前と呼ばないで。

「ねえ、どしたの？　もしかして本当に忘れちゃったのかな。あたしの名前はね」

やめて。お願いだから、それ以上は言わないで。

「サナ。相原サナだよっ！」

やめて。お願いだから、もう思い出させないで。

「ほへ？　カナちゃん？」

泣いていた。彼女をあやす方だったのに私が泣いてしまっていた。集束の使えない今、奔流となつて溢れ出していく記憶を止める術を私は知らなかった。

嗚咽を上げて座り込む私に彼女は、優しく囁いた。

「……もしかして、まだ『あの事』気にしてるのかな。もう、いいんだよ。みんな、カナちゃんのこと赦してくれるよきっと。だから、一緒に帰ろーよ」

「赦される資格なんてない。私はここに居るの。ここだけが私の居場所なの！　だから、だから私に優しくしないで！！」

「カ、カナちゃん……わわっ！」

その時、鈍い音と共に学校の時計台　『刻刻』が産声をあげた。心地良い子守唄のような鐘の音が私を優しく包んでいく。鳴り響く刻々の鐘に込み上げてくる笑い。唐突に目の前が赤く明滅し始める。

ああ　楽しい楽しいヒサルキゲームが始まる。

やっと啼いてくれた。これで私はこのおぞましい恐怖から救われる。

「な、なにその真つ赤な目。それに、さっきの変な音って……。ねえ、ここって一体どこなの？」

「……ここはね、ゼーんぶ、ゲームなんですよ」

そうここはゲームの世界。現世とはかけ離れた仮想世界。

あちらには存在するはずもない『魔法』

あちらには存在するはずもない『霊獣』

そして　。

あちらには存在するはずもない『親友』

「あなた、だあれ？」

紅く染まる瞳の向こうには、見知らぬ彼女が立っていた。小うさぎのように震えながら、困惑の表情で私を見つめている。

やだなあ、そんな目で見ないで下さいよ。残念ですけど、奏なんて子とはつくの昔にこの私が殺しちゃったんです。

「嘘だつ、カナちゃんだよ！　一番の仲良しだったカナちゃんのこ

とだもん。ゼツタイ忘れるはずないっ！」

なら、この紅い瞳はどう説明するんですか。暗闇の炎だって、呻きの杖だって、煌く羽だって。あなたのお友達はこんなにも醜い化け物だったんですか？

「どうしたんだようカナちゃん……。こんなのおかしいよ、なんかの間違いだもん。ぐすっ……ひっぐ」

あなたもすぐに気付きますよ。顔は似ていても別人。奏って子の皮をかぶっているだけ。そう、もう私は別人なんです。だって、

私は、私の名前は

The hisaruki game

特別サイドストーリー 紗華夢 夜虹の場合 完

束の間

「へっくし！」

……寒いな。

俺は空を仰ぎ、またかと盛大に溜息をついた。

いつぞやに見た雪景色。先ほどまでの世界とは真逆の世界。

簡単に言ってしまうえばあるゲームの物語冬バージョンといったところだ。

どうして俺はまた冬のゲーム世界を夢見ているのだろう。もしかするならば、この夢は俺に何かを示唆しているのではなからうかなーなんてな。夢は往々にして支離滅裂なものに決まってる。繋がりや意味なんざあるはずもない。夢にそんなもんを求めるなんて乙女チックな妄想は妹にでも譲るとするさ。

大方、セミのうるさい金切り声に飽き飽きした大脳皮質が無意識のうちに冬っぽいもんを求めてこんな夢を映しているんだろう。

それがたまたま、かぶつちまっただけさ。

そう貧困な夢のボキャブラリーに苦笑しながら、頭上の雪塊をせつせと払いのけていると、

「明くーんっ、そんなところでなに笑ってるのー？ こっちに来て一緒にアイス食べよう」

懐かしくもない間延び声が聞こえた。いやきつと空耳に違いない。「うー、また私のこと無視しようとしてるでしょ」

意外に鋭いな。

「おお、雪だるまが喋ったかと思えば。変わり身の術でも習得したのかね」

「変わり身の術なんて習得してないよう……」

ま、お前がいるような気はしていたけどな。

なんとなくだが、こちらの世界イコールお前といった図式が俺の中で出来上がりつつあるぜ。

それでは、現在位置でも確認しておくことにしよう。

周りは一面銀世界、他に何か無いのかと尋ねられたならば目の前の昔懐かしい駄菓子屋くらいしか見つからないと断言する。

古き良き時代の象徴として度々テレビなどで取り上げられる昭和の忘れ形見がそこに佇んでいた。

薄暗く安普請な様もどことなく安らぎをもたらせる。

そして、古びたアイスボックスの側に設置されているペンキの剥げ落ちたボロいベンチ。

そこにちょこんと座る少女。吐き出した息は白く、こちら側には温度設定が適用されていることを物語っていた。

中々に風流な構図だ。

「いーから、はひゃくはひゃく、あびばくんのアイス溶へひゃう」
両手には二本のアイス。その内の一本を咥えながら、もう一本を差し出す。

何故、こんな寒い中そんなもんを嬉々として頬張ってるのか理解に苦しむがそんなことよりも俺の興味は別のところに注がれていた。なに、このまま受け取らずに見守ったらこいつはどんな反応をするのかってな。

俺はしばしの間、忙しくアイスクャンディと格闘しているこの小動物の観察でもしてみることにした。

ええと、どれどれ。

むやみに長い黒髪をポニーテールといった形で結っており、これまたむやみにデカい目に、むやみにチビっちゃいといったまあとにかく、むやみやたらな少女だ。確か、名前はムヤミンだったかな。

「わっ、なんだか悪口言ってる。私の名前は奏だもん。そんな変な名前じゃないよ」

頬を膨らませるといった断固否定の仕草に、

「それなら俺だってアビバなんて変な名前じゃないぞ。大体、どこ
のパソコン教室だそれは」

「だ、だって、アイス食べながらだったし……」

俺はベンチに腰を落ち着け、そいつの空いている方のアイスをひったくってやった。

無言のままガリガリと食い始める俺に、

「それね明くんの大好きなソーダ味なんだよ」

そりゃまあ、見た目と味で分かるが。というかよく俺の好物を知ってたな。

「知ってた、じゃなくて覚えてるんだよ」

どっちでも大差ないだろ。俺は肩をすくめ、再びアイスを貪ることに徹した。

「それじゃあ問題です。私の好きな味はなんでしょーか」

子供かお前。って、そーいや子供だったな。一瞥すると、さっと後ろ手にアイスを隠し、

「見ちゃダメっ」

あまいな。一瞬でも見逃さなかったぜ。赤い色がチラつと見えた。つまり、いや待てよ。ここで易々と正解を言ってしまうのも無粋というものか。もう少しこいつで遊んでやるのも悪くない。

「バカにするな。俺だってお前の好物くらい知ってるぞ」

「え、ホント？」

春一番の桜満開的な笑顔を向けられつつ、俺は赤い食い物を想像した。やはり、アレしかないだろう。

「確か、オイキムチ味だったよな」

奏の小柄な肩がげんなりと落とされていく。

「ち、違うもん」

「じゃあ力クテキ味」

「もつと違うよう」

「なら、ねぎキムチ味」

「ふええ、そろそろキムチから離れてよー」

そいつの困った顔とお決まりの鳴き声に満足した俺は、

「冗談だ。イチゴ味だろ」

「え……」

奏の顔が曇り始める。当たり前だと喜ぶリアクションを待っていたつもりだったんだが。

「ねえ、明くん。私、やっぱり間違えちゃったみたい」

唐突として彼女は伏し目がちに呟いた。

心なしかトーンが下がっている。

「間違えたってなんのことだ」

半分まで食ったところで棒を見える。ハの字が見えた。

「ごめんね。ごめんねっ、明くん。今度は大丈夫だと思ったんだけど、ダメだったよ」

いや、何を謝ってるんだ。切羽詰ったような声になった俺は、もう一度そいつに視線を向け、

「ごめんなさい……。ひぐっ、ぐす」

彼女の大きな瞳からポロポロと大粒の涙が零れていた。

おい、ちよっとマジかよ。

まるで鈍器でフルスイングを決められたかのような衝撃が俺の頭に走った。

「急にどうしたんだ。もし冗談が過ぎたのなら謝る。すまん、よくわからんがとにかくすまなかった」

それでも彼女は泣き止まない。それどころか堰を切ったかのように泣いてしまっている。

待て待て。こんな展開きてないぞ。こういった時はどうしたらいいんだ。

慰めの言葉なんざ、人生の中で数回程しか吐いたことのない俺だ。中腰のまま空気椅子をしつつ、一時停止といったワケわからん姿勢のまま思考を巡らせるが　ダメだ。かけるべき言葉がマジで見つからん。

「わ、私が悪いの。明くんは悪くないの、ごめんなさいごめんなさい……」

声を震わせながらただひたすらに謝り続ける目の前の小さな少女。もう一度問う。一体何を謝ってる？

「ひつぐ、ヒ、ヒサルキが迫ってくるんだよ。私の中に入ってくるの……。止めようとしたんだけど、ダメなの。許してくれないの」

ヒサ、何だつて？

眉を顰め、そう尋ねようとした時、

「だからお願いです。私を殺して……。殺して、ください」

そいつはまっすぐに俺を見据えて、ハッキリそう言った。泣きながらも笑顔で。

奏は弱々しい笑みのままこう続けた。

「もう終わらせて」

その瞬間、世界が崩壊をはじめ。音もなく、周りの景色が白黒の結晶となり崩れ行く。

木々を始めとしてアイスボックスが消え、ベンチも消えて行き、そして悲痛な笑顔を向ける少女も。

「おい、待て！」

俺は空を掴んだ。

奏の居た場所には溶けかけの赤いアイスクャンディが落ち、やがてそれも結晶となって散っていく。

「なんだってんだ……」

あつちの世界もこつちの世界もまったくもって意味不明だ。
製作者が笑いを堪えながら鳥瞰している様が目に浮かぶぜ。なあ、
お前そこで見ているんだろ。

俺にヒントの一つや二つテロップ付きで頼むよ。
取説なしでここまでやってるんだぜ、少しはサービスしてくれた
っていいだろ。

そろそろクエスチョンマークの在庫も尽きる寸前だ。
だが、俺の儚い抗議も忘れてましたとばかりにちんたらやってき
た雪の修正液にかき消されてしまう。
砂のように削れていく自分の両手を呆然と眺めながら、俺はあ
いの最後の言葉を思い出していた。

「終わらせて、か」

奏　お前は俺に何を伝えたかったんだ？

「ぐあっ！」

飛び起き、瞬きを三回。また俺は気を失ってしまっていたのか。
一体、何度目だ。やたらに頭が重い。

ドライアイのように乾ききった目を擦りながら俺はヒポポタマス
も驚くような大きなあくびをかいだ。ねみい。

「おお」

なんだこのやけに弾力のある地面は。先ほどとは打って変わって
暖かい。久しぶりにまともな床につけた気がするぜ。

ん？

何か、肌寒い夢でも見ていた気がするが。記憶の糸を手繰り寄せ
ようと試みたところで、

「ぐあっ！」

俺はしばし硬化していた。台詞が重複してしまったことにすら気付かない程に啞然としてしまったワケは、言えばきつとすぐに納得してもらえること請け合いだ。

俺を中心とし、左隣には神塚ヒサキ、右隣には深柳リン。シンと静まった朝焼けの寝室に時折混ざる寝息の色。どちらとも共通しているのは寝巻き姿だということだ。

もうお分かりいただけただろう　そういうことだ。
って、どういふことだったこれは。

何故、一つのベッドに三人で寝ていやがる。狭苦しいぞ。

こうなった経緯が思い出せん。鐘の音が鳴り、そして深柳の目が赤くなつて、ええとそれから……。

「うーむ」

混乱しているのだろうか。記憶がぶっ飛んでいる。

とりあえず寝直してみるべきだと踏んだ俺は、やたらに軽い羽毛布団を掛けなおし、

「……眠れん」

それもそのはずだ。やけに甘ったるい香りが俺の鼻腔を突くわけだ。その正体は、と左を向いてみる。

神塚ヒサキだ。シナモンという可愛いキャラクターの柄といった到底似つかわしくないパジャマに身を包んだ女の子。

亜麻色の髪に眉目端麗な顔立ち。このゲームで最初の仲間となった奴だ。

焼き歪めることの翠の焰と言われるこめかみを抑えなくなるようなアブナイ能力を引っさげて、シロツキと激闘を繰り広げたり、寸でのところ深柳をナイフの山から救ったり……と、とにかくむちゃくちゃな奴だ。

きつと俺は当たり前のこととして、深柳でさえこいつには敵わないだろうな。

そんなヒサキの反則性能に知らずのうちに頼りたくなってしまいが、それも昨日までである。

座視しつつの戦闘実況兼解説役なんざシロにでも一任するとして、俺はまあ、使い捨てのシールド役として身を投げ出すとでもしよう。能力が使えないのなら、それくらいしか活躍の場は残されていないさそうだな。

剣はどうしたんだって？ そんなものあくまでオマケに過ぎないさ。

それにしても、なんだか新鮮だな。

ヒサキは普段見せないようなメロウな雰囲気を醸し出していた。

頬は薄ピンク色に染まっており、潤い艶やかな唇は見るもの全てを魅了してしまいそうだ。

なんだろう、改めて思ったがやっぱりこいつはマジで美人さんだ。猪突猛進な言動ばかりに目が行ってしまいが、寝姿だけなら天使さながらと言える。

見惚れていると、あることに気付いた。

「髪、解いてるのか？」

そういえば、俺はこいつのストレート姿を見た事なかったなと眼福ついでに、

「そっちの方が可愛いぞ」

ついだ、つい呟いてしまったのだ。諸君、まことに言い難いのだが、その非難するような目はやめてくれ。

いや汚らわしいものを見るような目で見られるのも困る。すまない。相手はあのヒサキだってことをすっかり忘れていたんだ。

きつとまだ寝ぼけているんだろう、そうさ人間うつかり口を滑らせてしまうことだってあるのだ。そうに違いはない。

って、誰に言い訳しているんだろうね俺は。

それより、まさか誰かにきかれていないだろうな。

起き上がり、獲物を探す鳶のような形相で見渡す。ヒサキの足もとでトグロを巻いているシロに、止まり木の上でこっくりと船を漕ぐラティア。

深柳は 相当疲れていたのだろうか微粒子ビーズの詰まった枕

を抱きしめながらムニャムニャと夢の世界へフライト中。そろそろ帰り支度でもしている所だろう。

やれやれ。

どうやら暗黒の歴史第一ページ目を飾るであろう魔の台詞を聞かれることは無かったようだ。そう安堵として胸を撫で下ろそうとした時、

「くっせーセリフだぜ」

遮光カーテンの隙間から漏れる朝日を後光のように受け止め、ニヤリと長つたらしいヒゲを前足で弄ぶは、不吉な都市伝説として有名な黒猫、その名もクロエである。

「……聞いたのか」

俺のワニ目に、

「聞いちまったぜえ。しかとな」

赤いネコ目が細められる。完全に抜かった。相原アキラが一生の不覚。

黒歴史を知られてしまった。本来ならば鍛え抜かれた土下座にて記憶の隠蔽を求むところだが、相手はまだよく知らん奴だ。ここは一つ、このネコの出方を見るところでしょう。

「取引をしよう。貴様の要求はなんだ」

そいつは猫特有の伸びをした後、俺の腕の中に大ジャンプで飛び込むと、

「そうだなあ、そんじゃ風呂に連れてってくれよ。全身ドロ臭くて気持ちわりーんだ」

なんだそんなことでいいのか。ならお安い御用だ。

「了解した。しばし待たれよ」

なるべくこいつらを起こさないようにと、未だに甘い香りを放散するベッドから這う這うの体で逃げ出し、

「こら。風邪ひくぞ」

とヒサキの足技によって無残にはねのけられてしまった布団を直

しながら 待てよと首を傾げた。

何か引つかかるような。抱きかかえた黒猫を見下ろす。そいつはふてぶてしく顔を洗いながら、

「早くするにやあ」

などとウソくさい鳴き声を発しやがる。

まあいいさ、ゆつくりと風呂にでも浸かりながらこの胸のモヤの正体を探るとしよう。

「おらおら、さっさとしねーと皆に言っちまうぜ」

俺は小さく舌を打った。

「口やかましい猫だなまったく」

実に腹立たしい食肉目小動物を抱きなおし、俺は静かにドアノブを捻った。

束の間 式

足を忍ばせ、部屋を出ると目の前に急な階段が見えた。どうやら俺達の寝ていた部屋は二階だったらしい。窮屈な階段をおりると、すぐに見覚えのある居間が現れる。

幅広い木目調のテーブルに、おまけ程度に敷かれている小豆色のせんべい座布団。

それらを確認し、俺はそのまま前進する。

「風呂、風呂つとな」

襖を開け、未だ薄暗い廊下を進みながら、

「ま、適当に向かえばそのうち着くだろ」

それにしても、外から見た造形は圧巻の一言であつたが、内装は割とそうでもないのがらしいというか。

今更だが、こんなフツの屋敷をアジトと呼ぶにはいささか違和感があるな。

「待て待て。どうなってるんだ……この屋敷は」

そのうち着くなどとのたまつた数分前の誰かさんよ。即座に前言撤回を要請するぜ。一体なんなんだ、この屋敷は。進めど進めどそれらしい部屋、いや扉一つさえ見当たらない。ゲームで言えば、延々と迷いの森をループしている気分だぞ。まさかマッピングして進めなどというんじゃないだろうな。

「おい、クロ。いったい風呂場はどこにあるんだ」

無駄にだだっ広い屋敷に辟易した俺は、腕の中でノンキにあくびをかいている猫を揺らした。

「慌てねーでも、このまま真っ直ぐ行けばすぐに着くさ」

興味無さそうにそれだけ言つと、暑苦しい毛皮は口を閉ざした。

それならいいけどさ。

鬱陶しい蜘蛛の巣と格闘しながら、ぐったりとした疲労感に襲われる両足にムチを打つ。きつとこんな状態で入る風呂は格別なんだろうな、などという俺の期待に反して、先はますます暗くなっていく一方だ。やれやれ。

急にとは言わないが、カビ独特の刺激臭が徐々に俺の鼻腔へと侵食し始める。換気が効いていないのか？

そう窓に目を向けると、

「なんだこりゃ」

無機質な鉄板が張られていた。どつかの常夏島と言わんばかりのこの世界観にそぐわない、冷たい仮面のモノリス。

日除け目的ならば、もっと他に適切なものがあっただろうに。例えば、日本人なら簾とかさ。

んな軽口を叩けたのも最初のうちだ。

この無限に続く廊下をどれだけ歩いたのだろう。進むにつれ、胸の中に得体の知れない不安感が募っていく。閉所に加え暗闇のコンボなんざ、さすがの俺でも胃にくるぜ。

「廊下でゲームオーバーなんて勘弁願うぞ、マジで」

やがて、床板の軋む不快音がお邪魔しますとばかりに俺の耳管奥底に腰を下ろし始めた頃、目の前によりやく一つの鉄扉が現れた。

「やっとか、」

言いかけて、俺は即座に口を噤んだ。いや、正確にはクロエによって塞がれた。

「まあ、慌てなさんなって」

いつの間に人間の姿へ戻ったのだろう虎娘は、俺の手を無理やりと引っ張り、

「ホレ。こっから覗いてみ」

扉の横脇に小さな窓があった。煤の付いた薄汚い窓の向こうに何かが動いている。

切れかかっているのだろうか、灯りは忙しく点滅を繰り返して

いた。オレンジ色の電球のせい、そこはまるで暗室さながらだ。言われるがまま、そのせせこましい部屋の奥へと目を凝らしてみると、

「誰かいるのか？」

ガラス製の机の前、パイプ椅子に一人の軍服姿の女性が座っていた。ハーファップにまとめられた髪に、手には古めかしい黒電話の受話器が握られている。

こちらに背を向けるような姿勢の彼女は、誰かと連絡を取っている様子だった。

「わかっています。ええ。既に霊鳴石一式サルベージ作業完了してあります。はい。三つ確かに。あの子達には、今夜にも説明と共に渡すつもりです。しかし、式式は前回の起動を最後に機能を失ったままですが」

石？ 何の話をしているんだ。

「……修復せずにあの子に？ それは、今回、福音を早めるに至った理由に関係あるのでしょうか。いえ、シナリオの改竄自体に口を挟むつもりはありません。ですが、所詮は紛い物の石とオリジナル。ただでさえ、不利な立場であるのに関わらず、このまま式も起動せずとなってしまうえば、抵抗する間もなく彼女に喰われてしまうこと必至です。私個人の見解で言えば、おそらく数時間も持たないでしょう。……もう我々には時間が残されていないのです。まさかとは思いますが、この期に及んで奇跡頼みですか？」

彼女が、手元のコーヒークップを口にし、首を傾げた瞬間、チラッと横顔が見えた。

おい、あの泣きばくろって。俺は目を擦り、そしてもう一度見据え、

「まさか。あれは、先生……？」

いや、本当に先生なのかどうかは定かではなかった。話し方や声、外されたメガネに髪形。出で立ちもそうだが、雰囲気そのものが柔和でおっとりしたあの人と似ても似つかないのだ。ならば、泣

きばくろだけで彼女を先生と判断するのは早計か？

「認めな。アレがおめえらのセンセイさ。とにかく……耳を澄ましてよく聞いてみるんだな」

傍らのショートカットが前髪を指で弾きながら、面白おかしそうに呟く。

「なるほど、それが今回の目的……ですか。トリガーをあの子に。不安ですが、我々にはもうその道しか残されていないのかもしれないかもれませんね。わかりました、こちらでも今までどおり全力を尽くします。はい。……それとも一つ。予定外のラティアの集束に、神塚ヒサキが僅かながら疑心を抱いています。決して侮らないでください。言うまでもなく彼女は特別です。もしも、彼女が計画の変更に気付くような真似があれば予定は大幅に遅れます。最悪の場合、全てのプランそのものが水泡に帰す恐れもあります。それならば、いつそのこと早い段階の内に――」

「伏せる！」

聞き入っていた俺の頭が怪力と共に突如押さえつけられた。

「ぐあっ！」

しこたま顎を打ちつけ、涙を浮かべながら見上げると、

「……」

絶句とは、このことを言うのか。

クロエの右手甲、そこに黒蛇の如き鎖が貫通していた。痛々しく開いた穴の周辺から、ポツポツと滲み出る血の玉に怖気を覚える。

しかし、彼女は痛がるでもなく廊下側の窓　穿かれた鉄板の向こうを睨め付けている。

何だ？

そいつの視線を追い、

「！？」

五センチにも満たないモノリスの穿孔の奥に突然『目玉』が現れた。

おぞましく真っ赤に輝くあの瞳。あの時の深柳とまったく同じ眼

だった。

何度見ても、決して見慣れるモノじゃない。

俺のノドが猛然と熱くなる。溜まった唾液を喉奥へと押し込もうとするが、中々飲み込むことが出来ない。

明滅する紅眼は、ギョロギョロと何かを探るように蠢めき、そして　にんまりと細められた。

違う。それは歪められたといったほうが正しかった。

「……あ、あ」

呆然としていた俺を尻目に、

「このやろっ、ルール違反じゃねえか！」

額に青筋を浮かべたクロエが鎖を引き抜き、怒声を上げる。次いで弓状に体を反らし、風刃を飛ばす姿勢を取ったその時、

「ルール違反はどちらかしらね。霊獣クロエ。そして相原アキラ君？」

冷やかな声と共に突きつけられる銃。それは先ほどの軍服姿の女性だった。

クロエは、向けられた銃に臆する事もなく、

「はて。ここに辿りついたのは偶然なもので、なんのことやら」

「相変わらず口の減らない子猫ちゃんね」

「そりゃどーも」

肩をすくめ、茶化すように呟いた後、再び黒猫へと化ける。俺の腕の中に飛び込んでくる際にそいつは小声で、

「くれぐれも、あの女を信用するな」

んなこと言われても。だが、と俺は彼女に視線を移す。

銃口を向けながら、冷然と見下ろす湖色の瞳。穴から差し込んだ僅かな陽の光で明らかとなった軍服は、クロエのそれととても良く似通っていた。……どちらかと言えばシロ寄りの造りか。

「あらあ。さすが、よく見ているのね。相原君。でも、ダメね。肝心なところは見えていない。いえ、見ようもしない」

奇妙な言い回しが引つかかるが、どうやら、目の前にいる彼女は

本当に『お竜先生』だったらいい。色々な疑問が頭を駆け巡る。ルール違反ってなんだ？ どうして先生が俺たちに銃を向ける？

しかし、反して俺の口から突いて出た言葉は、

「こんなところで何をしていたんです、先生」

「それはこっちのセリフよ、相原君」

まるでこちらの質問を予期していたような速さで返される。

「答えなさい」

険しい声。やはり、信じられないのが本音ではある。本当にこの人はあの先生なのか？

不意に、クロが爪を立てた。

「正直に答えな。ただ、オレ達は風呂場を探していただけだってな」
そいつの一言に俺は、ようやく先の目的を思い出した。そうだ、俺たちはただ単にひとつぶる浴びたいだけなのだ。別に疚しさなんか感じる必要はない。

「嘘ばっか」

そう吐き捨てるように答えたのは先生ではなく、背後、穿孔の奥からだった。

振り返るが、風穴の向こうには誰も居ない。まさか、あの赤眼の持ち主か？

「あらあらあ」

鷹揚な声に、再び先生へと視線を戻す。拳銃は仕舞われ、何処から取り出したのだろう、銀縁の眼鏡がかけられていた。

それをわざとらしく中指で押し上げながら、

「そういえば、昨日はアキラ君だけ入り損ねていたわねえ。ふふ、相当お疲れモードだったものね。そのじゃじゃ猫を捕まえるの、大変だったでしょう？」

急に手のひらを返したような喋りに当惑する。

「え、あ、はい　捕まえたっていうか、その、成り行きで一緒に……」

反応に困る。生じた疑義の数々をどう処理すればいいのか考えあ

ぐねていると、

「それじゃ、案内するわね」

「ど、どこにです？」と俺。

「あらあ、決まってるじゃない。お風呂場よん。この世界のお風呂はとつても広くて気持ちいいんだから。ヒサキちゃんもリン君も大満足してたわあ」

「あの、でも先生」

呼び止めようとした俺に、

「……いいから黙ってついて来なさい」

全てを拒絶するかのように呟かれる。

ふと思いついて抱かれた猫を見ると、彼女は先生を瞥見としながら、

「カミサマの意思に背く、か。こりゃまた随分とデカイ賭けに出たじゃねえか」

そう鼻で笑った。

束の間 参

程なくして、俺達は風呂場へと案内された。意外にも先ほどの暗室からそう遠くはなく、数分もせずに辿り着いたワケだが。

「すつげえ……」

つい声を漏らしてしまった。浴槽自体は無骨な石造りの小さなものだが、その眺望の素晴らしさと言ったら瞠目必至だ。

なんせ、見上げればまさに夏と言わんばかりの入道雲とコンビを組む紺碧の空に、続いて目の前に広がるは、燦々たる陽光と戯れるエメラルド海岸ときたもんだ。そりゃいくら鈍感なヤロウだって感動するさ。

今にも賛嘆として万歳などという陳腐な感情表現に出たいものだが、なんともはや困った事に黒猫を抱いている為そのような行動を取れない　と、思っていた矢先にそいつはするつと俺の腕から飛び出し、

「うっひょー！　一番風呂いただきだぜっ」

と風呂にダイブしやがった。

人がせつかく無い知恵絞って賛辞を呈しているというのに勝手なヤツだ。

「アキラも、んなところに突っ立ってねーで、とつと服脱いでこち来いって。めちゃんこ気持ちいいぜえ」

へいへい。露骨に溜息をついてやる。

「あらあらあ。とつても仲良しさんのね」

背後から先生のノンビリとした声を受けて俺は再度溜息をつく。

そう仰られましても。これのどこが仲良しなんですか。

「ふふっ。あの子猫ちゃんとアキラ君が合うか少し心配していたんだけど、どうやら私の杞憂だったようね。それじゃあ、着替えとタオルはそのロッカーに入っているから、ゆつくり疲れを癒していつてちょうだい」

ありがとうございます、そう言い掛け、

「貴方は何も聞いていなかった」

突如、先生の声色が変わった。怖気を感じ、振り向こうとしたが肩を掴まれ、その行動は阻止される。

「あなたは、なにも、きいていなかった」

グツと肩に力が入る。そっとやさしく置かれた先生の手から体温が伝わり、

「この意味わかるわね？ アキラ君」

耳元に柔らかな吐息がかかる。

「お互い忘れましょう。せつかくまだ楽しい時間が残されているんだもの……」

そう寂しそうに囁くと、フツと肩が軽くなった。

「先生……？」

振り返るが、既に先生の姿は消えていた。

もし、相応しい造語は何かと尋ねられたのならば、それは猫かきとでも答えるべきか。

黒猫はすいすいと器用に湯船を泳ぎ回り、俺はそいつのバタ足によって生じた水しぶきを顔面で受け止めつつ、一タタオルで拭うといった非生産的なサイクルを繰り返す。

ぐったりと疲れきった体を癒す暇もなければ先生の不可解な言動について思案する余裕もない。

水しぶきを浴びる度に増加してゆく我慢なりませんゲージがやつとこさ満タンまでたまったところで、

「ほれ。いい加減にしなさい」

遊泳に耽溺する黒猫の首根っこをつかまえる。

「あにすんだよっ！」

「お前なあ。風呂は泳ぐ場所じゃないぞ。それに、湯船に入ってい

いのはまず体を洗ってからだ」

俺の注意に、そいつは頬を膨らませながら、

「おめーは保育士さんかよ」

「そうさせているのは誰だ。いいか。離したら、即時洗い場へと直行しなさい」

「だあ、わーったから離せっ！」

まったく手のかかる猫だ。ぱつと手を離すと、そいつは宙返り一つに浮遊する。そして、闇色の霧がクロエを包み始め……って、待てよ。

そういえば、コイツの人型は

「ちょ、ちよつと待て！ 化けるな、」

だが俺の制止も虚しく、

「あん？」

クロエは人間の姿へと化けてしまった。諸君、もう一度だけ言うぞ。

人の姿へ化けてしまったのだ。先生より一回りも二回りもたわわに実ってしまったそれを目に焼き付けるでもなく、俺はただただ周章狼狽するのみといったワケで。

「バカ、お前なにやってんだ！ はやく猫に戻れって」

そいつは、えっへんポーズのまま眉間に皺を寄せ、

「なにつて、体洗えっつーから、化けたんじゃねーか。猫モードじや色々と手届かねえし。……っーか、あに慌ててんだ？」

俺もごくごく一般的な男だからな。そりゃ、慌てもするっつーの。この状況でノンキにしていられる野郎がいたら極度の遠視かその手の変態さんぐらいだろう。

「顔、すげえ赤いぜ。まさか、もうのぼせちまったのか？」

そう心配げに顔を寄せてきやがった。ぐおっ、頼むからそれ以上近づかないでくれ。

俺はソッコーというべきスピードで回れ右をする。

こいつには羞恥心のカケラもないのか。まさか、純粋な男子高生

をからかって遊んでるわけじゃないだろうな。

「けっ。わけわかんねーやつ。これちょっと借りとくぜ」

クロエは心底不思議だとばかりのトーンで、俺の頭上のタオルを
かつさらって行った。

ばしゃばしゃと風呂から上がっていく水音を聞きつつ、

「勘弁してくれ……」

風呂との相乗効果からか、どっと汗が噴出した俺は湯船へと潜り、
顔をガシガシと力任せに洗う。

きつと、今の俺の耳は茹で上げたばかりのミズダコのように真っ
赤に染まってしまっていることだろう。

それにしても、と俺は思う。

あの使い魔だかが人間の姿に化けることはもはや自明の理だが、
よくもまあ、ああも簡単に姿を変えられるもんだ。どういった構造
になっているのか気になったりもしたが、結局はゲームだからなん
でもありか。だったら考えるだけ無駄さ。といったいつもの極論に
達する。

ふむ。もしも、俺も何か動物に化けられるとしたならば、何が
いのだろう。シロやクロのようなネコモクもそれはそれで悪くはな
いのだが、ここはやはりラティアのような鳥類がベターと言える。
飛べると何かと便利だからな。って、そっぴやシロツキも浮遊して
いたな。

などと、くだらないことを水中で腕を組みつつ考えていると、あ
ることに気がついた。

はて。この温泉、こんなに熱かったっけか？ 割とぬるめだった
覚えが

「が、がぼっ!？」

急速に水温が上昇していき、おそらく摂氏四十度後半はマークし
たであろう辺りに、俺は息も絶え絶えに水面から頭を出す。

「げぼっ、げぼ」

すぐさま温度は元のぬるま湯へと戻っていったが。アレはなんだ

「ったんだ？ 熱湯風呂さながらだったぞ。」

すると、頭上から笑い声が聞こえてきた。

「あははっ。アキラってば変な顔しちゃって、おっかしい」

「どうやって登ったのか、石垣の上からひよっこりと顔を出しているのは、言うまでもない。神塚ヒサキだ。」

「そいつは少々残念なことに、いつもの髪型に戻ってしまっていた。白いリボンで後ろ髪を二つにくくるといったあの髪型だ。通称ツースイドアップってやつだな。」

「何故そんなもんを知っているのかって？」

「なに、簡単な話だ。サナがまだ小さい頃、あの髪型にしてくれて頼まれては何度も俺が結ってあげていたからな。最近ではなんとか自分で結えるようになったらしい。さすがは小七になっただけはあるぜ。なんて言ったら蹴られたっけか。」

ヒサキは悪巧みを見事達成したわんぱく園児みたいな笑顔で、

「どう？ あたしの炎は。少しは、お湯加減丁度良くなったんじゃないの？」

「やっぱりお前の仕業だったか。」

「どうもこうもないぜ。ありやいくらなんでも熱すぎるって。マジでゆでダコになる寸前だったぞ」

「そいつはニヤリと、悪代官も真つ青な笑みを浮かべた。」

「いいじゃん。ぬっるーい温泉なんだし、こんくらい熱いほうが気持ちいいわよ」

「そうフツと息を吐く。同時に口から勢い良く火の粉が舞ったところまで、」

「言っとくがな、俺は風呂に入る時はいつもぬるめの湯で半身浴って決めてんだ」

「あんたねえ、二十代半ばのOLじゃないんだからさ……」

「お前こそ、あんな熱い風呂が気持ちいいなんぞ、お年寄りもいいところだぜ。それと、今お前がやってることは立派なノゾキだ」

「胸を隠し、くねくねと言ってる。いやんな感じだぜってな。」

「……ちょーつち、待つてなさい」

ヒサキは顔面に特上のスマイル仮面を張り付けながら引っ込んだかと思うと、

「バカっ！」

綺麗に弧を描いて飛んできた石罅がスクーンと俺の頭に当たる。

ナイスコントロール。

十分後、髪を洗い終えた俺は、石垣を背にゆったりと温泉を満喫していた。

ちなみにクロは俺の頭の上で気持ち良さそうに日光浴中だ。人型のまま日光浴をしたいなどとワガママを言われたりもしたが、それはもう丁重にお断りさせて頂いた。

出された代案として何故か俺の頭上占拠との申し出があつたため、それならばと快諾したまではいいが　いかんせんこいつは蒸れるな。むず痒い。

「ねえ。アキラ、そこにいる？」

背後、石垣の向こうからヒサキの声がした。

「んー？」

「ひ、暇だし、ちょっと話でもしよっかなって……」

「ああ。それは全然構わないが」

ヒサキらしからぬ、しおらしい声色に少し調子が狂う。

「あの、さ。このゲームってなんだかおかしいと思わない？」

また漠然とした質問だな。

「おかしいって？」

俺がそう訊きかえすと、

「だってさ、説明書にはこんな事になるって書いてなかったもん」
その説明書ってやつを俺は渡されていないんだ。どこが違うのか説明してくれ。

「そうだったわね。……説明書だと、『能力を貰ったらあとは普通に町の周りのモンスターを狩っていく、王道RPGです』みたいなことが書かれていたの。ほら、最初に会ったときアキラに塔の最上階にいるボスを倒して、みたいな説明したでしょ？ ホントそのまま、それだけよ」

そういえば、試験的なゲームとか、賞金がもらえんとか言っていたな。すっかり忘れちゃっていたが。

「でしょ。それが、いきなり変な鐘の音が聞こえてくるわ、リンもおかしくなっちゃうわで、もう全然ワケわかんない」

確かに、言われてみると王道とはかけ離れてしまっているような気がしないでもない。

って、待て。

まるで、最初から刻刻を知らなかったような口ぶりじゃないか。

少し引つかかった俺は、

「刻刻って深柳が言っていたやつだよな。あれって説明書にないのか？」

一つ尋ねてみることにした。

「あんなの書いてなかったわよ。あのうるさい刻刻だからって、なにが意味でもあるのかしら」

……何故だ。

俺の記憶が確かならば、深柳の前にヒサキが最初にアレを刻刻と呼称したハズだ。

そこで俺は、ああ説明書に載っているからこいつは刻刻、及び集束とやらのヘンテコな造語を知っているのかと踏んだわけだが。

どうして、知りませんでしたみたいな言い方をするんだよ。

そこまで考え、先ほどの先生の会話が頭をよぎる。

『予定外のラティアの集束にヒサキが疑心を抱いている』

『ヒサキが計画の改竄に気付いたら問題だ』

『彼女は特別である』

予定外やら計画がどうのなどまったくもって意味不明だが、これ

だけは言える。

ヒサキはこのゲームの何かを知っているんじゃないか？　そして、何故それをそれと俺達に言わないのだ。

言いたくない理由でもあるのか。それとも単なる俺の考えすぎか。

「アキラ、ちゃんときいてる？」

「あ、ああ。わりい」

俺の生返事に、「リン、大丈夫かしら」とヒサキは話を続けた。

「あの薄気味悪い赤い眼のことか？」

「それもあるけど、不安定っていうかさ。あの後、急に苦しみ出したのよ。……あれは何かに取り憑かれたみたいだったわ」

「取り憑かれたって？」

「よくわかんないけど、なにか独り言みたいにブツブツ呟いていたの。それもリンとは思えないような声で」

そいつはどう考えても、大丈夫かしらなどと悠長なことを言ってもらえん状態にあると思うのだが。

ヒサキはそうねと少し笑ったあと、

「でも、平気。だって、リンはあたしが護るから。そう。あたしが護ってあげなくちゃダメだから……」

それはまるで自分自身に言い聞かせるかのようにだった。

一拍置いて、更に続ける。

「だから、だから」

彼女は何故かわずかながらに声を震わせて、

「あんたは自分で自分の身を……護りなさいよね」

束の間 四

風呂から上がり居間に戻ると、先生が料理を用意して待っていた。先ほどの軍服姿ではなく、出逢った直後と同様の着物美人スタイルに戻った彼女は、頬に手を当て、

「あらあ、ヒサキちゃんは一緒じゃないの？」

物腰柔らかな口調が今ではどこか空空しく聞こえる。

「え、ええ……。先に上がったハズですが。まだ来てないんですか？」

「そうなのよねえ。お散歩でもしているのかしら。しょうがないわ、先にあなた達だけで朝ご飯食べちゃいましょう」

あなた達って、こいつのことか。未だ頭上占拠中の使い魔を見上げると、

「ばーろおい、オレは少食主義なの。それに毒盛られたりしちやあ、かなわねえからな。わりいけどオレもちよくら散歩してくるぜ。風呂入った後は体動かさねーと」

けけつと笑いながら降りると、そいつはしなやかな尻尾をくねらせながら部屋を後にした。

「げ、元気な子猫ちゃんねえ。ホホホ」

ピクツと先生の額に青筋が浮かんだように見えたのは、多分気のせいじゃないだろう。

「……アキラ、おはよう」

クロエと入れ替わりに寝ぼけ眼の金髪少年が入ってきたわけだが。なんだその珍妙なマントは。というより、大きさから言えば外套と呼んだほうが正しいのか。

俺の眉が寄ったのを見てとったのか、

「ああ、これか。先生が羽織るようになってくれたんだ。に、似合うか？」

くるんと一回転、小柄な深柳をすっぽりと包む白いそれを翻し、

照れくさそうに頬をかく。

「似合う似合わないで言ったら、それはもうどこぞの科学忍者ばりに似合うが。それより深柳、お前大丈夫なのかよ？」

新しい装備を手に入れたなどと喜んでいる場合じゃないだろ。意外に元気そうでなによりではあるけどさ。

「……」

俺の疑問に三点リーダーが答える。長い睫毛を伏せ、俯く金髪。

僅かな沈黙の後、先生が俺たちの肩を軽く叩き、

「ほらほらあ、冷めちゃうと美味しくなくなるわ。お話は後よん」
その言葉に俺たちの腹の虫が仲良く鳴き声をあげた。

カチャカチャと食器の触れる音だけが聞こえる。

まいったな。先の奇妙な集束について話すタイミングを完全に見失った。

こんな時に限って橋渡し役である先生は、「あらあらまあまあ、大変。洗濯物をしまい忘れたわ」とおおげさにも慌ただしく出て行ってしまっている。

さて、どうしよう。何か話題はないか。

焦燥感に駆られた俺は苦肉の策に出ることにする。名付けて休日
の親父作戦だ。

「深柳、学校は楽しいか」

「……」

「勉強は辛いかな」

「……」

「そつだ、醤油とつてくれないか」

「ほら」

「だんだん若い頃の母さんに似てきたな。目元なんてソックリだぞ」
「……」

「おつとすまん、ソースも頼む」
「ん」

受け取った醤油とソースを睨みつつ、とりあえずから揚げにドボドボとかけた俺は、

「しょっぱいぞ深柳い」

頬張りながら訴えかける事にした。

「……何がしたい」

俺だつてわからん。

「ふふっ」

薄く微笑んだ深柳は、丁寧に割った小さなハンバーグのかけらをひょいっと口に運びながら、

「そついえばヒサキは？」

「さあな。先に部屋に戻るって言つてただけだな」

「そうか」

箸を置き、金髪は俺の顔を真正面から見据えた。

「少し話がしたい。おかしいと笑われるかもしれないが、でも真剣に聞いて欲しい」

安心しろ。大抵のことには驚かない自信があるぞ。

「あの日の夜、刻刻の鐘が鳴った瞬間。覚えてる？」

「ああ。お前の眼が赤く光っていたっけな。そりゃもう気味が悪い程に」

「……言ってくれる」

深柳はマントの裾を強く握りしめながら、視線を彷徨わせた後、

「あの瞬間、比喻などではなく目の前が赤く染まったんだ。見る景色全てが真っ赤に、ね。何が起きたのかわからずに混乱しているといきなりオルゴールの音が聞こえてきた。それは不協和音のようで、どこか聴き覚えのある、懐かしいメロディだった」

俺は静かに麦茶を飲んだ。

「その旋律を聴くうちに、何かが自分の中で広がっていく感じがしたんだ。上手く言葉では言い表せないが、どす黒い塊のような、と

ても禍々しい闇のようなそんな得体の知れない何かが僕を包み込んでいった。けど不思議とイヤな気分はしなかった。そしてその旋律が終盤を迎えた頃、ある一人の女性が僕の頭の中に現れたんだ。僕はその人を無意識の内にヒサルキ様と呼んでいた」

ヒサルキ？　なんだそりや。初めてきいたぞ。

「僕もだ。今思えば、どうしてその名が浮かんだのか不思議でならない。でもあの瞬間はただただ彼女の恵みの言葉に耳を傾けていた」恵みの言葉ときたか。

「具体的にそのヒサルキ様とやらはなんて言っていたんだ？」

ぐいっと水を呷った深柳は顔を曇らせ、

「それが何も覚えていないんだ。彼女と何を話していたのか、それとその間に僕が何を言ったのか。気付いた時には既にヒサキに押さえつけられていた……」

ヒサキは深柳が何者かに取り憑かれていたと言っていたな。

ならば、あの時のお前の発言はそのヒサルキ様が言わせたとしても？

「恐らくは」

なんだそりや。

俺は指をこめかみに当てながら、

「で、それを聞いてどうリアクションを取ればいい」

「十分だよ。ただ聞いてもらえればそれでよかったから。……アキラ、ごめん」

頭を下げた少年は、申し訳なさそうに続けた。

「覚えてないとはいえ、暴れた際に君達を傷つけてしまったかもしれない」

「自慢じゃないが、そんな時にゃ絶賛気絶中だったぞ。何度目かは忘れちゃったがな」

俺は食べ終えた食器を重ねながら、

「だから別に俺は大丈夫だけどさ。大変だったのはヒサキの奴だと思っぜ。お前を食い止めたのはあいつだし」

「ヒサキ、か」

そう憂いを込めた呟きに、俺は片付ける手を止めた。

「どうした？」

「その……彼女、泣いていたんだ。らしくもなく」

「なっ！」

大抵のことには驚かないと先程高らかに宣言した俺だったが、いやはやだつてあの勝ち気娘がだぜ。想像つかん。

怒ってるツラや火を噴いてる姿なら容易に思い浮かぶんだが。

「そ、そんなに驚いたら失礼だよ」

深柳は困ったように笑った後、ふと真顔になった。

「彼女、暴れる僕を押さえながら、ずっと謝っていたんだ。ごめんねごめんねって何度も。そんなヒサキの涙声を聞いているうちに徐々に集束が静まっていった……」

「どういうこつた。なんでヒサキが謝る？」

金髪は解らないと首を振った。

「なにもかも解らない。意味不明だよ、このゲーム」

「だが、あの眼のお前、色々と知ってそうだったぜ。刻々つつ造語やら、このゲームの正体、」

そこまで言いかけ、俺はあることを思い出した。そういえば、あのゲームの物語ではなくこれは『ヒサルキゲーム』だとか言っていたか。

「ヒサルキ、ゲーム……そう僕が言ったのか？」

「ああ、うる覚えだが。確か、鐘の鳴った夜明けに本当のゲームが始まるとも言っていたな」

「そんなもの説明書に書いていなかったが……」

と口元に手を当て、なにやら真剣な表情で考え込み始める。

あまりにぶつとんだ話すぎる為か、イマイチ緊迫感に欠いた俺は茶を飲むフリをしつつ、そいつの思案する横顔を盗み見ることにした。

深柳リン。ヒサキに次いで仲間となった華奢で小柄な少年だ。眉目清秀な白面顔にさらさらのブロンド、そして切れ長の黒曜眼。

一見少女と見紛うような、といったよくある一文はこいつみたい
なヤツを指して言うのだろう。

確か、こいつの能力は、のたうち狂うことの血の植物といったつ
けか。不気味極まりない名称だ。

名も然る事ながら、能力自体もオカルトチックだったな。なんせ
腕の傷口からワラワラと無数の触手が生えてくるんだぞ？ 思い出
しただけでもゾツとするぜ。

しかし見れば見るほど綺麗な顔してやがる。本当に男かこいつ。
うーむと唸りつつ熟視していると、深柳の頬がほんのりと赤く染
まった。

「……どうでもいいけど、さっきから声が漏れてる」
ジト目で睨みつけられた。

「こりゃまた失敬」

と両手を小さく上げ、肩をすくめた俺に、

「言っておくが、僕にそんな趣味はないからな。汚らしい」

ぷいっとそっぽを向きやがった。俺だってねーよ。

「あーら、それはどうかしらねえ。わかったもんじゃないわよ、リ
ン」

いやに清涼感たつぷりの笑顔をしたヒサキが入り口に寄り掛かる
ようにして立っていた。

「お前なあ、どこ行つてたんだよ」

ヒサキは敷かれた座布団にとすんと腰を降ろして、

「散歩よ散歩。はあ、お腹空いちやった」

「ヒサキの分、とつくに冷めてる。先生に言つて暖めなおしてもら
えば？」と深柳。

「ふっふー。心配には及ばないわ」

そう言つと、ざっくりめに割ったハンバーグのかけらに息を吹き
かけた。

見る見る間に湯気が上がっていく様を見ながら、なるほどって思
ったね。

「まったく便利な能力だね」

深柳がやや呆れた口調で言う。

「でっしょー」

程なくしてペロリと平らげたヒサキは、

「じゃっじゃーん。これなーんだ」

ブレザーのポケットから得意げに取り出したのは三枚の古びた紙切れだった。

「なに、これ」

受け取った深柳が首を傾げる。続いて配られた俺もそれに倣う。

「ゲームセンターのチケットよ。商店街沿いに新しくオープンしたんですって。さっきお散歩してたらこれを貰ったの」

誰にだよ。

ヒサキはふふんと髪をかきあげながら、

「ジョギング中のおじいちゃんよ。なんか、私が死んだ奥さんに似ていたんですって。ありがたやありがたやって言ってくれたわ。たくさん拝まれちゃった」

そりゃ、なんというべきか。ツツコミ所に困るな。

「どうしておじいさんがゲームセンターのチケットなんかを？」

訝しむように訊く深柳に、

「さあね。新聞の折込にでも入ってたんじゃないの。てーか、そんなことどうでもいいの！ ほら、行くわよ」

行くってどこに？

「ゲームセンター」

誰と？

「みんなで決まってるじゃん。行かなきゃそんそん！」

ヒサキの極上の笑みが振りまかれる。グロスフスMG42よろしく乱射されるキラキラ星を手で払いのけつつ、俺は深柳と顔を見合わせた。

なにが悲しくてゲーム世界に来てまでゲーセンに足を運ばなければならんだ。資金稼ぎのミニゲームを兼ねてというのならば話は

別だが。

どうせならこのゲームのストーリーをちゃっちゃんか進めちまおうぜ。

そう進言しようと口を開きかけたとき、

「僕はパスさせてもらう。行くなら二人で楽しんできてくれ」

から揚げに醤油とソースをちょびつとずつ交互に垂らしながら深柳がサラリと断った。

「ええー！ つれないわね、どうしよう」

憤懣やる方ないといったふくれっ面のヒサキに、

「すまないが、どうしても気になることがあるんだ」

最後のそれを口に放り込むと、

「……しよっぱいな」

ふと、どこかうら悲しい微笑を浮かべた。

束の間 伍

夕暮れに差し掛かる頃、俺とヒサキは斜陽に照らされたゲームセンターの前に無言で立ち尽くしていた。

お互い喋る気力もないといったオーラを飛ばしあっている。さて。どこまで遡ろうか。

確か小高い丘に建つ我らがアジトを意気揚々と出発した時点では、まだお天道様の慈愛に満ちた日差しが俺たちを暑苦しい程に向かえていたハズだ。

だが、閑静な住宅街を抜け終えた辺り、正確には商店街の中程だったか。

急に立ち止まったヒサキから衝撃的な発言が飛び出した。

「あんれえ？ おつかしいわねえ。この道、何度目かしら」

聞いた瞬間の俺の暗澹たる気分といったらそりやあもう。腰に鉛がぶら下がったかのような疲労感に襲われたもののさ。

結局のところ、どこに建っていたのか。

なんてことはない。いつぞや、俺たちがカレーの材料を買い込んだデパートのすぐ裏手側にそれはあったのだ。そりや立ち尽くしたくもなる。

やれやれ、と俺は寂寥の橙に照らされたゲーセンの看板を見上げ、「ヒサキ。お前、時計持つてないか？」

あれから何時間が経過したのだろう。

家の迷路も含め、なんだか今日は一週間分は歩いた気がするぞ。

「な、なによ。言いたいことあるんならハッキリ言いなさいよね……」

発言自体は普段の勝ち気娘だが、その背中はずっかりしよげきっている。イヤミの一つでも言ってやろうかと思っていたが、そんな姿を見せられてしまっただけは何も言えん。

先客としてこの島に足を踏み入れていたこいつならばと、ナビ役

を任せたのだが。まさか、ここまで致命的な方向音痴だったとはな。少し意外である。

だったら代われれば良かったんじゃないのかって？ あいにくだが地図が記載されているのはヒサキのチケットだけであり、それを奪取しようとして試みたところに繰り出された後ろ蹴りによって、即座に涼やかなる諦念お兄さんへとチェンジだ。

こいつがなにをムキになってるのかは知らんが、触らぬ神塚になんとやらってやつさ。

ヒサキは手に持ったチケットの裏をむくれ面で眺め、

「大体さー。この地図が大雑把すぎるのよ。目印らしい目印はないわ、字も小さくて汚いわだし。こんな不親切な地図だもん、迷うのだって当たり前じゃない！」

今にも火を噴出しかねん勢いで捲し立てる。

「いまさら言ってどうなる。無事着いたんだから良しとしようぜ。

ほれほれ、行くならとっとと行く。入らないならもう帰るぞ」

そいつのおさげをクイツと一つ引っ張ってやる。

「入るに決まってるじゃん。バーカ！」

俺の手を払いのけ、ドカドカと入店するヒサキ。

悄然といった様子は何処へやら。中に入った彼女は楽しそうに店内を見て回っている。

なかなかどうして。あの怪獣娘の扱いにも慣れてきたもんだと腕を組みながらしんみり頷いていると、ヒサキがガラス越しにジェスチャーを始めた。

なになに。私はここで遊んでいくからあんたはもう帰っていいわよ、か。

ほほう。そりやありがたい。すぐさまオーケーサインを出し、鼻歌交じりに回れ右を決め込んだ俺に、

「さっさとあんたも、」

怒涛の勢いとはばかりに走ってきたヒサキに、

「来なさいってえ事よっ！」

ガシツと襟首を掴まれた。

入り口すぐに立っていた、やけにガタイの良い店員にチケットを渡し、俺たちはようやく店内に足を踏み入れることになったのだが、「だーれも居ないじゃん。まるで貸切みたいね。ラッキー！」そんなヒサキの喜びように、

「ラッキーだかクッキーだか知らんが、経営的に大丈夫なのかここは」

狭小な店内は薄暗く、耳を澄ませば閑古鳥のさえずりなどが聞こえてきそうな雰囲気だ。申し訳程度に設置されている筐体機から聞こえてくるゲーム音もいささか控えめである。時折、沈殿した冷気が寝返りをうつかのように俺の足首を撫でやがる。こそばゆいな。

「Dランク……いや、Eランクといったところか」

いくらオープンしたとはいえ、これはどうかと思っぜ。見渡してみると、マジで俺らしいねえ。

「ふむ。ビデオゲーム筐体が少しに、後はUFOキャッチャーのみか。せめてレースゲームくらいあれば良かったのだが。やはりFランクに格下げだな」

そう値踏みする俺の横で、

「それだけあれば十分遊べるじゃん。はい、コレ！」

すつかり、いつものご機嫌さんに戻ったヒサキからコインケースを押し付けられた。

「なんだこれ」

透明なライトグリーンの奥に数枚の硬貨が入っている。百円玉か？「あんたのお小遣いよ。無駄使いしたら燃やすから」

ゲーセンで無駄使いするなどは、ラーメン屋で座禅組んでろと言ってるようなもんだろ。

「じゃあ、そのマットで座禅組んでなさいよ」

「……大切にに使わせてもらいます」

素直でよろしいっ、と腰に両手を当てるヒサキの笑顔を見ながら、俺はいつか観たワンコインサラリーマンなる特集を思い出していた。
「どいた、どいたっ」

そいつは哀愁漂わす俺の背中を乱暴に押しのけ、

「さーて、なにをやるうかしらねーっ。あ、これなんていいわね」
ある筐体機の前に腰を下ろした。どれどれと覗き込む。

「お前、格闘ゲームなんてやるのか？」

「そ。意外でしょ」

まったくもってイメージ通りだけだな。

「ふふん。このシリーズはかなりやり込んでいるのよね。これは大分前の旧作だけど、いまだにコンボ覚えてるもん」

ヒサキの頭頂部を見下ろしながら、

「へえ……。そりゃあ、すごいな」

俺の凄まじい興味のなさっぷりがバレたのか、（これでもかなり頑張った方だぞ）

ヒサキは振り向くとにんまり気味にこう言った。

「ちよつとアキラ。あつちの台に行つて、あたしに乱入しなさい」
乱入？

「対戦するってこと」

「む。それくらい知っているが、俺はこのゲームやったことないぜ」
「だからよ。ボコボコにしてあげるって言ってるのっ！」

何てことを言いやがる。近くに初心者イジメ反対と書かれたプラカードでも落ちていないものかね。探すフリでもしようかと首をひん曲げた俺の視界にあるモノが映った。

「あら？」とヒサキも気付いた様子で小さな声をあげる。

俺たちの後方、一メートルにも満たない距離にいつの間にか一人の少女が立っていたのだ。

白いワンピースにビーチサンダルといった前時代的な夏の出で立ちに、麦わら帽子を目深にかぶっている。

「君、一人？」

ヒサキの問いに、コクンと首肯。

「もしかして、パパやママとはぐれたのか？」

長い髪を舞わせながら首を振る。否定の動作だ。

「なら、」と言いかけたヒサキを遮るかのように、

「ゲームしよ」

少女は小さな声で、だがハッキリと言った。

「ゲームって何を……」

面食らった様子のヒサキに、顔の見えない麦わら少女はフツと笑って、

「それ」

後ろで組んでいた手を放し、ゆっくりとヒサキを指差す。

「やるよね？」

その瞬間、俺は確かに見た。ヒサキが目を見開き、驚愕の表情へと移り変わっていく様を。

「おい、ヒサキ。どうした？」

俺の声が届いていないのか、そいつは何やら小声で呟き始めた。なにか様子がおかしい。俺はやや強めにヒサキの肩を揺さぶった。

「おいってば！」

「えっ、あ……ごめん」

顔を上げたヒサキの額には汗が滲んでいた。

「ふうん。面白いじゃん。やってやるわよ」

そいつは声色低くそう言うと、筐体機に向き直った。

なんのスイッチが入ったのかは知らんが、相手は子どもだぞ。

「はは。こいつ大人げないからさ」

振り向いた先に、少女の姿はなかった。テレポーテーション？
んなわけないって。

あいつらが対戦に勤しんでいる間、手持ちぶさたとなった俺はUFOキャッチャーの前に陣取っていた。

観戦するといった選択肢もあったのだが、よく分からんゲームを眺めていてもつまらないだけだ。それにせつかくもらった小遣いだ。いつ何時、気の変わつちまったヒサキによって没収されてしまうか分かったもんじゃない。使えるときに使っちゃおう。

俺はコイン投入口付近に百円玉を積み上げ、景品を品定めすることにした。タイプとしてはアームでそのまま景品を掴み取るというたよくあるパターンのやつだ。

中にはキーホルダー形式の小さなぬいぐるみが乱雑にばら撒かれているのだが、それがなんとたったの三種類しかない。

普段行くゲーセンだったら、これの何倍もバラエティに富んでいるぞ。などと、文句を言うだけ無駄ってなワケで。ならば、この三種類の中のどれを狙おうかという話になる。

その三種類だが。これがまたビミョーなラインナップなのだ。

まずその一に、海賊よろしく眼帯をしたイヌ。続いてその二に、右手に木の棒を持ったサル。そして最後に、左翼に包帯を巻いたキジといった具合である。元ネタは桃太郎なのかね。全くとっていいほど原型を留めていないが。

さて。どれを選ぶうか。というより、どれでもいいな。強いて狙うとするのならば、掴みやすそうなサル辺りか？

とにかくにも。やってみるしかない。百円玉を投入し、ガラスケースへと顔を張り付かせる。まずは横移動だ。

「目標をセンサーに入れて、」

アームの爪と爪の先を小さな点とし、サルの腰辺り中心部分へとそれを重ねるようにイメージする。

「ポチっとな」

ぐらぐらと揺れながら移動するアームがぎこちなく止まる。少し右寄りにズレてしまったが、なんとか誤差範囲内だ。

しかしながら問題は、次の奥移動操作である。この攻略法だが

「ここからは完全に運頼りだ」

すまん。早々に俺の限界が訪れてしまったようだ。ま、横軸だけ合っていれば、意外となんとかなるもんだって。

ささやかな抵抗としてガラス脇へと上体をずらし、横から距離を伺う。こんなもんか。ボタンを離すと、アームは緩やかに下降し、そして景品を引き上げる。って、引き上げる？

マジかよ。本当に取れちまったぞ。

年甲斐もなく込み上げてくる感動をなんとか押しやり、俺は景品口に手を伸ばした。

「ふむ。予定とは違ったが、こいつも中々可愛い顔をしてやがる」
よし、さっそくだがヒサキの奴に自慢しに行こう。悪いが今は、全力で少年の心が俺を支配している。

てなわけで、ヒサキの元にやって来たまではいいのだが。

なんだ、このどんよりとしたお通夜ムードは。

真っ白に燃え尽きたぜ、と言わんばかりの背中はどう声をかければいいのか。

「おい。大丈夫かあ？」

がつくりと頭を垂らすヒサキから返答はない。まあ、そりゃあなあ……。

俺はヒサキのプレイしていたゲーム筐体機、画面左上に視線をやった。そこには二つ並んだゼロが忙しなく点滅している。つまりところのそれは、ヒサキの全敗を意味していた。

「そんなに気を落とすなよ。相手は小学生チャンピオンだったのかもしれないぜ。もしくはプログラマーとかさ」

ヒサキのおさげをピョコピョコといじりながら言ってる。

「うつさい。気休めはやめてよね……」

おいおい。まさかとは思ったが、こいつ本気でショックを受けて

やがる。ただかゲームに負けたくらいでそこまで、なんて言えない雰囲気だよな。

まったく、しょうがない。

俺は俯いたまま微動だにしないヒサキの傍らに腰を下ろすと、ポケットから先ほど獲得した景品を取り出した。

「ほら、やるよ」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔とはよく言ったものだ。そいつは今にもクルックーと鳴きそうな顔でそれを受け取ると、

「何よ。これ」

見て分からののか。ぬいぐるみだ。おまけにキーホルダーにもなる優れものだぞ。

そいつは憮然とした様子で鼻を鳴らし、

「ふんっ。汚いぬいぐるみね」

「なんだと。だったら返せ」

こいつ。せつかくの人の厚意をなんだと思つてやがる。取り返そうと手を伸ばすが、ひょいっと簡単にすり抜けられた。

「ま。しよーがないから貰つてあげるっ」

立ち上がったヒサキはスカートを翻して俺に背を向ける。

そして俯く。

「なんだよ。まだ負けたこと気にしてんのか」

どっかの本で読んだが、こういったプライドの高い奴ほど傷つきやすいって本当なのかもな。

しばらくそつとしておいてやるべきか。そう、イスに腰掛けようとしたその時だった。

「時間よ。あなた達」

なんだあ？ と、背後を見る間もなく、なにやら布状のものを被せられる。

「つうぐー!？」

「手荒な真似はしたくないわ。お願いだから暴れないでちょうだい」
ひどく聞き覚えのある声でした。

「せ、先生、ですよ。今度は何の真似です……？」

そろそろ冗談じゃ済まされないと思うのですが。つか、もうちょつと力を緩めてくれませんか。い、息が来る。

「それだけ悪態がつけるのなら大丈夫よ。こちらミヤコ。これより被験者を確保する」

四方から不揃いな足音が集まってくる。一体なんなんだよ。何が起きてるんだよ。

「寄ってたかつて、そろそろと……」

ヒサキの吐き捨てるような呟きが聞こえた。そうだ、こいつだったら。

「ヒサキ、炎だ。いつものお前の炎でこいつらをなんとかしてくれっ！」

叫んだ瞬間、バチツと火花の散る音がした。同時に、首に激痛が走る。

「安心なさい。死なない程度に電圧は弱めてあるわ」

「ど、どうして、こんなことを」

情けないことに、この現実的な痛みによって俺はようやく理解することになった。

そう。これは俺の想像を遥かに超える最悪の事態だ。今頃になってこの事態に気づいたバカな自分を嘲け飛ばしたいところだが、どうやら早くもタイムリミットの時が近づいてきたらしい。

目の前に靄がかかり、急激に睡魔が襲ってくる。

そして薄れゆく意識の中、おぼろげにヒサキの声が聞こえてきた。

「もう失敗は許されない。今度こそ、今度こそ私は」

The hisaruki game

虹蛇

叩きつけるような雨音が耳朶を打つ。その耳障りな雨音に混じって遠雷が鳴り響いた時、

「おい、アキラ。しつかりしろ」

揺さぶられた俺は、大きく伸びをして顔を上げた。あいてて。未だに首が痺れていやがる。

「なんだ、ここは。教室か？」

首をさすりながら周りを見渡してみる。古色蒼然とした木造の机と椅子たちに、目の前には小さな教壇。次いで、圧倒的な存在感を醸し出す薄汚れた黒板。その上方には校内放送用のスピーカーが設置されており、左脇には旧式テレビを乗せた鉄製の台が見える。中に何やら金庫らしきものがあるような……薄暗くてよく分からんが。灯りといえば、教壇にある金ピカの燭台だけだ。頼りない火だな。あとは時折走る稲光ぐらいか。それにしても凄まじい豪雨である。この島には、いつの間にか嵐なんてオプシヨンがついたんだ？

「どうやら、あたしら拉致されちゃったみたいね。まったく、やれやれだわ」

右を向くと、薄ら笑いを浮かべながら行儀悪く椅子をゆらゆらと揺らすヒサキの姿があった。

「されちゃったみたいって。そんな嬉々として言うことでもないと思うけど」

左から深いため息。頭痛がすると言わんばかりにひたいを押さえる深柳。

とりあえず深呼吸を一つ。そして、心持ち疲れた声で俺は言った。「すまん。状況を説明してくれないか」

これから三人で補修授業を受けますって雰囲気ではないのは確かだ。

だがそいつらは、

「こつちが聞きたいくらい」

んな絶望的な一言を二人揃って八モらないでくれよ。

「先生つてば、こんなところにあたし達を連れ出して一体何をするつもりかしらね」

「はて。楽しいこと、とはいかないだろうな。いくらポジティブに考えても怪談話くらいしか思いつかないぜ」

「陳腐な発想ねえ。貧困とも言えるわ。他に、月並みとも言い換えられるわね。別言すればありきたりみたいなの。さらに換言するとワンプターンって感じ。あとは、」

「なぜそこまで言われなきゃならんのだ」

「そんなの、なんとなくに決まってるじゃん」

誰が決めたんだ。って、お前だろうけどさ。

というか、なんとなくで俺をイジめてくれるなよ……。
しかしながら。

センセイ、か。その響きをきっかけに、俺は先程の記憶を呼び戻していた。

無数の足音。今なお残る首の痛み。手荒な真似をしたくないとか言っておきながら、十分過ぎる仕打ちだぞコレって。

「さつきから先生がどうのって何の話だ？ 彼女がどうかしたのか」
金髪が不思議そうな顔をして訊ねる。

「単純なことよ。先生が私たちをここに連れてきたってだけ。目的は不明」

「先生が、何故そんなことを？」

さあな。そればかりは本人に訊いてみないとわからん。

俺もヒサキに倣い、イス遊びでもしようかと背もたれに体を預けた時、

「噂をすればなんとやらってね。……ご当人様の登場みたいよ」

そう言って、ヒサキは喉奥で微かに笑った。

「ようこそ、ヒサルキゲームへ」

開口一番だ。扉が開いたかと思うと先生はつかつかと教壇まで歩み寄り、いきなりこう言い放った。

無論のこと俺たちとはといえば啞然として先生を見上げるしかなかった。

軍服姿にハーフアップにまとめた髪。いつぞやに見た別人のような姿の先生。

険しい表情をした彼女は、しばらく俺たちを睥睨と見回した後、
「これからゲーム内容において説明をします。私が説明している間はおとなしくしていた方が身の為よ。……この意味、わかるわね？」
その意味はすぐに理解することになった。

何故なら、彼女の突き出した右手には拳銃が握られているからだ。
否応無しに人間を萎縮させてくれる鉄の塊を前に俺は息を呑み、
ヒサキは舌打ちをした。

だが、深柳はいつもの無感動面のまま何やら考え事をするかのように視線を彷徨わせている。

こいつ、肝が据わっているというか、なんというか。

この状況を前によくも悠悠と思案に耽ることが出来るものだ。

「さて、こちらの都合で悪いけどあまり時間が残されていないの。

だから簡潔にこのゲームの概要を説明するわね あなた達、被験者には三日間以内にある事をしてもらいます」

「……ある事？」

齒切れの悪い言い方に、深柳が訊ねる。

「まあまあ、焦らない焦らない。あ、その前にあなた達に渡す物があつたのよね」と

急に快活な声をあげた先生は、鉄製の台の前まで歩み寄ると金庫のダイヤルを回し始めた。

やがて開いたことを示すカチツという音と共に何かを取り出された。

なんだろう、と首を傾げる俺たちの机上に手のひらサイズの石のようなものが並べられた　というより宝石というべきか？

「これは……」

俺たちは銘銘に宝石らしき物を手に取り、物珍しげに眺めた。

その石は長細い六角錐形をしており、平らな面には丸い水晶が埋め込まれていた。

半球状に飛び出した水晶にはアルファベットで『D』と刻まれている。

俺はしばらく眺めた後、ヒサキの方を窺った。

そいつはつまらなそうに頬杖をつきながら指でちよいちよいと石を転がしている。

ん？　俺の物と色が違うぞ。俺の石は透きとおるような青い色をしているが、ヒサキの石は淡い緑色だ。

ならば深柳の石はと視線を移すと、そいつの石は琥珀色の輝きを放っていた。

「あれ。何でお前のだけ光ってんだ？」

どっかに隠しスウィッチでもあんのか。

「イヤ、ただ手に取っただけだが。しかし、なんだこの手によく馴染む妙な感触は……」

そう困惑する深柳に、

「こつも簡単に霊鳴が人を受け入れるなんて……さすがはサードデスター、そう言うしかないわね」

先生は依然として煌く石を深柳の手中からつまみ取ると、独白のように呟いた。

レイメイ？　サード？　またよくわからん造語のお出ましか。

「あら、心配は無用よ。今からちゃんと説明するわ。この綺麗な宝石の名は、通称霊鳴」

「……通称って、まずは正式名称を教えてくださいんですケド」唇を突き出しながら不満げに訊ねたのはヒサキだった。よくもまあ、そんなつつけんどんな訊き方を出来るものだ。先生を刺激して

万一にも撃たれちまったらどうするんだよ。

そんな俺の嘆きに、そいつは小声で「バツカじゃん。あんなの脅しに決まってるわ。刑事ドラマの見すぎよね」などと言いやがった。いやはや。時々ごく稀にだが、お前の図太さが羨ましくなるぜ。

刑事ドラマにこんなシチュエーションあったのかどうか定かではないが。

俺たちのやり取りが聞こえていたのだろう先生は苦笑を唇にたたえつつ、

「仲良きことは美しきかな。あなた達みたいな子がこの世界に選ばれたなんて正直信じがたいわ。では、説明を続けます。霊鳴の正式名称は接近戦専用対人兵器、試作型霊鳴石。ヒサキの持つ霊鳴石はエメラルド仕様の『壺式』、次にアキラ君の持つ石はサファイア仕様の『式式』、最後にリンの持つ石はシトリン仕様の『参式』となります。それぞれ別の宝石で造られているけれど、能力自体は他と変わらないわ。その能力についてだけど、これは実践してみせた方が早いわね」

直後、先生は深柳の霊鳴を握りなおしたかと思うと、折りたたみナイフのクイックオープンよろしく手首のスナップを利かせて振った。

するとどうだろう。シトリンの先端部から橙色に輝くオーラがあふれ出てきたではないか。水飴のようにドロっとしたそれは地面にこぼれ落ちると跡形も無く消えてしまった。

「そう。アキラ君の言うとおりこれはオーラと呼ばれるモノ。生きとし生けるものすべてに潜在する生命エネルギー。霊鳴はその生命エネルギーを具現化し、視認に至るまで引き出す役割を持っている。言わば、オーラ抽出器といったところかしら。ですが、このままの垂れ流し状態ではまともに使い物になりません。なので、こうやって少し気を加えると、」

再び霊鳴を振った次の瞬間、流れるままにあったオーラがみるみるうちに小刀状へと形成されていく。

「このようにオーラを固めることによって刃が生成されます。もちろん、見た目どおりこれには小刀程度の殺傷能力が備わっています。これら形状は持ち主の資質　つまり、簡潔に言えばセンスによっていかなる姿にも変えられることが出来ます。それこそ、使いこなす次第で何千通りにも」

そりやまた、たいした石だ。ここまで来るとどういった造りになっているのかなどという疑問さえも浮かばん。もはやマジックを通り越して神様の玩具レベルだぜ。

そんな俺の冗談に、

「神様のおもちゃ、か。……そうね、あながち間違いでもないかもしれないわ」

先生から感嘆の眼差しが向けられる。

いやいや、んなマジに取られましても。

「さて、これから五分間だけ時間を与えます。その間に霊鳴を起動させなさい。その際、どのような形状になろうとも構いません。……石と一体化するようイメージするのがコツよ。これより霊鳴に関する一切の質問は受け付けないわ。では、始めなさい」

それだけ言っと、話は終わったとばかりに背を向けられてしまった。

あのー、先生？　もう少し具体的に説明をして頂きたいのですが。心の中で呟き、俺は机上に転がった石ころを見下ろした。

いきなりオーラだのイメージしろだのって言われてもなあ……。習うより慣れるにも限度というものがあるぞ。

虹蛇 貳

ともかくにもと、その霊鳴とやらを握ってみる。

ヒンヤリと冷たいそれは、俺に初めましてと挨拶をするかのよう
に一瞬だが青い光を放った。

そいつはご丁寧にもどうも頭を下げた後、先ほど先生が言ってい
たセリフを思い出す。

石と一体化するようイメージし、気を加えてどのような形状でも
いいから武器らしくしろ、だったか。

「イメージ、ねえ」

どうしたものだろう。

この場合、一体なにを想像すればいいのだ。

やはり王道と言うべき剣か いや、それではどうも在り来りで
つまらない。

ここは影の薄い槍辺りにでもスポットを当ててやるべきかな。

遠くからチマチマやるだけでも強そうだしさ。どこからか臆病者
めとの声が聞こえてきたが、それは違う。俺は慎重派なんだ。

なになに、それならばブーメランや弓でも使ったらいいだろうっ
て？

確かに遠距離武器としては中々に便利ではあるが、俺のコントロ
ール力の低さを見くびってもらっては困る。

もし敵に突貫していくヒサキの後頭部にでもそいつを誤ってクリ
ーンヒットさせようものなら、その場で俺の冒険は終了してしまう
こと間違いなしだ。わざわざ、そんなリスクを負う必要もないだ
ろう。

まあ、そういったワケで俺のイメージする武器は槍に決定だ。少
々投げやりなまとめ方かもしれないが、ってこれはギャグのつもりで
はないぞ。まだそんな年ではない。

さて。どうせやるなら、少し大げさにいくべきか。おっほんと咳

払い一つ、

「太陽が昇りて、闇夜を照らし出す神の光となれ！ 出でよ暗黒魔槍グングニール！ でりゃあっ」

「うわ……」

といった、あまり肯定的とは受け取れない金髪の小さな呟きに続いて、横からヒサキによる鋭いローキックが飛んでくる。

「うるさいってーの！ せっかく武器が出来たつてのに気が散って解けちゃったじゃん。……大体それさあ、前半は神の光」とか言っちゃって聖なる武器つぼかったクセに、どうして出てくるのが暗黒なんたらになっちゃうのよ。ちよつとは考えて物言いなさいって」
んなもん、適当にそれらしいものを叫んでおけば雰囲気で察してくれるだろ。どうせ誰も召喚時のセリフなんざまともに聞いちゃいないさ。それと、仲間をそう易々と蹴らないでくれ。

「だって仲間が混乱したときって、そいつを殴って正気にさせるのがフツーじゃん」

どうやらこいつのプレイするゲームでは混乱した相手に超特大級の必殺技をぶちかますらしい。混乱しているのはどっちだと問いたくなるな。

「あのですね。お前さまの蹴りには炎がもれなくついてくるんだぜ、知っていましたか？」

「それはほら、お灸をすえるってよく言うじゃん。だから焰付きなの」

なの、じゃねえ。もういい。お前とは付き合ってられん。不毛すぎる。

俺はタバコの焦げ跡のように黒くなってしまったふくらはぎ部分の煤を払いながら、

「しかし、冗談にここまでリアルなダメ出しをされるとは思わなかったな。さつそく足を負傷。まったく先が思いやられるぜ」

「なんだ冗談か……。アキラならありえるかもと一瞬思ったよ」

そう安堵の息を吐く深柳。

おい、お前なあ。本気で言うほどあつちの世界に染まってるねえっつーの。

「どうだか」

ヒサキが意地悪そうに鼻で笑い、

「ああ、どうだか」と深柳も続く。

まったくこいつらときたら。俺をからかうときだけ良い連携プレイを見せやがる。

そんなやり取りから数分後。

二十四振り。二十五振り。二十六振り 振れども振れども、案

の定なにも起きないわけだが。

はてさて、どうしたものやら。

「あんたまだ出来ないの？」

とつくに霊鳴の武器化を果たしたのだろうヒサキと深柳が身を乗り出して俺の手元を覗いてくる。

そこには当然、数分前と変わらずの石があるわけで。

「ダメそうか……」と心配そうな深柳。

「うーむ、俺のイメージ力が足りないのか。はたまた、俺の生命エネルギーとやらが壊滅的に少ないというのか。……って、言っておいてなんだが、それはかなり恐ろしい事実だな」

腕を組み、とりあえず困りましたとばかりに唸っていると、

「そろそろいいかしら」

言って、先生がこちらへと振り向いた。どうやら自習時間は終了らしい。もう五分も経ったのか。

「さっそく、ヒサキから順に起動をやってみせてもらっわ。いいわね？」

一番手に指名されたそいつは立ち上がると、ツーサイドアップを指でクルクルと弄びながら、本当に 邪悪な笑みを浮かべた。

「ええ、いつでもどうぞ。センス」

そんな挑発的な口調をさらっと流し、

「そう。では、どうぞ」

眼鏡の縁に手をあて、一步下がる先生。それに続いて深柳も静かに席を立ち、その場から離れる。

なんだなんだ。仰々しい。わからんが、一応俺も離れていたほうが良さそうだ。

「行くわよ」

接近なんちゃら兵器と呼ばれるエメラルド宝石を掴んだヒサキは、ふと瞑目し、そしてそれは始まった。

「うっ」

一瞬呻いた後、ブクブクという湯が沸いた時のような音が聞こえてきた。よく見ると、石の内部に液体のようなものが入っている。どうやら音の正体はこいつらしい。

「この音、気泡か？」

俺の隣に佇む小柄な仲間はそう訝しげに言い、自分の霊鳴を一瞥した。

その行動に倣い、俺も手の中にある石ころへと視線を向けるって、あれ。

水の一滴も入ってないぞ。こりやどいうこった。疑問符を浮かべた俺は即座に深柳の霊鳴を盗み見るが、そいつのには満々と液体が入っていやがる。

まさかとは思うが、この液体が入っていないが為に俺の霊鳴は反応しなかったってオチではあるまいな。

だとしたらさっきの俺の努力は一体なんだったのだ……。などと胸中で嘆いていると、不意に顔が熱くなった。

いや、恥ずかしいからといった理由ではなくだ。顔を上げると、そこにはヒサキが立っていた。何を当たり前のことをと思うかもしれないが、問題は掌中にある霊鳴の姿である。

剣……違うな、この造形はどちらかと言えば日本刀に近い。柄に

あたる霊鳴石からはおびただしい量の蒸気と共に先ほどより激しい気泡音が発生している。そしてその刀身部分は豪快かつ大胆に燃えていやがる。そう。あいつの能力、翠の焰ってヤツでだ。

なるほど鬼に金棒もとい、ヒサキに霊鳴だね。などと感心するよりも前に、それにしては、と俺は思う。

何故かな。何故こうもあつさりとこいつは霊鳴石を操れるんだ。ついさつき渡されたのにも関わらずこの姿、いくらなんでも普通とは言えないだろ。これも彼女のセンスによるもの。そう言うのなら、そうなのか？

煙いな。俺はやや後退し、口を手で覆った。

「合格、と言いたところだけど。ヒサキ、あなたにはいささか焦りが見えるわ」

見下ろしながら冷ややかに言っただのは先生だった。対するヒサキは先生をキツと睨みあげると、

「……どの口が。焦っているのは、どっちだったのよ」
吐き捨てるように言い返した。

「意地っ張りな子。あなたは、いつだってそう」

「悪かったわね。あたしの性格は親ゆずりなの」

今にも顰迫り合いの音が聞こえてきそうな睨めっこが始まってしまった。

一触即発とはこのことだろう。

何が引き鉄になったのかは知らんが、二人とも手には禍々しい武器が握られているわけで。

仲裁に入るにも命がけである。狼狽した俺は、隣で立ち尽くしたまま微動だにしないショートボブの白い外套を引っ張った。

「……なに？」

また考え事でもしていたのだろうか、一瞬ビクつとした深柳がこちらを驚いた眼で見る。

何じゃなくてですね、この状況どうするべきか一緒に考えてくれませんか。

「ああ。わかった。ここは任せて」

深柳は軽やかに頷き、

「そ、そろそろ僕の起動テストもいいです……か？」
しかしぎこちなく言った。

ふと、我に返ったのだろう先生は眼鏡をかけ直して咳払いをし、
ヒサキはいえは霊鳴を邪魔くさそうに一振りし、再びただの石こ
ろへと戻すとむくれ面で椅子に腰掛ける。

やれやれ。何はともあれ嵐は過ぎ去ったようだ。

「ごめんなさいね。ではリン、やってみせて」

先ほどよりもいくらか穏やかな表情で言う先生に、

「はい」

先ほどよりも感情を無くした声色で深柳が答えた。

ヒサキの時とは別の緊張感が伝わってくる。どうやら、こいつは
真剣なときほど無表情になるクセを持っているらしい。

霊鳴を握り直した金髪がチラッと不安そうにヒサキを見る。

不機嫌そうなヒサキだったが、深柳の視線に気付くとフツと表情
をやわらげ、

「さつき出来てたじゃん。大丈夫、あんたの思うようにすればさ。
懼れることはないわ、それはただのオモチャだもの」

「……うん」

首肯した深柳は、俺へと視線を移した。

じつと見続けられる俺。なんだよ。だんだんと変な気分になって
いくではないか。ええと、これはもしかして次は俺の番だったりす
るのか？

「あー。まあ、頑張り過ぎない程度に頑張れ深柳」
やつのことと言葉を発した俺に、

「うん」

もう一度ゆるりと首を縦に振り、目を閉じる。

静寂に包まれた教室内に、幾分か落ち着いた雨音が響く。

何度目かの稲光が教室内を照らしたとき、ようやく深柳の石に変

化が生じた。

「くうっ　！」

能面ヅラから一転、苦痛に顔を歪める深柳。

霊鳴からゴボゴボと耳障りな沸騰音が発生し、その先端から流れるドロつとした液体が徐々に見覚えのある固形物へと変化を遂げてゆく。

「へえ、いい武器じゃん。上出来上出来っ」

ヒサキが感嘆の声をあげる。

薄めの琥珀色をした石の先に、これまた同じ色のだらりと垂れ下がるモノ。なるほど、そういうえばムチなんてのもあったなと俺は妙に感心した。マイナーな部類だろうに、何故これを選んだのか。興味あるね。

俺の質問に肩で息をしていた深柳がポツリと、

「わからない。僕は違うものを想像しているのに、造ろうとしているのに。どうして、どうしてよりもよって……」

答えに焦燥感が伺える。何の気なしに尋ねたつもりだったのだが。もしや、気に障るようなことでも言ってしまったのではないだろうか。

気まずい空気を感じとったのだろう金髪が、

「いや、すまない。なんでも　」

顔をあげ、驚いたように目を見開いた。

その視線は俺ではなく、俺の後ろに立っている先生へと注がれている。

先生がどうかしたのだろうか、と振り向こうとした瞬間のことだ。

「やっぱり、ダメね。残念だけどあなたは不合格」

やけに透き通った声と共に、

「……さようなら」

耳をつんざくような破裂音　銃声が鳴り響いた。

虹蛇 参

俺はとっさに目をつむり、そして数秒後にハッとして顔をあげた。一体、今のは

思考が停止しかけたとき、舞った火薬の匂いがツンと鼻について俺の頭を揺り起こした。

撃った……先生が、深柳を？

血の気が失せるよりも先に、俺は金髪へ叫んだ。

「み、深柳、大丈夫か！？」

しかし。

心配をよそに、そこに立つ深柳は平然としていた 無表情のまま左手を突き出して。

「……こんなこと」

ヒサキの動揺を含んだ声色を聞き、俺もゴクリと喉を鳴らして後ずさった。

なぜなら、そいつの突き出した手の平から蜘蛛の網のような模様をした金色のシールドが張られているからだ。

それがどうしてシールドだと言い切れるのかについてだが、深柳の左手の平数センチのところでは時が止まっちゃったかのように動かない銃弾を見れば誰だってそう思うさ。

「な、なんだよソレ。いつの間にそんなもん使えるようになったんだ……お前」

能力や霊鳴なんてものがあるんだ、今更シールド如きで驚いたりなどしないが。

それでもしかし、発砲に臆することもなく、それを事も無げに止めたそいつに俺は不気味さを感じずにはいらなかった。冗談ではなく、俺だったらそういう能力があつたとしてもとっさに防ぐことは不可能だ。俺に限らずとも、一般人ならそうであるハズだ。前にも思ってたがぶっ飛んでいるのは何もヒサキだけではない、こいつだ

ってそうだ。

「わからない」

機械的に呟いて、ゆらりと手を下げると俺の方へ首を曲げる。その瞳は暗く淀み、俺ではない遠くの誰かを見ているようだった。

「わからないって、」

俺はそれ以上言葉を紡ぐことをやめ、視線を逸らした。どうしてか、これ以上訊いてもムダのような気がしてならなかったからだ。

「いや、やっぱいいや」

少々おどけ口調で言った俺に、

「そう」

ポツリと感情を削ぎ落としたかのような声一つが虚しく返って来る。あまりにも冷えきった一言に驚いて、再度深柳へと視線を投げかけるがそいつはもう俺を見ていなかった。

「ふう。……合格よ、リン」

先生はホツとしたように拳銃を仕舞うと、古びた教壇の上へ腰掛ける。

まあなんというべきか、こんな状況だが目のやり場に困ってしまっうね。すまないが、俺はどうあがいても健全たるただの高校生のよっだ。

「……」

合格との響きに感動することなく席へ着く深柳。近場へ落ちたであろう、巨大な雷鳴に瞬きもしない。凍りついた表情は真っ直ぐ先生へと向けられている。

やはり、おかしい。

普段の金髪だって感情豊かな部類には入らないが、さすがにここまで露骨に無を纏ってはいない。

ヒサキはどう思っているのだろうと目配せを試みると、そいつは緩やかに首を振って何がなんだかといったジェスチャーを返した。

「立っていないであなた達も座りなさい」

まるで学校の先生のような発言と（確かに先生といえばそうなの

だが）、続いてタイミング良く鳴り響いたチャイムに俺達は慌てて席へと舞い戻った。

やれやれ、なんともまあ。長年の学校生活で培われたとは言え、条件反射とは悲しいものだ。パプロフの犬とやらにも負ける気はないね。

先生は大人しく席に着いた俺達たちを満足そうに見渡した後、
「いい子ね」

足を組みなおして優しく言った。わずかにだが垣間見えた以前の『お竜先生』らしき面影に、俺は小さくため息をつく。なんとも言えん寂しさに襲われる。きっと全部演技だったのだろう。今思えば名前も含め、わざとらしい振る舞いが多々見受けられた気もする。まったく 今更の話だが。

そういえば。先生の本名は、

「私の本当の名前はお竜ではなくミヤコよ。でも前のように先生と呼んでもらっても構わないわ。好きにして頂戴。さて、これで疑問は解決かしら？ アキラ君」

まさか。

人の心を読むって、あなたはエスパーか何かですか。

「いいえ。私にはあなた達のような能力も、ましてや人の心を読むなんて特別な力もないわ」

「だったらどうして俺の言いたいことがわかったんです？」

と訝しげに訊ねてみるが、

「読まなくともわかるのよ。……いつも通りだから、ね」

いつも通りって、なんら答えになっていない気がするのですが。

「悪いけど、時間がなーいの。ごちゃごちゃ言っているとぶっ放しちやうわよ」

額に怒筋が浮かび上がったところで、俺は即座に表情筋を叩き起こすと、ものの数ミリ秒で笑顔を形成した。

「すみません、なんでもないです。どうぞ続けてください」

右隣から「ビビってやんの。ダッサー」との侮蔑の声が聞こえて

くるが、無駄にカツコつけて死ぬよりはマシだつてーの。

「では、さっきの金色の壁について説明をしなくてはね。……よくききなさい、リン。今、あなたが私の銃弾を防いだものはアキラ君の言うとおりシールドと呼べるもの。そう、正しく言うのなら『GSシールド』これはあなたのリビドーそのものが形而下したモノ。この盾を持つてすれば、どのようなものだって弾くことが出来るわ」

「……はい」

と、わかっているのかわかっていないのか短く返す深柳。

しかしながら、リビドーって……。そう顔を赤らめる俺にヒサキがあきれながら、

「バーカ。単純な男ね。そういう意味じゃないわよ」

なんだよ、そんな棘を含んだ言い方しなくてもいいだろ。だってらどついう意味だ。お前だつてどうせ知ったかぶりのクセに。

「残念でした。あんたよりは知ってるわよ」

「じゃあ説明してもらおうじゃないか」

「いやよ、めんどくさい」

「ほら見たことか」

「何よ」

「何だよ」

「やんの？」

「やってやるうじゃねえか」

「やらないわよ」

「やらないのかよ」

俺とヒサキがそんなジャブの応酬をしていると、

「ああ、もう。いい加減になさいってば、あなた達は。本当にいつまで経つてもあの頃みたいに」

先生はそう言いかけると、しまったとばかりに口を噤んだ。

はて。あの頃っていつのことを指して言っているんだ？

「……なんでもないわ、とにかくあなた達にはリンのGSシールドが必要なのよ。生き残る為にね」

「ふーん。生き残る為に、ねえ。それ以前にあの銃弾をリンが防がなかったらどうするつもりだったのかしら。あたしには偶然にシールドが発生してラッキーって感じに見えたんだけど。アキラ風に言えば、甚だ疑問ってヤツね」

だが、それを返したのは深柳自身だった。

「GS発生は偶然ではない」

そいつは前を向きながら未だ不可解モードのまま淡々に、

「これは必然に基づいてのこと。僕のGSは遅かれ早かれ発生するよう仕組まれている。今回はそれを強制的に早めただけ。そうしなければ、もう間に合わないから。神塚ヒサキ、君にならこの意味が解るハズ」

対してヒサキは、

「……」

無言。

何それワケわかんないとしても返すのかと思ったら、そいつは眉を顰めて何かを考えている素振りを見せた。

やがて、まとまったのだろうか俺のほうを向き、

「間に合わない、ね」

それだけ言っていると腕組みをして椅子へと座りなおす……って、ちょっと待て待て。

意味がわからん、何が間に合わないんだよ。お前達のやり取りの間に何も見出せないわけなんだが。

「ゲームが始まればきつとすぐでもわかる事だわ、アキラ君」

だから、ゲームって一体なにをするんだよ。いい加減に勿体をつけないで教えてくれ。

不明瞭なことばかりが積もって、頭がどうにかなりそうだ。

「そうね。そろそろ頃合いかしら。では、教えましょう。あなた達三人にこれからやってもらうゲームは、『ヒサルキゲーム』。今日を含め、三日間以内にこの学校内に潜むヒサルキと呼ばれるバケモノを探し出して殺しなさい」

また出たか、ヒサルキ。深柳の頭ん中にだけ現れる空想上の生き物だとばかり思っていたが。

殺せとはなんとも物騒な物言いだが、要するによくある時間内にモンスター退治しろみたいなヤツだろ？

そういうゲームなら別段珍しくもないさ。

「ヒサルキ、ですか。で、それってどんなバケモノなんですか？」

俺の問いには答えず、先生はリモコンを取り出してスイッチを押した。

反応したのは鉄製の台に置かれたテレビだった。

旧式過ぎる為か、ぼんやりと鈍重に表示されていく画面。

やがてその画面内がハッキリと映し出されたところで、俺は小さく悲鳴をあげた。

何故なら、そこに映し出された世界があまりにも現実と乖離していたからだ。

斜め上から見下ろす角度で撮影されている赤い部屋。

その部屋がきつと赤いペンキ塗装によるものでないことは、お世辞にもアートとはいいがたい乱雑な血飛沫の痕から容易に察することが出来る。

それだけならまだ悲鳴はあげないさ……血塗られた天井から数人の子どもの死体が吊るされてさえないなければな。

死体は原型を留めていなく、もはやそれが人間なのかどうかさえもし、かろうじて残っている頭部がなかったら、俺はきつと動物か何かの死体だと決め付けていたことだろう。

その凄惨な死体達は、押し並べて臓物が無造作に抉り出されており、空っぽになった腹の中には血染めのぬいぐるみが押し込められている。耳らしきものまでは判別出来るが、何の動物を模したぬいぐるみなのかはよく判らない。

腹に異物を詰め込んだそいつらは、まるで成金野郎が好む趣味の悪いオブジェのようだった。

そして俺は、死体どもが皆一様にしてある一点を見つめていることに気が付いた。

その一点とは、中央のくたびれたソファに座る え？

「こ、これがバケモノ……。これがあのヒサルキだつていうのか？」
こんな。だつて、どうみてもコレは、

「冗談もいい加減にしてくださいよ……。バケモノつて ただの女の子、じゃないですか」

そう。そこに座っていたのは紛れもない人間だつた。

黒いセーラー服に身を包んだ長い黒髪の少女。俯くように座るその子は、大事そうにサルの人形を抱きしめている。

「……………いい？ あなた達。三日間以内に出来るだけ迅速に、そして確実に彼女を殺害しなさい」

先生の発言と同時に、画面内の彼女がゆっくりと顔を上げる。目が合い、逸らすことが出来ずにいると、

そいつはニヤつと口角をあげて、繰り返すように何かを呟きはじめる。

なんだ、なにを言っているんだ？

俺が首を傾げていると、彼女は不意に笑い出した。

ただひたすらに。狂ったかのように。ケタケタケタケタと 。

一瞬にして紅く染まった彼女の瞳を覗き込んだとき、ようやく何を呟いているのか理解することとなった。

彼女は……こう繰り返し呟いていた。

『アキラクンアキラクンアキラクンアキラクンアキラクンアキラクンアキラクンアキラクンアキラクン……』

と。

ずっと、今でも。笑いながら焦点の定まらない瞳で俺の名を呼び続けている。

それはそれは無邪気な子どものように。

特別おまけ あるクリスマスの物語 前編

「へっくし!」

……寒いな。

俺は空を仰ぎ、またかと盛大に溜息をついた。

いつぞやに見た雪景色。先ほどまでの世界とは真逆の世界。

簡単に言ってしまうえばあるゲームの物語冬バージョンといったところだ。

どうして俺はまた冬のゲーム世界を夢見ているのだろう。

もしかするのならば、この夢は俺に何かを示唆しているのではなかろうか？

なーんてな。夢は往々にして支離滅裂なものに決まってる。繋がりや意味なんざあるはずもない。夢にそんなもんを求めるなんて乙女チックな妄想は妹にでも譲るとするさ。

大方、セミのうるさい金切り声に飽き飽きした大脳皮質が無意識のうちに冬っぽいもんを求めてこんな夢を映しているんだろう。

それがたまたま、かぶつちまっただけさ。

そう貧困な夢のボキヤブラリーに苦笑しながら、頭上の雪塊をせつせと払いのけていると、

「ん？」

なんだ、この感覚は。

前にも俺はこんな独白をしていたような。

「明つてば。何こんなところで寝てんのよ、バーカ」

気の強そうな声が聞こえた。いや。強そうな、ではなく、実際に強い奴の声だ。

なんせ、イヤでも耳に残るこの声の主は。

「燈咲、か？」

ベンチから身を起こし、寝ぼけ眼でそいつを見上げる。

予想通りに、そこには神塚燈咲が立っていた。

緑のブレザー衣装に身を包んだ健康的な女子高生。と、ここまでならば聞こえはいいが、いかんせんその性格が。

「ひさきちゃんくあぁ？　じゃ、ないわよっ！　凜を連れて来るまでそこでおとなしく待ってなさいとは言ったケド、昼寝なんてするとは思ってもみなかったわ。大体よくそんな堅いベンチでグースカピース力寝られるわね、信じらんないっ」

えっへんポーズのまま俺を見下ろし、口を挟む余地もなく啖呵を切られる。

ほらな。ご覧の有様だぜ。

どうでもいいが、冒頭のそれは俺の真似をしているつもりなのか。んな、アホ丸出しの言い方はしていないぞ。

「あら。あんたそっくりの言い方じゃん。情けない子どもみたいに甘えたカンジでさぁー」

……いっそ、そこまで言われると清しい気分だぜ。

「燈咲、少し言い過ぎ。明もそんなところで寝てたら風邪ひくよ」
そう苦笑混じりにつんけん娘の後ろから現れたのは、金髪ショートカットの深柳凜。赤い釣り目が特徴的の　　って、アレ？

「お前、目ん玉赤く光ってなかったか」

言つと、二人は顔を見合わせて、

「まだ寝ぼけてるの？」

声を揃えて呆れられる。

はて。

「ほら、三人揃ったしそろそろ行くわよ」

燈咲が笑顔で俺に手を差し出す。それを掴んで立ち上がりながら、
「行くつて。えーっと、何処へでしょうか」

少々疑問だらけで、申し訳なくなってきた俺は自然に丁寧口調へと移行する。

「ったく、凜。思い出し草でも生やしてこのバカに飲ませてやんなさいよ」

「え。そんな種あったかな」

探さんでいい探さんでいい。なんだそのもなく副作用がありそうな危ういネーミングの草は。

「やべえ、マジで頭がスリープモードかましているのかもしれん」

こめかみを押さえる俺に、

「あんたはいつだってスリープモードでしょ」

おさげをいじりながら、イタズラっぽく笑う燈咲。

どうでもいいが、お前って俺をからかうときはホント生き生きしているよな。

俺たちのやり取りを見ていたのか、金髪がクスクスと笑い声をもらす。

「なんだよ、深柳まで」

「ごめん、ちょっと二人が面白くって」

言いつつ、何故か俺も笑ってしまった。冷たい風の舞う寒空の下、ベンチの前でデコボコ三人組が笑っているのだ。端から見れば変な集団に見えること必至だろう。

さて、それじゃあそろそろ人目も厳しくなってきたところだし。

これから何をするのか、我らがリーダー様に問うとしようかね。

「うーんとね。じゃあ、ヒント。今日は何の日かしら？」

やれやれ。

「ヒントではなく、即座として簡潔な答えを要求する。これだから女はまどろっこしくて敵わなん」

言った直後、凄まじい速度のフレイムブローが俺の腹を抉る。

「ぐふう……な、なーんてな。えっと、深柳。すまないが助け舟を頼む」

膝について腹を押さえる俺に、無感動な少年が（仲間が仲間殴られているんだ、もう少しリアクションを取ってくれてもバチは当たらないと思うが）、これまた無感動に空を指差す。

「うえ」

示す方向へと顔を上げる。鈍重な灰色雲が、体軀には見合わんspiroで空を駆けている。これから雨でも降りそうな雰囲気ではあ

るが。

んで。それが、どうした。

「あっち」

また別の方向　商店街へと指差す。その指の向くままに視線を傾けると、俺はやたらに納得した。

「なるほど、ね」

はなっからそれを指してくれたら早かったのに、とは思うが。いやいや、ここまで大々的にやっていたんだ。気付かない俺もどうかしていたな。

そう、街はクリスマスムード一色。豪勢に装飾されたモミの木に、クリスマスイルミネーションとやらでライトアップされた店たち。どれも様々な自己主張をしており、客を呼び込もうというよりも、ただ単に雰囲気を楽しんでいるように見える。

そして耳を済ませば微かにだが定番のクリスマスソングが聴こえてくる。こういった曲が流れると、ああそう言えば今年ももうクリスマスか、といった気分になるね。

それにつけても、クリスマスソングってもんは昔から代わり映えがしないよな。新しい曲が入ってきたとしても往々にして一過性で、残る曲は結局いつものヤツだ。単純に俺が流行に疎いだけなのかもしれないが。

まあ、いいさ。とりあえず、俺たちもあの行き交う人の流れに身をゆだねようではないか。

チビっこい金髪の頭にポムっと左手を置き、仁王立ちする燈咲の肩に右手を回して、

「よーし、おめえら俺に続けえ！」

俺たちは勢いよく商店街へと繰り出して行った。

「……………」

場所は寂れた喫茶店。

俺は燈咲のフィヨルドランドペンギンも凍っちまいそんな視線をかわしながら、アイスカフェオレを一気にストローで飲み干して、「だから、悪かったって。そう睨んでくれるなよ」

搾り出すように言う。ちなみにあれから五分も経っていない。

「あんだねえ。何をするかも決めてないのに、勝手に飛び出されても困るわよ。計画も無くぶらぶら歩いてもつまんないじゃん」

とは仰いますがね。とっくにお二人さんで決めてくれていたものとばかり思っていたワケで。

「決まっていなくてーの。当日三人で決めようって、昨日言ったじゃない」

言っただじゃない、と言われましても。そんな約束した覚えもないぞ。ちよつと待て。本当に昨日それ自体を失念してしまったようなのだが。

先ほどは寝ぼけていたからとまだ言い訳が出来るが……おかしい。俺が頭上に疑問符を形成し始めたところで、

「確か、四つくらい候補があがっていたハズ。その中から決めよう」
メロンクリームソーダのアイス部分をスプーンで突付きながら、隣に座る金髪が提案する。

ええと、それでその四つって何があるんだ。

「明もノリノリで候補出してたじゃん。あんだ、もしかしてボケてきたんじゃない？」

そんな歳でもねーよ、と一笑に付せればいいんだけどな。記憶から昨日がごっそりと削げ落とされちまったかのような感覚でね。わりと本気で憂慮してしまうレベルだ。お前達と会ってあの鐘の音を聴いたところまでは覚えていたのだが。

「それ、おとといの話」

深柳ですら心配の表情を浮かべる。

……まいったね、どうも。いくら海馬のヤロウに訊ねても、んな記憶持ち合わせてませんってさ。

「ま、いいわ。それはそれとして。その四つの候補の話なんだケド」
おい。また雑に切り上げてくれたな。仲間の深刻な悩みだぜ。もう少し親身になってだな、

「そうね。じゃあ、親身にもう一度ボディブローをかましてあげようかしら」

「という、ただの独り言だ。構わん、続けてくれ」
っつーか。

今思えば、お前のそれで昨日がぶっ飛んだのかもしれないぞ。なんだっけ燈咲の能力。記憶ぶっ飛ばすことの翠の焰とやらだったか。大体合ってる」

「ちよつとお！ 凜まで変なこと言わないでよねー。それに、明もしつこいわよ。昨日の記憶なんてどーでもいいじゃん。それよりも、今日をどう素晴らしく生きるかが大事なのよっ！」

紅茶に付属されていた子犬さん模様のティースプーンを俺に突き出しながら、あたし決まったわねといったオーラを醸し出しているところすまないが。別にそんなに決まってないぞ。

「う、うるさいわね。そんなことより、いい加減候補の話をしましよ。えっと、カラオケにゲームセンター、ウインドウショッピングに遊園地といった案が出ているわ」

今日び遊園地って。子どもじゃあるまいし。

「お約束だけど、あんたがその遊園地を提案したのよ。別の味のチヨロスを三人で買って食べようぜってさ」

ええと、確かそれはノリノリで？

「そ。ノリノリで」

これはまた、すまなんだ。

「で、あたしから言わせると遊園地は無理ね。このド田舎世界にそんなもんないし、あったとしてもそんな大金持ち合わせてないわ。妥当な線は他三つね」

っつーむ。

ゲームの世界に来てまでゲームセンターで遊ぶというのもなあ。

どうせ、この案は燈咲だろう。なんとなくだが、そんな予感がするぞ。

「……いーじゃん、別にイ」

意外にも恥ずかしそうにそっぽを向いて紅茶をすする燈咲。

面白いもので。

こいつが晴れやかな顔をすれば俺の表情は曇り、こいつが曇った表情を浮かべると、俺の表情はたちまち晴天へと変化していく。いわゆる一つのシーソーゲームみたいなものだ。別に競ってはいないけどな。

いくらか気分を良くした俺は、未だにアイスと格闘している深柳に尋ねることにした。

「お前は何かいい？」

「ん。僕は、最後に色々なお店を見て回れたらそれでいいかな」

するつてーと、ウィンドウショッピングは深柳の提案か。らしいと言えはらしいかもな。

「じゃあ、それまではカラオケに決定ねっ。夕ご飯も面倒だしその中で食べちゃいましょ」

俺は別に何でもいいけどさ。お前はいいのかよ。せっかくのクリスマスなのにそんな簡単な計画で。

「結構な計画じゃん。たかだが、学生の身分なんだし。こんだけ遊べれば十分よ。そうよね、凜」

「うん」

締めにとつて置いたのであろうさくらんぼを、もぐもぐと口の中で転がしながらコクリと頷く深柳はともかくとして、燈咲みたいな美人さんがこういった庶民派だと高感度もウナギ登りってなもんだな。イメージではもっと高級そうな場所でしか遊ばないように伺えるが。

「そうでしょー。強いし可憐だし天才なのに、贅沢を言わない謙虚な心をちゃーんと持ち合わせる。そんじょそこらの一般人とはそもそも人間としての格が違うのよね」

いやはや。それさえなければな。せつかく高感度が上がったというのにその一言でだだ下がりだぞ。

そう嘆息する俺に、燈咲がクスツと笑った。

「ほーらね。これでプラスマイナスゼロ。人の印象なんて簡単に決まるものよね。まっ、今度あたしに変なおべっか使ったら毎回こうやって返すから。それじゃあ、いい時間だし早速歌いに行きましょう」と言つて、颯爽と立ち上がり会計伝票をマスターへ渡しに行く。

何を話しているのだろうか、談笑しているその後ろ姿に一つ思う。もしかして、俺は少しだけ燈咲の事を誤解しているのかもしれない。いと。そりゃあ会つてまだ三日も経っていないし、分からないのは当然のことかもしれないが、それでも少しは分かった気でいた。しかし、それはきつとこういうジャンルのヤツなのだろうという曖昧で小さな枠に押し込んでいただけに過ぎない。

こいつと言葉を交わすにつれ小さな枠がことごとくぶち壊されていき、その都度に俺は。

「もう、ブツブツとうっさいわねえ！ あんたのそれ長いんだもん。ほら、凜も片方の手を持つて。引きずって行くわよ」

おいコラ、人がせつかく良い具合で物思いにふけていたというのに。

「心得た」

唯々諾々として俺の手を引つ張る深柳。お前もそんな簡単に心得てくれるなよ。

「……ハア」

なんだろうね、これは。捕らえられた宇宙人が、はたまた徘徊行動に終止符を打たれたご老人か。出来ればまだ前者の方がありがたいね。

なすがままの状態でそんなことをぼんやりと考えつつ、店を出る直前に俺は壁に掛かった古時計へと視線を飛ばす。

時計の針は午後二時ちょうどを指していた。

特別おまけ あるクリスマスの物語 中編

二十分後、適当なカラオケ店を見繕って入店した俺たち。

店内は明るく、やはりこちらでも周囲に負けずとクリスマスモード満載の装飾を施している。

「おや、店員さんが見当たらんぞ」

カウンター越しにキッチンをのぞいてみるが、カーテンに遮られている。

入店した際、カランコロンとドア鈴が鳴ったハズなのだが、待てども店員の姿が現れない。

燈咲が、「おつかしいわねえ」ともう一度ドアを開いてドア鈴を鳴らす。

が、音沙汰なし。

「……もしかして、忙しい？」

こういう店に慣れていないのか、キョロキョロと見回しながら居心地悪そうに言う金髪。

「まーさか。そんなハズないじゃん。まだ三時前なんだし。混むのは夜の七時くらいからでしょ」

俺は脇に配置されたソファにどかと座り、

「まあ、大方ちようどのタイミングでドリンクやら料理を部屋に運びに行ったところだろうさ。」

時間はまだまだあるんだ、別に急ぐこともないだろ。少し待ってみようぜ」

待つ間に何か暇つぶしのモノはないかねと、横にある小さなクリスマスツリーの飾りに視線を向ける。

お……なんだ、コレは。

青い紙切れ 短冊、なのか？

それには拙い字で『ごにんずつとみんななかよしでいられますように』と書かれていた。

「なにそれ、クリスマスツリーなのをお願いごとの短冊う？

バツカバカねえ。七夕と間違えてるんじゃないのかしら、このお嬢ちゃん」

覗きこみながら呆れ口調で言う燈咲に、

「でも、とても可愛いおねがい」

そう静かに呟く深柳。

そんな二人を見上げて俺は思ったね。

「……なんつーか。お前らってさあ、つくづく対照的だよなあ。見ていて飽きないコンビだぜ」

笑いながら言っていると、二人はきょとんと顔を見合わせて、

「そう？」

と同時に言い放った。

ヘンな所は気が合うんだよな、こいつら。

そんなこんなで時間を潰していると、二階から鉄製の階段を軽快に鳴らしながら店員さんがやってきた。

しかし、まあなんだ。これがまた凄まじく美人な店員さんだったのだよ、諸君。

「あら、やっと来たみたいね」

即座に燈咲がカウンター前に移動する。

その後ろにスツと深柳が続くが、俺はというとソファから身を乗り出して店員さんを眺める作業に徹していた。

ほほう、これはまた……長い黒髪が大和撫子のように実に素晴らしい。

後ろで軽くしばっている点も奥ゆかしくてポイントが高い。

そして格好なのだが、セーラー服の上にフリフリのエプロン、片手にはお盆、もう片方の手にはお玉といった男のロマン要素が見事にブレンドされており、まさしくそれは匠の技術と言ってしまっても過言では　って、ちょい待て。

セーラー服だと？

ならば、俺たちと歳があまり変わらないということか。中学生にはみえないし、高校生バイトなのだろうか。

ふーむ。その割には幼い顔つきをしているようだが、と目を細めて眺めていると、その少女はハツと俺たちに気付いた様子で、

「な、なんということなのでしょう……っ！」

バックに衝撃の青い稲妻を携え、ガツシャンと抱えていたお盆とお玉を同時に落とす。

「わたくしとしたことが、お客様を待たせてしまうなんて……っ！
ああ、睨まれております。怒り心頭なのですっ！ 暗雲低迷ですっ！」

暗雲 ええと、なんだって？

「あのー……別に睨んでませんケド」

と、眉をひそめながら言う燈咲。

「はわー！ なんとという、なんとという……っ！」

そいつの醸し出すあからさまな不機嫌オーラにビビったのか、うっすら目に涙を浮かべて足をガクガクと震わせる店員さん。

コイツを恐がる気持ちはわからんでもないが、そこまで大げさなリアクションを取らなくても。

「何？ この人」と、能面ヅラに疑問符を浮かばせる深柳。

「なんだろうね」

まったくもって。

しっかし……こりやまた凄まじい娘がいたもんだな。一体どういった環境で育ってきたのだろうか。

俺たちが理解に苦しんでいるという様をポカン口で表現している
と、

「こうなったら鮮血の土下座でなんとかお客様にご慈悲をば……！
あ、ご慈悲をば……っ！」

いやいやいや。土下座って。しかも鮮血というオプションつきか
よ。それとなんで二回言ったんだ。

そう頭の中でツツコミ妄想をしつつ、ノンキに苦笑していたのだ
が。

スカートをたくしあげ、髪をかきあげ、「いざ！」と言って土下
座の姿勢に入ったところで、

あ、この娘はマジもんだなと確信し、俺は慌てて立ち上がった。

「待ってくださいって、俺たちさっき来たばかりですから、そんな
土下座なんてされても困ります！」

気にしてませんから顔をあげてくださいよ。ほら、燈咲も」

そう仁王立ちのそいつに振ったのがどうやら間違いだったらしく、

「甘い！ 甘すぎるわね、あんた。時間はお金と同義なのよ。

あんたはあたし達の時間を奪った、すなわちお金を奪ったドロボ
ウと一緒にすること。

この不手際、土下座程度で許してもらおうなんて本気で思ってる
ワケえ？」

「は、はわわ。すみません……っ！」

おい、くら。

何を言い出すんだこの女は。別にドロボウなんて物騒なワードを持ち出すほどの話じゃないだろ。

あの深柳でさえ、驚きの表情を燈咲に向けて、

「燈咲……いくらなんでも、それ言い過ぎ」

「そうだぞ、そんなに怒るコトじゃないだろうよ」

だが、そいつは両手をバツと広げて俺たちを制止した。

「うるさい。あんた達は黙ってなさい」

ヒイツと、抱き合いながら退く俺と深柳。

今、一瞬目が赤く光ったように見えたぞ。こええ。

「いい、あんた。そこで大人しく待ってなさいよ」

「は、はひっ！」

燈咲が獲物を狙うヘビクイワシのようにひたひたと無言のまま近づいていく。

対するは、恐怖で体を震わせながら目をつむり、腰を抜かしたように床にへたり込む店員さん。

「……どうしよう」

腕の中で金髪少年に意見を求められるが、

「さて……どうしたもんかね」

と、答えるのが精一杯だった。どうするもなにも、見届けるしかあるまいて。

やがて少女のもとに辿りついた燈咲は、にやあと悪魔のような笑みを浮かべると、

「さあ、覚悟することね」

ペロリと舌なめずりをした。

そして 俺たちが見守る中、ソレは始まった。

「どっせーいっ！」

ぽによん。

「はにやあああっ！」

叫ぶ少女。

「……やっぱり。思った以上に大きいわね、でも垂れてないでちゃんと張りがあるわ。ム力つく」

おい。

「何をしてやがるんですか、燈咲さん」

俺のツッコミに、

「なにつて、見てわかんないの？ 胸を揉んでるのよ。」

ねえねえ、すごい大きいわよこの子。だと思ったのよねー、予想的中って感じ！」

って感じ！　じゃないだろ。

「何を食べたらこんなになるのかしら。肉？　肉なのね」などと首を傾げながら揉み続けるセクハラ娘を、

「いつまでやっとなるんだお前は」

とりあえずひつpegしておく。

「……はあ、はあ」

なすがままにされていた店員さんはグッタリとしていた。

息を荒げてはいるが、まあなんとかご無事なようだ。……多分。

「すみません、こいつナニがアレなもんでして。察してやってください」

代わりに謝ってるというのに、そいつときたらあっけらかんと、

「別にいいじゃん。女同士なんだしさあ、スキンシップよスキンシップ。男にはわからないわよね、こーいうの。」

はい、今のでチャラにしてあげるわ店員さんっ。それじゃあそろそろ歌いたいんだけど部屋とってもらえるかしら」

バチンとウインクをかますと、店員さんは乱れたエプロンを着なおして、

「は、はい。お許し頂き光栄です……」。

お部屋なら二階の一番奥の部屋を、ど、どうぞ」

と、ポツと頬を赤く染める。

いやはや、なんだろうねこの反応は。まさかと思いたいところだが。

「あはははっ。あんたノリ良いわねー。好きよ、そういうの。

明も凜も、ちったあこのノリを見習うべきだわっ」

ビシッと指差すその腕を、サタデーナイトフィーバーよろしく無言で上へと持ちあげてやる。

ったく。こいつも、またそうやって誤解されそうなことを言っていると、

「はっ……」

ほらな。

案の定、『好き』とのフレーズに店員さんの顔がまた茹でダコのように変化する。

あまつさえ顔を両手で覆って、イヤンイヤンと首を振りはじめたぞ。もはや、重症の域だな。

仕方ない。ここは一つ空気を読んでやるとするか。

「あー。俺ら先に歌ってるから、お前はゆっくりでいいぞ燈咲」

「え、なによ。イキナリどーしたのよ。あたしも一緒に行くってばっ」

そう階段をあがろうとした俺達のもとへダッシュを試みた燈咲のスカートを、ガシッと捉えるバイト少女の手。

「……なっ!？」

「わたくし、あのような大胆なことをされたのは初めてなもので、その……続きは優しくお願いします」

ようやく事態が飲み込めたのか、引きつった顔をする燈咲。

「ちょ、ちよつとあんたウソでしょ……」。

違うわよ! か、勘違いしないでよねっ、あたしにそんなシユミないから!」

「わたくしの愛用する辞書に書いてありました。

その発言もまた、屈折した愛情表現の一つだと、そう存じ上げる次第でございます……っ」

「ひいひい! ぞ、存じ上げてるんじゃないわよっ、このおバカ!」

こいつの困ってる姿を見ているのも中々に気分の良いものだが、そろそろ頃合いだろう。

「んじゃ、お邪魔なようだし、今度こそ俺たちはお先に」

そう言って、無表情に二人のやり取りを眺める深柳の背中を押す。

「……待って」

「ん？」

なんだ、お前。ああいう組み合わせが好きなのか。
俺が冗談ティストに言っと、

「違う」

ぴしゃりとマジメに一蹴された。

はて。じゃあ、どうしたんだと訊ねようとしたとき、深柳は不思議そうに俺を見上げて、

「この感じ、どこか懐かしい。あの人も、この場所も、この光景もみんな見たことがあるような気がする。

……明は、どう思う？」

> i 2 6 9 3 2 — 1 7 6 1 <

長いまつ毛を揺らして一つ瞬きをする。そんなに見つめられてもよ。

どう思つものにも、俺はお前の求める答えを持ち合わせていないぜ。

だから、本心そのままこう答える。

「なんじゃ、そりゃ？」

つてな。

お前は何か思い当たるふしがあるのかもしれないが、俺はこの力
ラオケ店も巨乳なヘンテコ店員さんも全てが初見だ。

ご期待に添えず誠に申し訳ねえ話だけれども。

金髪は意外にも（もう少しこの話題を引っ張るのかと思っていた
のだが）あっさりとした様子で、

「きつと気のせい……行こう」

そう切り上げ、静かに歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5980a/>

ヒサルキゲームの物語

2011年7月9日03時20分発行